
銀色クリアデイズ

伊吹ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色クリアデイズ

【Nコード】

N7604I

【作者名】

伊吹ノア

【あらすじ】

いつの頃からか地球には、魔物ビリットと呼ばれるつくりものの世界で思いを馳せるしかなかった者達が跋扈するようになっていた。彼らは人間達を滅せんとする地球が送り出した災厄の一つと言われているが、対する人間達も進化の過程において、それにあらがう術を見出し出していた。それこそが正しくも魔法のような超常の力……曲法カーヴであり、その力を内に秘めた若い世代……生徒コトデイスを育てるための機関、だった。その機関の一つ、『紅葉台高校』のある町、紅葉台。その名とは裏腹な桜色彩る春の季節に。「ヒーローになる」という約束

を守るために、生まれ故郷である紅葉台へと帰ってきた、紅恩寺吟くおんじぎ也んやという少年がいた。明日からの高校生活に期待を膨らませて故郷へと降り立った吟也は、懐かしさと物珍しさもあって立ち寄ったジヤンクシヨップで、衝撃的な出会いをすることとなる。手のひらに乗るほどに小さな、ちよっぴりおかしな関西弁を喋るクリアという少女と。 / / 『W e l o v e y o u 』との齟齬を修正しました。

1、プロローグ

僕は、ヒーローになりたかった。

誰からも好かれ、愛されて。

大切な人みんなをずっと好きだって言い続けられるような、そんなヒーローに。

それなのに。

僕の信念の『剣』は、弾かれてしまった。

手の届かないところへと滑り、それを取りに行こうにも、僕の首筋には相手の剣先がびたりと添えられていて、身動きができない。

チエックメイト。

僕の負けだった。

これでもう、僕はヒーローにはなれない。

多分それは、その刃によって首を落とされることと同義で。

きっとそれ以上に悲しく、無念なこと、だったんだと思う。

だって…… 負けた僕は、全てを忘れさせられてしまうのだから。

ずっとずっと、今までヒーローになるために頑張ってきたのに、

僕はそのたったひとりにはなれなかった。

世界のための犠牲になるヒーローには、たったひとりしかなれない。そのひとりになれなかった以上、僕はそんなヒーローによって救われる世界に帰り、

何思うことなく惰性に生きていく一般人、その他大勢に組み込まれていくしかないのだ。

「どうして本気、出さなかったの？」

目の前の、たった今、たったひとりのヒーローになった人物が呟く。

どうして、だって？

何を今更、僕にそんな事を聞くんだろう？

少なくとも僕は、親友で、愛すべき人でもある君に、本気で斬りかかることなんできるわけないって、僕以上に言ってる本人が良く分かっているはずなのに。

「どうして僕ひとりが世界のために犠牲にならなあかん？ そう考えたら、何もかも馬鹿らしくなってな」

敗者となった以上、僕の言葉はどんなものだろうと、言い訳にしかならないんだろう。

だから僕は、嘘をついた。

そんなヒーローの役目を、君に取られてしまったことが悔しくて。守りたい、守らなければならぬ君に、その役目を背負わせてしまった自分がふがいなくて。

何より…君にそう言われたことが悲しくて。

「そっか、うん。そうだよな、それでいいんだと思う。だってあなたには、生きていてほしいから……」

君の嘘と悲しい顔が、心に痛かった。

君に全てを背負わせるわけにはいかないという気持ちと、そのために君へ刃を向けなくてはならなかったという……そんな矛盾。

それこそ血を吐く思いで、僕は僕なりの本気で立ち向かったのに。

僕は、負けてしまった。

だから、口から出る言葉も、心のうちの想いも全て、言い訳にしかならないんだと思う。

どんなに努力しても結果がついてこなければ…意味がないのと同じ

ようじ」。

「生きて欲しい……か。分かったよ。どうせ僕は全てを忘れるんや。せいぜいだからだと、生きていつてやるわ…お前が救った世界でなぶつきらぼつに答える僕。」

その声は震えていたかもしれぬ。

悔しくて情けなくて、認めたくなくて、この後に及んで駄々をこねる子供みたいに、そんなの嫌だって今にも叫びだしたかったから。

「……うん、約束だよ」

でも、君は僕のそんな気持ちに気付かない。

だって君は、自分を犠牲にすることに、何の疑問も持たない人だから。

君が犠牲になることが嫌だって、泣き出したいこの感情も、分からないんだと思う。

そう思うと、余計に悔しくて悔しくて。

あまりにも悔しかったからなのか……僕は気付いたんだ。

負けたからって、どうして勝者の言うことに、従う必要がある？って。

全てを忘れるということも、君が世界のために犠牲になることも、考えてみたら馬鹿げた話じゃないかって。

多分、それに気付いたときから、僕の本当の戦いが始まってたんだと思う。

「ああ、約束……やな」

だから僕は天邪鬼の笑顔で、約束の指切りをした。

どんな手を使ってでも忘れてやらねえ。

お前の犠牲で世界を救われるくらいなら、その世界で生きる意味なんて僕にはないんだって、そんな意味を込めて……。

1、プロローグ（後書き）

プロローグです。本編とは特に関係ないかも？

2、クリアとの出会い

『次は、紅葉台、紅葉台』

「……………」

僕が目覚めたのは、そんな独特のイントネーションの、でもこ
うじゃなきゃ違うよなって思える、アナウンスの声でだった。

あくび混じりに辺りを見回し、自分の降りる駅が次だと認識する。

（景色を楽しむヒマもなかったなあ……………まあ、壁ばかりだろうけど）

東京新宿駅から私鉄に乗り換えて、あとは一本だと安心したのがい
けなかったらしい。

春先の心地よい陽光と、ほんのり暖かいオレンジ色の座席にとって
は、僕を夢の世界につれていくことなど、容易なことだっただろう。

（しかし、いかにも夢だ！ って感じの夢だったな）

夢を覚えること自体、僕にとっては珍しいことではあるのだけど、
ようはそれだけ面白い、インパクトのある夢だったのだろう。

舞台はもちろん、どことも知らない幻想的な雰囲気が充分伝わって
くるファンタジーな世界で。

思い出せる登場人物は、自分の視点と重なる、結局マトモに覚えら
れなかったことへのあてつけなのか、えせっぽい関西弁の誰かとも
う一人。

そのもうひとりとは、なんていうか、自分を褒めてやりたいくらい
の、かわいい女の子だったと思う。しかも、結構タイプだった。

そんな女の子とお互い剣を持って戦ってるなんて、あまりに突拍子もなく、夢じゃなきゃありえなさそうなシチュエーションだし、結局負けてるところなんて意外と自分の思い通りにはならないまさに夢って感じがする。

ヒーローだとか、世界を救うだとか、恥ずかしげもなく当たり前にできると思ってるところなんか、ある意味僕らしいと言えばそうなのかもしれないけれど……。

なんとなくそれは、これから始まる新しい生活への期待感とか、確かに僕にとって未だに夢ではあるけれど、世界を救うというか、守ってるヒーローが、身近なものだったりするせい…なんだと思う。

世界がそう変わったのはいつだっただろう？

少なくとも、僕が生まれる前よりは前だったんだろうけど。

いつの頃からか、この世界には、人間でも動物でもない別種の生き物、

【^{ヒリット}魔物】と呼ばれる、一昔前まではつくりものの世界で思いを馳せるしかなかったものたちが、跋扈するようになった。

冗談みたいな話だって、長年生きてる大人は言うけれど、初めからそうだった僕たちにとっては紛れもない現実でしかなくて。

それは、増えすぎた人類を滅せんとする災厄のひとつ、とも言われていた。

つまり、地球…この世界自体が生きていくために害になってきちゃってる人間を排除しようとしている、ということらしい。

人間が環境を守ろうが守るまいが地球は別に気にしてないかと思いきや、意外とそうでもなかったんだろう。

でも、そこでなすがままじゃなかったところが、世界が誕生した時くらいからいるゴキブリよりたちが悪い人間様、なわけ。

目には目を、ということなのかどうかは分からないけど、

正しく魔物やモンスターたちに対抗するために人間が得た新たな進化は、

分かりやすく言うならば魔法っていい超常の力、だった。

【曲法】^{カーヴ}と呼ばれるその力は、【魔物】が出現するようになって以降の若い世代に主に備わっており…大人たちは、彼らを育てる機関を作った。

そのひとつが、今僕が向かっている場所、【国立紅葉台高校】で、そこに通うものたち…【生徒】^{ユードイス}こそが、今の世界を守っているヒーローそのもの、だと言えた。
身近にいるっていうのは、つまりそういうこと。

そんな僕、紅恩寺吟也^{くおんじ・ぎんや}は、この春中学を卒業し、

はるばる神戸からそこへ通うべく、やってきたのだ。

ずっとずっと夢だった、ヒーローになるために。

幼き頃の、『絶対、紅葉台の生徒になってやる！』っていう、その約束を守るために。

そう宣言して去った、懐かしきこの生まれ故郷に…僕は帰ってきたのだ。

『紅葉台へ、紅葉台へ』

僕は、そんな到着アナウンスを背に、電車を降りる。

都心からは外れた、県境の緑多き山間の駅ではあるが、【魔物】に
対抗する数少ない拠点と言われるだけあり、一面鏡張りの景色の向
こうには緑に染み入る形で、いくつものそれらしき建物が見えた。

また、近場に視線をやれば、【曲法】の力が、科学の力と融合して
さらに進化を遂げていることを如実に表わすかのように、小さい頃
ここに住んでいたときにはなかったはずの、近代的できらびやかな
エスカレーターがそこにあった。

ちよつと緊張しながら下って行くそれに足をかけると、

どこからともなく七色の光が降り注ぎ、両脇を囲むようにして続い
ている銀びかの壁に、

『ようこそ、紅葉台へ』なんて文字が現れる。

それだけで、ああ、本場へ来たんだなーって実感しつつ。

つい、田舎者みたいにあたりをきよるきよる見回しながら、僕はバ
ス停へと向かう。

おぼろげな記憶ではあったが、かつて見た覚えのあったそれは、ち
やんと同じ場所に残っていて。

紅葉台高校行きのバスの時間まで、まだちよつと時間に余裕があり
そうだったので、

せっかくだから近くをぶらぶらしてみようかな、なんて考える。

「確か、向こうにでかいスーパ―があったな」

これからの生活にも必要になってくるだろうし、いろいろあつて時間を潰すにはもってこいだろう。

僕は呟き、バス停から少し歩いた先に見える赤い大きな建物に向かって歩き出す。

すぐに辿り着いたその場所は、スーパーと言うよりショッピングセンターと呼んだほうがいいのかもれない。

『道志摩屋』。

ここでしか聞いたことのない店名だったけれど、これだけ広くて一通り揃っていれば、そんなことは問題じゃないんだろう。

「お、ジャンク屋まである。さすが紅葉台のお膝元。こんなの昔なかつたよなあ……」

そんな事を思いながらも店内を散策していたら、目に飛び込んできたのはいわゆる機械の部品とか、何の用途で使うのかよく分からない骨董品とか、鉄くずとか古本とか家具とか、どちらかと言えばリサイクルショップで言ったほうがいいのかもれない楽しいげな店を発見した。

『自分を大切にしたいのなら、まわりにあるもの、全てに感謝しろなんて、

どこからか持ってきたような言葉が、親父の口癖で、紅恩寺家の家訓でもあったから、

こういう所来ると、何だか妙にムズムズするというか、わくわく

した気分になる。

たぶんここみたいに、古いものとかいろんな機械の部品とかが、常に山になつてるような、そんな家庭に育ったせいもあるだろうけど……。

個人的にもずっと同じものを使い続けてしまう性格で、『メカいじり』が趣味な僕だから、
こういうジャンクでカオスな場所が、結構居心地がいい、というのもあつた。

これは、とてもいい場所を見つけたかもしれない。

「…………え？」

そんな風に、半ば高揚してそんな事を思っていた僕だったけど。
何気に目に入ったその場所に、気分が丸ごとぶっ飛ぶような、一気に氷点下まで下がるような、もの……というか、生き物？がいた。

そこは、ジャンクの山のとっぺん。

そいつは、そこに器用にもちょこんと座りながら、目を向けた僕のことを見ている。

「じーっ」

「…………」

そいつは言うなれば小さい人、それも女の子の姿をしていた。
キラキラうるうる光ってる目は、ルビーみたいな赤で、胸元に流れるおさげ髪は、薔薇のような強い、これまた赤色をしている。

肌は白すぎず、本物の人の肌って感じの柔らかそうな色をしていて、
着ている黒のツーピースとよく似合っていた。

首もとの前かけみたいな白いえりと、ケサランパサランみたいな一

対のぼんぼんが、
よく分かってるじゃないかって感じた。

混乱しているのか、思わず事細かに描写してしまったが、簡単に言えばリアルなフィギュア？ってところだろうか。
なんであんな所にいるのかは知らないが、いい仕事をしている。
きつと、かなり値を張るものなのだろう。

あまりジロジロ見てるのもなんなので、僕は視線を逸らし、その場を移動する。

「じいーっ」

しかし、どうも視線をロックオンされている気がして……というか、あまり信じたくない擬音が聞こえてくるので、僕は後ろ髪引かれるように、そつと視線の先を伺ってみた。

「じいーっ」

「……っっ」

思わず絶句する僕。

まあ、最初に目が合った時点で分かっていたことではあるのだが。

その女の子は、間違いなく……僕を見ていた。

僕が移動したせいで、首を捻るようにして。

そんなシュールな光景に、後ろに回ったらどうなるんだろう、
なんてホラーな考えが浮かんだが、今はそんな馬鹿なこと考えてる
場合じゃないだろうと、自分を落ち着かせる。

これはあれだ、ひょっとしてひょっとしなくても、一大事、なので
はないだろうか。

一見よくできたお人形さんのように見えるそいつは、けれどどう見たって生きている。

きつと、妖精とか精霊とか、そう呼ばれる【魔物】、なのだろう。普通なら、速攻で電話して、紅葉台の【生徒】に出動してもらわなくてはいけない事態である。

もし戦闘になるようなら、ここら一带、避難警報が発令されるかもしれないなかった。

だけど、どうやら僕は普通じゃなかったらしい。

なんていうか、可愛かったから。

すぐるようなその赤い瞳が、網膜に焼き付いて離れなかったから。

その時の僕は、通報しよう、なんて考えは微塵も持っていなかったんだ。

もし、凶悪な魔物だったりしたら……僕は真つ先に殺されるなり喰われるなりしてただろう。

でも、僕は目の前の小さな女の子が、そんな悪い存在には到底思えなかった。

だから……。

「おじさん、これいくら？」

その子に近付き、眠そうな顔をしてる店の主人に示してみせる。

だって、黙って持っていったら万引きになっちゃうだろう？

今まで気がついてなかったのが不思議と言えば不思議だけど、僕がそうすることで、流石に主人も気付くには違いない。

そこで僕は、紅葉台の【生徒】を名乗り、後は自分に全てお任せを、みたいな感じでこの場を切り抜けようと思ったただけ……。

「……3万円だ」

「高っ！」

いや、出来のいいフィギュアの相場でなら安いほうか……じゃなくて！

驚くべきなのは値段のほうではなく、【魔物】がいるのに何の感慨も示さない主人のほうだろう。

息もばっちりしてるし、じっとしてるといっても意外と動いちゃってるし、本当は人形のフリとかしてるのかもしれないけれど、やっぱり彼女がただの人形でないことくらい、一目瞭然だった。

気が付かないはずはない、と思うんだけど……。

「そうか。なら千円に負けてやる」

「安っ！ ていうか、なんで？」

店の主人は目の前のちっちゃな女の子を見て、何も思わないんだろうか。

千円なんて言われて、もはやあからさまにしょんぼりしてるってのに。

自然と出た疑問に、店の主人はああ、と相槌をうち、

「元々は3万でも安いんだろうけどな、どうやらそのサングラス、呪われてるらしいんだ」

「……はい？」

サングラス？ どこにサングラスが？

呪われてる？

全くもって理解不能なんですけど。

一体何を言ってるんだろうって思わず聞き返すと、

「アイポッドつきの人気モデルなんだけどな。使用者の談によると、

流れてくるはずの音楽とは関係なしに、女の声が聞こえてくるんだ
そうだ。それでこんなところにながれてきちまってるわけだが……興
味あるなら売ってやるぜ、千円でな」

なんて言って主人は挑戦的な笑みを浮かべている。

そんな顔されて引き下がっては男が廢る、ってものだろう。

「もちろん、買うよ」

僕は半ばのせられる形で財布から千円を取り出し、主人に手渡す。

「まいど」

そして僕は、チャレンジャーだねえ、って呟いてる主人に見送られ
て、

呪いのサングラスをゲットして店を出……

「じゃないって！待て待て待てっ！」

僕は思わず叫び、辺りを見回し店の外へとダッシュしながら、混乱
してる頭をどうにか整理しようと試みた。

僕が購入したのが分かったのか、おそろおそろ近づけた手に、満面
の笑みで乗っかってきたそいつ。

文字通り手のひらサイズの女の子は、見た目以上にやわっこくてぬ
くもりがあつた。

呪われてるのはかはともかくとして、僕にはどうみたって彼女がサン
グラスには見えなかった。

たぶん……予想するに、彼女はサングラスに化けてたんだらう。
いや、自分で言っていて意味分らないけどさ。

なんでサングラス（しかもアイポッドつき）なのかはナゾだけど、
それが何の因果か、僕にはその正体が見えてしまっているに違いな
い。

どうして僕に見えるのか、その理由は分からないけれど。最初に見つけたのが僕でよかったな、なんて思う。

もしこの子が【魔物】たちの中で危険だって判断されてる種類のやつなら、

ここにいる時点で最悪殺されてしまうことだってありえるだろう。

僕が見る限りではそんな危ないやつだとは到底思えないわけだけど、【魔物】が内界……人の居住区で見つかって、無事ですむとは思えない。

【魔物】に家族を殺された人だって少なくないのだ。

何のためにあんな所にいたのかは分からないけど、

自分がどれだけ危険な所にいるのか、きつと分かっているに違いなかった。

相変わらず、キラキラした赤い目で僕のことを見上げている。

まるで、何かを待っているかのような……期待に満ち満ちた目だった。

思わず情が移りそうになり、というかとっくに移ってたのかもしれないけど、

僕は慌てて目を逸らし、バス停には向かわず、坂を下っていく。

下っていく先に見えるのは、うつそうと生い茂る森。

透明の、ガラスのようなドーム状の膜に遮られるようにしてあるその場所は、

今や人の踏み入ることのない外界、だ。

下ってきた坂の道のアスファルトも、そこでぷつんと千切れるよう

になくなっている。

それは、人と【魔物】たちの境界線だった。

まあ、勝手に人間が作ったものだけ……紅葉台の【生徒】たちが出勤するのは、【魔物】たちがこれを越えた時に限られる。

それは、別に住み分けをしているのではなく、単に人手不足のための措置、らしいけど。

「よし、ここまで来れば、平気だろ」

それも【曲法】の産物らしく、どういった原理で作られているのかはさっぱりだが、

そのガラスみたいな境界線は、簡単に通り抜けることができた。

逆に、【魔物】たちにはここから先は人の暮らす領域であると、アピールできるものらしい。

それでも、一昔前ほどではないにしろ、しょっちゅう【魔物】たちは入ってくるし、

現に彼女もこうして入ってきてちゃってるわけで。

実はあまり意味がないものなのかも、なんて思う。

ま、それはともかくとして。

ちようど手頃な位置に、木のうろがあったので、僕は小さな彼女を、そつとそこに降ろした。

「じゃあね。もう入ってくるんじゃないよ」

そして、相変わらずじいっと見つめてくるのに心動かされつつも、僕はその言葉を残し、そのままと来た道へ戻ることにする。

何せ、勝手に外界にいるのを見つかつたら怒られるし、これで違う凶暴そうな【魔物】にでも出くわしたら笑えないからだ。

なのに……。

僕は結局、すぐに引き返す羽目になってしまった。

何故ならば。

「ううっ、いきなり捨てるなんてひどいやん！ この人でなしっ、女ったらし！」

半ば泣き声の、そんなエセ関西弁が耳に入ったからだ。

一番に思ったことは、なんでいきなりここまで言われなきゃならんのか、

と言った理不尽なことへの怒りの感情だった。

でもって、彼女が人の言葉を扱えることに驚き、言葉面だけで判断すると、ずいぶん人間味が悪いなあと思ったのが二番目で。

振り返ると、やっぱり彼女は木のうるから必死に顔だけ出してこっちを見てて。

なんかもう、ぐじぐじと泣いてて。

「泣くなよ。僕がもの凄い悪人みたいじゃないか……ほら」

僕は気付いたら、駆け寄って自分のハンカチを取り出していた。

「ありがとう」

小さな女の子は、独特のイントネーションでそう呟くと、ほんとの人間みたいにちん、と鼻までかんだ。

「これ、洗って返すな。……って、ご、お兄さん！ クリアのこと見えるんか？」

どうやって洗うのかなと考える間もなく、自分のことをクリア、と呼んだ女の子は、そんなことを言ってきた。

「おいおい。今更何言ってるのさ。見えてるに決まってるだろ？それよりさ、なんで僕があそこまで言われなきゃならないのさ？」

「あう、せやかて聞こえへんかな思ってたから……あ、でもでも、そならこつちから言わせてもらうで。なんで声かけてくれへんかったん？　なんでいきなり捨てたん？」

「いや、だってなあ、言葉通じると思ってたし、捨て……つて、だからさつきから人聞きの悪いことを言うなって。なんか誤解してるみたいだから言うけど、あのままあそこにて、【生徒】に見つかってたら大変なことになってたかもしれないんだぞ？　それをわざわざお金まで払って助けてあげたんじゃないか」

もちろん、捨てた？　つもりなんてなかった。

むしろ危ない目にあう前に助けたのに、そんな言い方はないだろうってちょっとむっとしてそう言う。

「助ける？　大変なこと？　クリア、よくわからへん」

案の定と言うか、やっぱり分かってなかったみたいで……。

女の子は可愛らしく首を傾げ、そんな言葉を返してくる。

これは、今後こんなことがないようにちゃんと説明したほうがいいのかもしれない。

境界線のこと【生徒】のこと、【魔物】のことを。

そう思っつて、幼な子にするように、ゆっくり言い聞かせるように説明すると。

彼女はちゃんと理解してくれたらしい。

こくこく頷いて、ぱつと笑顔を向け、

「なんや、そんなことか。心配しなくても平気やで。クリア【魔物】とちがうし」

そんな思いもよらない答えを返してきた。

「【魔物】じゃ、ない？」

意味がよく分からなくてそのまま反芻すると、ちっちゃな女の子…
…クリアは、心持ち胸をそらし、

「せや、【魔物】ちゃうねん。クリアはつくもん、やもん。

せやから、他のふつうのひとにはただのサングラスにしか見えへんし、ぜんぜん平気なんよ」

得意げに、そんなことを言ってくる。

「ええと、つまり君は、サングラスに化けてる、物に変化するタイプの【魔物】ってこと？ 確かに店のおじさんは騙せてみたいんだけど、そんなんじゃないかなあ？」

現に、僕にも見破られているくらいなのだ。

本物の【生徒】なら、簡単に見破ってしまうんじゃないかって、そう思う。

そう思ってたんだけどクリアは、ちゃうちゃうってな勢いで首を振って。

「せやから【魔物】とちがう言うてるやろ。それにクリアは別にサングラスに化けるとるわけやない。もともとサングラスやねん。逆や逆。他の人にはただのサングラスにしか見えへんけど、ごしゅじんにはごしゅじんが望んでイメージした別の姿で見えるって寸法なんよ」

ちゃんと話聞いとんのか、って頬を膨らませて、そんなシヨッキン
グな告白をしてくる。

「……………」

僕は、言われたことをすぐに理解できずに、固まっていたんだと思う。だってそうだろ？

この子は言うに事欠いて、この可愛らしい赤毛のファンタジーな妖精さんのごとき姿を僕の妄想だと……って、待てよ？

落ち着け、冷静になれ僕。

この子はご主人の望んだイメージだと、そう言ったのだ。

僕は彼女とは初対面だし、もちろんご主人などではないじゃ……。

「ああ、ごしゅじん見つかってよかったあ〜」

って、冷静になろうと思ったんだけど、僕を見て安心しきった様子でそんな事言ってくるので、それどころじゃなくなっちゃった。

「ちょ、ちよつと！ ま、まさか僕が『ご主人』だなんて言うつもりじゃないだろうなっ？」

「……？ 何を今更驚いとんの？ クリアのこと、見えるんやろ？」

「え？ あーっと、そりゃもちろん」

「だったら、ごしゅじんかくてー、やねー！」

「うーん、そういうもの、か？」

あまりにも楽しそうに、嬉しそうにそう宣言するから。

結局のところ僕は。

よく知りもしないくせに、何故か彼女の言葉を否定することができなくて……。

3、クリアと幼き頃の誓い

そんなこんなで。

せっかくバスに乗るのを諦めてまで外界に向かったのに、結局クリアを連れて、僕は内界に戻ることになった。

何故かと言うと、別にクリアがそう呼ぶのは構わないけれど、僕自身がクリアの言う『ごしゅじん』とやらだってことは、理解も納得もしてなかったからである。

だって……そうだろ？

いきなり思い出したかのようにごしゅじん、だよ？

そんなこと急に言われたって、何で？って思うのが普通の反応だろう。

だから理由を聞くことと思ったんだけど。

当のクリアは、『クリアの姿が見えとる以上、ごしゅじんはごしゅじん』の一点張りだ。

その時はまだ、僕以外にはクリアの姿は見えない（というか、むしろ僕にだけ見えるような幻覚にかかっているとまで言われた）ことが、どうにも信じられないのもあったから、

『それじゃあクリアの言ってることが正しいかどうか試してみればいいやん』

って話になったのだ。

で、まあ……結果で言うと、僕の負け、と言わざるをえなかった。

ちょうど昼時でお腹が空いていたこともあり、我が家への道中でファミレスを発見した僕は、内心ちよつとびびりつつも、そこで昼食をとることにしたわけなのだ。

周りのお客さんもウェイトレスさんもウェイターさんも、クリアの存在に気付くことはなかったからだ。

注文を取りに来たウェイトレスさんの前で、クリアが喋ろうが歌おうが気にも留めない。

どうも視覚だけでなく、クリアのそのエセっぽい関西弁すら僕の妄想だと、そう言いたいらしい。

加えて、自分でサングラスだと言っただけあって、直接聞いてみたわけではないけれど、

例えばクリアが僕の頭の上にいれば、どうも他の人には頭の上にサングラスがのっかっているように見えるらしい。

そこが気に入ったのか、すっかり僕の頭の上を定位置と決めたらしいクリアは、ほら見たことかと終始ご満悦だった。

そんなわけで、そんなクリアに対して悔しがってる様も、端から見れば独り言を喋っていると思われてるだろう事がほぼ確定した僕は、そのまま晒し者になってるのもなんだだったので、すぐにファミレスを出て、家までの道のりを再び歩くことにした。

それは、クリアのこと、何故か僕らしいごしゅじんのこと、もっとよく知ろうと思ったせいもあるけれど。

何年ぶりの幼き日を過ごしたこの町の空気にもっと長く触れたい、というのもあったのだろう。

僕の家は、紅葉台駅から歩いて30分くらいの場所にある。

紅葉台高校に程近いそこは、小高い丘の途中にあつて、

バス同士だとすれ違えなくらい狭い車道と一体化したぐねぐねの道を、車に気をつけながら上っていく以外に、そこへ向かう術はなかった。

コンビニやらファミレスやら、駅近くの店通りのあるところを抜けてしまつと、気付けば道路脇には一面の緑しか見えなくなる。

ほんとに東京なのかつて首を傾げたくなるくらい自然の森。

そのずっと向こうに見えるには……行き止まりを示す、境界線の膜。

(このへんは、変わってないなあ……)

僕は大きく息を吸い込み、懐かしさを身体に取り込みながら坂道を進む。

もともと荷物のほとんどは先に家に送ってしまったて手ぶらだったし、

久しぶりに帰ってきた故郷、こつやつて肌で感じながら歩くのも悪くない、

なんて思つのは、目の前に起こつた現実というか、頭の上で雛鳥のごとく寝こけているクリアの存在と、そんなクリアによって語られた、突拍子もないことへのささやかな逃避だったのかもしれない。

クリアは、自分のことを『つくもん』と言つた。

つくもんとは、クリア曰く、ごしゅじんが物や道具を大切にする気持ち、

すなわち、愛着を糧として生まれた精霊の一種、だと言つ。

ようは、九十九神のことなんだろうな、と僕は考えている。

まあ、あれは古い年経た器物にとつつくものなので、厳密に言えば

違うのかもしれないけれど、そのつくもんという名前だって、どうみたって九十九神から来てるんだろってことがまる分かりだからだ。

安易というか、安直なネーミングセンスだなとつつこんだら、

『何言ってるの。ごしゅじんがつけたんやで』
なんて言われる始末。

言われた僕は、ちょっと複雑な気分で、あ、そうなんだって頷くしかない。

それは、自らのネーミングセンスにへこたれている、というわけではなく、

僕自身にそんな記憶が当然のようになかったからだ。

喋りすぎたからなのか、僕がクリアの言うごしゅじんだと心から信じているからなのか、すっかり安心してきって無防備に眠っているクリアには悪いけれど。

やっぱり僕はクリアの言うごしゅじんとは違うんじゃないかって思っていた。

そりゃ確かにレストランでも、この道中でも、クリアを見咎める人はいなかったし、

可愛らしいクリアの姿が僕の妄想かどうかはこの際置いておくとしても、

僕にしかその姿が見えないのは今のところ確かなんだろうなって、そう思う。

かといって、じゃあ僕がクリアの言うごしゅじんなのかって問われると、首を傾げざるをえなかった。

何せ、僕はクリアのことを知らない。

クリアだって、僕が外界に行つて捨てようと（この言い方は人でなしみたいでいやだけど）するまで、僕を知ってる風じゃなかったというか、やっぱり僕のことも知らなかったんじゃないかなって思う。

ならばどうして僕がごしゅじんなのか。

クリアは、とにかく今のクリアの姿が見えるかとか言わないけど、おそらく僕は、クリアに選ばれたんだろうなって、考えている。

それが無作為の適当なのか、僕に選ばれる何かがあったのかどうかは分からない。

でも、クリアには何らかの理由があつて、僕に何かしてもらいたいことがあつて、

ごしゅじんだと、そう言つてるような気がするのだ。

僕をごしゅじんだと言うクリアは真剣で、譲れない何かを感じる。

だから、『僕は君のごしゅじんじゃないと思う、人違いじゃないかな？』なんてとてもじゃないけど言える雰囲気じゃなくて。

また泣かれでもしたら本当に困るし、クリアが僕のことをそう呼びたいんなら別にいいかな、なんて思うことにしていた。

これって、甘いのかな？

流されてる？

ノーと言えない日本人？

僕なら簡単に騙せそうだから、何かに利用しようとしているのかもつてことも、考えないではない。

可愛いのは見た目だけで、まんまと内界へ侵入してやったぞ、とか思ってるんじゃない、

何てこともちよつと思つたりするけど。

それでも、僕はきつとどうあっても彼女を拒みはしなかっただろうと、そう思う。

何故なら僕には……負い目があるからだ。

それは、幼き日の、一生消えることのない悲しみ。

一生大切にすると幼き心に誓ったはずの妹。

ただど彼女は、僕の所へはやってきてはくれなかった。

話すことも、笑いかけてくれることも、わがままを言われることもなく。

その名前だけしか僕は知らず、遠い遠い世界へ旅立ってしまった彼女に、僕は何もしてやれなかった。

助けにいくこともできなかった。

何もできなかった自分が、すぐすごく悔しくて、悲しかった。

今となってはそれが、誰を責めるべくもない仕方なかったことなのだ、理解してはいるのだけ。

これは、そんな負い目を、僕なりに前に進むために昇華したものなんだろうなって思っていた。

僕の目に映る女の子。

できるのならみんなが幸せになってほしい。

笑顔でいてほしい。

そんな大それた、夢と言うにも自己満足で自分勝手な思いを、僕は心のどこかで、いつも必ず抱いている。

だから、クリアが僕を「ごしゅじんと呼ぶのなら、そう信じているう

ちは、そうであるように努力したかった。

したかったんだけど……。

内心そんな決意をして、

『クリアは何をしたいの？ごしゅじんって何をすればいいの？』

って聞いてみたら…クリアは待つてましたと言わんばかりに、

『7人のつくもんをゲットすれば、ごしゅじんの願いが叶うんやで』
なんて微妙に論点のずれてる気がすることをのたまってきた。

僕は再度固まったね。

しかも、クリア自身は他のつくもんたち？の大まかな居場所が分かる、

どっかで聞いたことのあるようなレーダーの役目も持っていて、

ゲット？するには、つくもん同士でバトルをして、勝つてごしゅじんの実力を認めさせなければいけないらしい。

ここまでくると、もう笑うしかなかった。

信じられないというか、信じて大丈夫なのかコレって感じた。

クリアはそんな話してる時でも真剣だったから、とても茶化す気にはなれなかったけど、

そんな荒唐無稽で危険な香りのするようなことを言われたら、そりゃ現実逃避もしたくなるわけ。

それからすぐに、いつバトルが起きてもいいようにって、

クリアから延々とそのためのレクチャーを受け、現在に至るとい
わけである。

「う〜にゅむ〜……」

頭上で聞こえる、クリアの寝言。

春の日差しの暖かさに耐え切れなくなつて、というのもあつたんだらうけど、ただ委ねるような、人と変わらないそのぬくもりが、一通り話したいことを話し終えて、満足して安心したんだらうなつてことが如実に伝えてくれる。

クリアがいつからあそこにいたのかは分からないけれど、その安心しきつてるとこなんかは、裏切りたくないって、そう思う。クリアの言葉通りなら、これから何度も突拍子もない、ハチャメチャな出来事とか起こるのかもしれないけれど。

それはきつと、これから僕が避けては通れない、通りたくない高校生活に組み込まれていくんだらう。今からそのことを考えると、なんだかあつたかい、楽しい気分になつてくる。

(高校生活は、面白くなりそうだな……)

それには、まだ希望も含まれてはいるけれど。

思い返してみても、全くもってなにひとつ思い出の浮かんでこない中学校生活とは全く違うものになるんだらうなつて、そう考えてる、僕がいた……。

4、クリアとかがみ姉さん(前書き)

前作と比べて、更新は遅くなると思います。

4、クリアとかがみ姉さん

「でしっ……でしっ！」

そしてそれは……僕が我が家へと辿り着いた、その時のことだった。いつの間に来てたのか、それとも寝言なのか、しゃくりあげるみたいなクリアの声が聞こえてくる。

「ん？ どうかした？」

寝言であるのら言葉返すのはよくないとは思ってたけど、どうやらそうではないらしい。

「ふわっ……た、たいへんやつ、ごしゅじん！ 近くに他のつくもの子がある！ しかもごつつえー感じや！ まさかこつちが探す前に見つかるとは思いもよらんかったわ、どないしょ？」

なんて言っればたと頭の上を駆け回っている間にも、でしっとな声が聞こえてくる。

それはどうやら、クリアの言うところのつくもんレーダー？が反応している音、らしい。

「どのへんにいるの？」

「ええとなー、たぶんこん中や」

僕が問いかけると、クリアは転がるように頭の上から肩へ、広げた手のひらにちよこんとのつかって僕の家を指し示す。

それは、一言で表現するならば古い洋館。

もう何年も手入れをせずつたらかしにしてたのかと思つたら、そうでもないらしい。

思っていたよりは陰鬱とした、いわゆる何か出そうな雰囲気はない
とはいえ、
でも確かにこの中になら、何かしらいてもおかしくはないなんて思
える存在感はある。
何せ、なんに使うのかも分からない年季の入ったものとか多かった
しね。

「そつか。それじゃ中、見てみよう」

「わわわっ、ちょよ、ちょつと待ってや！ ごしゅじん、何の準備も
せんでいきなり入るんか？ 相手ものすごく強いで、きつと」

僕が、懐かしい玄関扉の取っ手に手をかけようとすると、それを阻
止せんと掴もうとした手にしがみついてくるクリア。
上手い方法だなあと、内心感心しつつも。

「強い？ 強いって何が？」

クリアの言っている意味がいまいちピンとこなかったので、そう問
いかける。

「何って、そんなん戦って強いのに決まっとるやん！」

「戦う？ それって……」

誰と誰が、何のために？

僕が思わず言葉につまると。

「見つけていきなりゲット、なわけないやろ。戦って弱らせ……や
なく、

ごしゅじんがごしゅじんだって認めさせなきゃ、ゲットできひんの
常識やろ？」

「……………」

なんてことを言ってくるので、また僕は言葉を失ってしまった。でも、この時のだんまりは、さっきのものとはちよつと意味合いが違った。

それはどこの常識だよって、僕はこの怒りに近い感情に明確な答えが出ないまま、おもむろに反対の手で扉を開けてしまう。

「あ、ずるい！ まだ準備してへんのにつ！」

「ずるいって、ここは僕の家だよ。僕が開けちゃいけない理由はないでしょ」

だけど、この感情をクリアにぶつけるのはいやだったから、抗議しているクリアをそのまま頭の上に乗せると、僕はそのまま家へと入った。

すると……。

そこに待っていたのは、ヴィンテージワインの赤色を滲ませたかのごとき艶のある黒髪と、アメジスト宝石を散りばめたかのような不思議な色合いの瞳を持つ、和服美少女、だった。

「おかえりなさいませ。吟也さん」

丁寧な言葉遣いでそう言っつて、柔らかなく微笑む女の子のことを、僕は知っていた。

紅恩寺かがみさん。

またの名をかがみ姉さん。

僕の姉、と言っつてもいい存在。

「かがみ姉さんただいまー。……って、姉さんもこっちに来てたんだ？」

「はい。螢火^{けいか}さまに頼まれました。吟也さんがこっちで暮らすのに不便のないようにと、一足お先にこちらへお邪魔させていただきました」

そしてそこで、初めてそういえばカギがかかってなかったことに気付く僕。

なるほど、家の周りに手入れが行き届いていたのも、かがみ姉さんが先にこっちに来ていたからだっただろう。

「ふーん。そうだったんだ。母さんも人が悪いなあ。一言言っておいてくれれば良かったのに」

なんて二人でほのぼのとした会話をしていると、そんな様子を見て呆然自失してたらしいクリアが、

「えっ？ ご、ごしゅじんおぼっ、やなくて！ ふたり、知り合いだったん？」

僕の頭上で、そんな驚きの声をあげる。

それに対し、かがみ姉さんは、お久しぶりですね、なんてクリアに向かつて変わらぬ慈愛に満ちた笑みを浮かべるから……。

「えっと、つまり……どういうこと？ 二人こそ知り合い？」

今度は逆に僕のほうが訳が分からなくなって、ぽかんとしてそう呟く。

「そうですね、お互いの紹介も兼ねて、まずはお茶でもいかかでしょう」

そんな僕を見て、それは妙案とばかりにかがみ姉さんはリビングのほうへと歩いていってしまふ。

僕はクリアと顔を見合わせながら、混乱気味な頭を落ち着かせるためにそれに従うことにする。

そして……。
かがみ姉さんにお茶を淹れてもらった後、まず僕はクリアに、かがみ姉さんを紹介した。

僕がずっと小さいときから側にいてくれて、遊び相手になってくれたお姉さんだつて。

神戸に引越す際も、当然のように一緒についてきてくれて。

あれ？ でもよく考えたら、当たり前のように近すぎたせいか、彼女の生い立ちとか諸々、僕は知らなかった。

でもって、クリアとかがみ姉さんが知り合いつてことは……？

「はい。わたくしは鏡台につく妖あやしの一人です。そういえば、言ったことありませんでしたね」

なんてマイペースに笑うかがみ姉さん。

それってつまり、クリアと同じような存在……つまり、つくもんだつてこと？

「え、でも待つてよ。かがみ姉さん、どうみたって人間じゃないか。クリアと全然違うわない？ 大きさが」

思わず僕がそう言つと、クリアはあからさまにショックを受けた様子で、

「うーっ、クリアだつておっきくなるもん！ そりゃ、かがみはんと比べたらクリア子供やし、ちっさいけど。」

俯きながら、なぜか胸を押さえている。

あれ？ なんていうか、そこはかとなく勘違いされているような？

「あらあら、吟也さん？ いくら吟也さんでも、その発言はセクハラですよ？」

「って、そう言う意味で言ったわけじゃないって！　なんでそこできがみ姉さんまで胸を隠すの！」
単純にお互いが人と妖精さんくらい大きさが違うって言及したかったのだけど、

どうもおおかしな方向に曲解されているようだ。

……確かにかがみ姉さんはたわわ、だけどさ。

きつとかがみ姉さんは分かかってやってるんだろっけど、ようはそれだけつくもんとしての年季みたいなものが違うだろっって……僕の中で納得しておこう。

しかし、かがみ姉さんがつくもんだったとは、全くもって知りようもない驚愕の新事実なわけ。

今まで気付かなかったというか、ご近所の親戚、優しいお姉さん、としか認識してなかったから……

あまり実感がわかないというか、クリアと共謀して（共謀できてる時点で少なくともクリアが見えるってことだけど）、僕を騙してるんじゃないのって思ってしまう。

とはいえ、言われてよくよく思い返してみると、小さい頃からこの家には古い鏡台があったのは確かなわけ。

なるほど、あれなら何かが憑いてもおかしくはない気はする。

何せ、紅恩寺家の女たちが代々大切に扱ってきたもの、らしいから。

「……で、お互いがつくもん？　同士なのはこの際妥協するとして、クリアとかがみ姉さんはどんな関係？」

強いとか、戦うとか物騒な言葉が並んでいたけれど、少なくともいがみ合っているようには見えない。

むしろ、とても仲が良さそうに見える。

「だからあ、ごしゅじんの願いを叶えるつくもんのひとりやて、言
つたやん」

「言つたつけ？ そんなこと？」

「言つた！」

なんでもう忘れとんの、とばかりにテーブルの上でむくれるクリア。
む、テーブルに足をつくのは行儀が悪いな。

そのうちに、座布団でも作ってやるつ。

つて、それはともかく。

「じゃあ、戦うつていうのは？ まさか姉さんと戦うとか言わない
よね？」

つていうかさ、そもそも姉さんは僕が物心つく前から姉さんだった
じゃん。その時点で僕ごしゅじんじゃないんじやないの？」

そうなのだ。

生まれて知り合ったときからかがみ姉さんはかがみ姉さんであつて、
それ以上でもそれ以下でもない。

クリアと姉さんが知り合いかどうかはともかくとして、さりげなく
クリアにも人違いですよつて、僕はごしゅじんじゃないんじやない
かなあつてアピールしたつもりだったんだけど……。

それを聞いたかがみ姉さんは、あろうことかひどく悲しそうにまな
じりを下げ、

「そんなこと言われると悲しいですわ。ずっとお仕えしてきました
のに」

よよよと泣きまねまでして、そんな言葉を返してくる。

クリアみたいにストレートに泣かれるのもあれだが、これはこれに心にくさつとくるものがあつた。

泣き真似だつていうのは分かつてるんだけどね。

なんとなく流されている気がしなくもないけれど、やっぱり思うのは、なんで僕、なんだろうって気持ち。

覚えもつもりもないけれど、本当に僕が二人の言うようなやつなのかつて、純粹な疑問だつた。

と、僕がさつきから繰り返しているそんな疑問に頭を悩ませていると、クリアがそんな僕を見透かしたかのように、

「何言つとん、ごしゅじんってば。クリアやかがみはんが元々の『物』に見えてへん時点で、ごしゅじんはごしゅじんに決まつとるつて……もう何度言つたやろ、これ？」

「う、うーん」

現時点では、僕以外にクリアの姿が見える人はおらず、それを言われてしまうと反論できない僕である。

いや、本当のときは、反論するつもりなんかこれっぽっちもないんだけどさ。

それつてつまり、他人さまから見れば、僕は今机の上に置いてあるサングラスと椅子に座つてる鏡台に顔をつき合わせてお茶を飲んでるつて、本人たちから主張されてることになるわけで……。

「ま、まあ、その事はもう考えても進展しない気もするし、まあいいや。それよりさ、戦つて？ 結局なんなのさ？」

「だから、ごしゅじんは願いを叶えるために7人のつくもんを集めなあかんわけや。ここまではええか？」

「うん」

本当はそれもクリアのお願いみたいなもので、僕が頼んだわけじゃないから、そのこと自体厳密に言えば僕の意味というわけでもないけれど、別にここでそんな事言う意味もないので、とりあえず頷いておく。

「でな、つくもんを集める……いわゆるゲットやな。ゲットするにはつくもんバトルせなあかんね。つくもん同士戦わせて……今の場合、ごしゅじんは手持ちにクリアしかおらへんから、クリアやな。クリアとかがみはんがバトルするつちゅーわけや。んで、基本的にはそのバトルにクリアが勝てば、晴れてかがみはんゲット！……そんな寸法や」

「うーん……」

クリアはこんな言葉、どこで覚えたんだろ？ ふと思う疑問。まあ、聞いたとしても『ごしゅじんからに決まっとるやん』とか言われそうなので聞かないけど。

と、そこで。

そんな僕らのやり取りを終始笑顔で眺めていたかがみ姉さんが、

「無駄、というか、意味のないことだと思えますよ？」

クリアに向かって、変わらぬ笑みのまま……挑発ともれそうな、そんなことを言った。

「……なんやて？ それはもしかして、クリアにはかがみはんには勝てへん、ってそう言いたいわけか？」

きつと睨みつけ（しかし、見た目がマスコットの的なのでむくれているようにしか見えないのがツボ）、クリアはそう言葉を返す。

しかしかがみ姉さんはそんなクリアの言葉を受けても、ただただのんびりとした雰囲気で微笑んでいた。おそらく、クリアにしてみれば余計に挑発されたって、そう思ったかもしれない。

今にも火花を散らしそうな、そんな場の空気が辺りを支配する。

だけどその瞬間、ほとんど無意識のまま、僕はそんな空気を打ち破るように、二人の間に割り込んでしまっていた。

そして、思ったことを口にする。

「クリアとかがみ姉さんが戦う、だって？ しかも僕のせいでは？ 何の恨みもないのに？」

だったら悪いけどクリア、僕は君の言うことは聞けないよ。願いも、ごしゅじゅって言うのも……そんなことになるくらいなら、僕には必要のないものだ」

別に怒ってるわけじゃないとは思っただけど、気付けば強めの口調で、僕はそんなことを言っていた。

「ごしゅじゅ……」

しゅん、となって俯くクリア。

それすら、僕の心にどすん、と響くくらいだ。

僕なんかのために彼女たちが戦うなんて、ありえなかった。

「でも、それじゃ、願いが……」

「ごめんな。少なくとも僕の前でさ、しかも僕が原因で女の子が傷つけあつものなんて、見たくないんだ」

本当に願いを叶えたいのだろう。

すでに半泣きのクリアをなだめるように、僕はそんな事を言う。

キレイ事というか、それこそ勝手な自己満足なのかもしれないけれど。

確かにそれは、僕のポリシーで。

いつからだっただろう？ そんな事を考えるようになったのは？ はつきりとはしないけれど、僕は確かに僕自身で、僕の心にそれを刻みこんだきつかけがあるはずだった。

一瞬だけ思い浮かぶ、そんなきつかけの、おぼろげで曖昧な記憶。

何か、大事なことを忘れてしまっているかのような……そんな感触。必死にそれを呼び起こそうとし、取り戻そうとするのだけど。

開きかけた僕の記憶の扉は、凄い勢いで閉じてしまった。

まだだ、まだ、何かが足りない。

そう思うことに、僕が戸惑っていると……。

「負けましたわ。 吟也さん……いえ、おやかたさま」

いきなりそんな、かがみ姉さんの、のほほんとした声が聞こえてきた。

「……へ？」

ぼかんとする、クリアと僕。

そんな僕たちを見、かがみ姉さんは一層笑みの度合いを強めて。

「その、わたくしたちを想いやってくださいさる気持ちにうたれました。

ですから、わたくしは負けを認めます。……と、言うよりですね。
おやかたさまならそうおっしゃるだろうって、そう思ってたか
ら。だから言ったんですよ、クリアちゃん。わたくしたちが戦うの
は意味のない、詮無きこと、だって「

いたずらっぽく、そう眩くのだった……。

5、クリアと幼馴染の約束

それから。

そう言われてみればバトルなしでも気に入られてゲットはありなんやっただって、

忘れてたとはかりに呟くクリアの言葉通りに。

本気なのかのつてるだけなのか、すっかり呼び方が『おやかたさま』に変わってしまったかがみ姉さんに戸惑いつつも、先に届いていた引越しの荷物の整理をした。

逆に気を使って僕の荷物に手を一切つけないあたりが、かがみ姉さんらしい気遣いで。

どちらにする明日からの学校生活のためにも、着いたらすぐに取り掛かるつもりだったので、結局その日の残りは、部屋の片付けと学校への準備で費やすことになって。

そんな僕の部屋は二階中央の、外の庭園がよく見渡せる場所にあった。

小さい頃から変わっていない気がするのは、そうは言っても先にここに来ていたかがみ姉さんが部屋の掃除をしてくれたり、庭の手入れをしてくれたからなんだろう。

くわえて、母さんに頼まれたからなのか、かがみ姉さんが言うように僕がおやかたさまだからなのか、

『この家の家事全般はお任せくださいませ』、とまで言われてしまう始末。

色々となんだか悪いなあって思うことしきりなのだが、せめて分担

しよつと提案しても、
『毎日使われなければ道具としての価値がない』、とまで言われる
始末。

それでも、何か手伝えることはと追いつがっても、

『クリアちゃんをお願い（つくもん探し）を聞いてあげてください』
って言葉が返ってくる。

ここまで言われてしまうと諦めざるを得ないというか、せつかくや
つてくれるわけだから、もう開き直ってかがみ姉さんに任せること
にしたわけなんだけど。

クリアはクリアで、『他のつくもん探しは明日でええよ』なんて言
ってくる。

どうやら他のつくもんさんたちは、ほとんどが紅葉台高校にいるこ
とがわかったらしく、

どうせ明日行くんだから焦らなくてもいい、ってことなんだろう。

その言葉がクリアから出たことに、僕はクリアの気遣いを感じた。
クリアのつくもん探しに付き合うことは、乗りかかった船だし、
興味がないと言えは嘘になるから、もちろん付き合うつもりではあ
ったけど、一応僕にも生活がある。

しかも明日は栄えある（予定）高校生活最初の一日だ。
何するわけでもないが、心の準備みたいなものは確かに必要な気が
する。

そんなわけで、僕はひとり、のんびり部屋の整理ができてい
るわけ

積もる話もあるのだろう。

階下からは、夕食の準備をしているかがみ姉さんと、クリアのにぎやかなおしゃべりの声が微かに届いてくる。

「……………」

僕が、クリアやかがみ姉さんのごしゅじんやおやかたさまなのは、やっぱりいまいちピンとこないけど。

広い家での淋しい一人暮らしの予定だった僕にとって、思わぬふたりの存在が心強いのは間違いないかった。

二人の主ヅラするつもりは毛頭ないけれど。

この状況を受け入れて楽しむ気概があってもいいんじゃないかって、そう思う僕がいて……………。

そして……………次の日。

入学式の日。

昨日は何もない、そう言ったけど、やはりどこか緊張しているらしい。

新しい緑のブレザーを着込んで身だしなみを整え、僕はかがみ姉さんに見送られ、

クリアを校章のワッペンが貼り付けてある胸ポケットに入れて（頭の上にいるよりはいいだろうって判断）、玄関を出たわけなんだけど。

紅葉台高校へと続くアスファルトの通りに出て、赤い屋根のお隣さんちが目に入ったとたん、思わず引き返したい気分になって、僕は

天下の往来で立ち尽くす羽目になってしまった。

「ごしゅじん？」

「何か忘れ物でもなさいましたか、おやかたさま？」

突然立ち止まった僕を見て、不思議そうに見上げてくるクリア。さらに、庭先まで見送りにきてくれていたかがみ姉さんにそう言われ、僕ははっとなって苦笑を浮かべる。

「いやあ……はは。昨日はなんともなかったんだけどさ。

潤ちゃんに久しぶりに会うんだなあって考えたら、思わずしり込みしたくなるというか、後ろめたいというか……」

まだ時間も早いし、二人になら話してもいいだろう。

僕はそう思い、おもむろに語りだす。

我が家である古ぼけた洋館の隣にある、ごく普通の赤い屋根の一軒家。

ただどこに住む人はごく普通、とは言えなかった。

言うなれば、生まれながらにして気高い魂を持っているというか、ぶっちゃんけると子供だてらにカリスマ性すらあった……紅葉台のガキ大将が住んでいたのだ。

名前は三水潤。さみず・しゅん

僕の幼馴染でもあり、僕がここ紅葉台へ帰ってきた理由……『約束』を交わした女の子、でもある。

「潤様が、どうかなさいましたか？」

同じように、お隣さんに目を向け、咳くかがみ姉さん。

「いや、うん。僕さ、潤ちゃんと約束してたんだよ。紅葉台に戻って必ず紅葉台高校に入学してやるって。でも、僕はその約束、まだ果たせてないから後ろめたくて」

「そうなん？　だつてごしゅじん、これから紅葉台高校の入学式出るんやないの？　制服だつてばつちり決まつとるで？」

僕が視線を落とすと、それに合わせるように、クリアの音が胸に響く。

僕はそれに苦笑の度合いを深め、首をふった。

「ああ、これは紅葉台高校の制服じゃないよ。紅葉台の制服は赤だしね。僕の通うのは、

紅葉台のお隣さん……というか紅葉台高校の敷地にくっついてる、

【付属】の工業高校、なんだ」

約束……それは小さい頃の、半ば勢いで交わした、でも僕にとっては大切な約束だった。

僕は小さい頃身体が弱くて、今もそうだけど、おじいさんみたいな色の長い銀髪だったから、よくいじめられていた。

いや、いじめられていた一番の原因は僕の性格だったんだと思う。

変に強気でわがままで自己中心的で短気。

すぐにかつとなって弱いくせにムキになってつかかって、

ぼろぼろにされる前に潤ちゃんに助けをもらう、そんな毎日だった。

それは、生来の性格もあつただらうけど。

妹を助けられなかった駄目な自分を否定したくて。

何においても満足にできないのに、何でもできるスーパーヒーローになってやるって、憧れ、信じていたことにも起因しているんだと思う。

でも、そんな僕の身近にいて、いつも助けてくれる潤ちゃんのほうが、よっぽどヒーローらしくて。

いつも助けてもらっていたくせに、僕はそんな潤ちゃんにいつも反発していた。

僕は男で、潤ちゃんは女の子なのに、立場が逆だって。

僕が守らなくちゃいけないのに、どうして僕が守られなくちゃならないんだって、その時僕は本気で思っていた。

だからあの日。

家の都合で引越しをしなくちゃいけないことを知った日。

いつものように無茶をして、いつものように潤ちゃんに助けられて弱いくせにいつもものように怒られて。

『口ばかりなんだから、やられる前にまず私にいいなさい！』
なんて言われて。

そんな頃から変にプライドを持っていた僕は、売り言葉に買い言葉。

『いい、助けなんていらない！僕はこれから修行に行くんだから！
紅葉台へ行って、ヒーローになるための特訓に行くんだから！』
なんて言葉を恥ずかしげもなく、宣言してしまったのだ。

遠くに引越すこと、一番に潤ちゃんに話すんだって決めてたこと

すらすつかり忘れて。

いや、その時はたぶん、忘れてたつてのとはちょっと違ったんだと思う。

僕はその時、引越しすることが強くなることだと、本気で思っていたから。

潤ちゃんの元から離れて暮らせば守ってくれる人もいないし、だからきつと自分は強くなれるんだつて考えてたんだと思う。

結局その後。

『そんなの無理に決まってるわ！』

つてさらに追い打ちをかけられたのが決定的だった。

僕はムキになって、『絶対に入つてやる！』なんて、ほとんど喧嘩腰で約束してしまったのだ。

引越しの当日になつても、その険悪な雰囲気は続いてて。

約束を反故しない証拠だつて、僕が紅葉台に帰ってくるまでの人質……じゃなくて、

当時大切にしてたもの、あれはホツチキスか何かだと思つたけど、無理矢理潤ちゃんに押し付けたりしてた。

今思えば、なんて馬鹿だつたんだろうつて、しみじみ思う。

一方的で強引でおかしな約束だつたなあ、と。

それなのに。

僕は今、その約束を守れないままで、ここに戻つてきてしまつている。

僕は約束を果たすために、紅葉台高校の入学試験を受けるつもりでいたけど。

その試験を受けることすらできずに、書類選考というか、試験のために履歴書を提出した段階で落とされてしまった。

理由は分からない。

けれど、趣味の欄にメカいじりと書いたのが功を奏した？のか、代わりに送られてきたのは紅葉台にくつつくようにして建っている、【付属】と呼ばれる紅葉台工業高校の願書だった。

同封されていたパンフレットによると、【付属】とは、一線で活躍する紅葉台の【生徒】たちの武器防具や、補給物資を作成、搬入する……

つまり【生徒】の補佐ってことなんだろうけど、そう言う人材を養成する所らしくて。

僕は結局、その【付属】の入学試験を受けることにした。それを決定づけた一番の理由は、【付属】に入った後も、紅葉台……いわゆる【本校】への編入試験が行われる、と言った文面があったからだ。

その結果、何とか僕は【付属】の試験に合格し今に至る、というわけなのだ。

「編入試験があるとはいえ、紅葉台高校に通う約束、守ったわけじゃないからね。

正直情けなくて、潤ちゃんに合わす顔、なかったりするんだよなあ。重い息を吐くように、僕はそんなことを呟く。

すると、そんな僕を見たクリアが、

「でもごしゅじん、守るのはこれからなんやろ？別にやぶったわけ

やないんやろ？ だからごしゅじん、ここにおんねんやろ？」

「まあ、それはそうだけど」

「だったら、堂々としてたらええ。ごしゅじんならすぐにその約束守れるはずなんやから」

僕を諭すみたいに、そんなことを言う。

それは、あまり根拠のないもののように思えるのに。

でもどうしてかすごく励まされるといっつか、そうだよな！ って気にさせてくれる。

それはあつたかい、ちょっとおかしい関西弁の力もあるんだと思う。なんだかクリアの気持ちが正直に伝わってくるというか、そんな感じがして。

「ありがとな。元気でした」

「ううん、どういたしましてやで」

自然と口から出た言葉に、嬉しそうに笑顔を見せるクリア。

見てるこっちまで癒される、きらきらしたいいい笑顔だ。

僕は、その笑顔に押されるようにして、

「よし、いっちょ堂々と挨拶にでもいきますかっ！」

さっきの身を引かれるような気分もどこへやら、意気揚々とお隣さんちまで歩き出したのだが……。

「あの、すみません。言い忘れていました。潤様は高校に上がって正式に紅葉台高校の【生徒】になられたとのことで、今は学校の寮にいらっしやるそうなんですけど……」

後ろ手に聞こえたのは、そんなかがみ姉さんの、すまなそうな声。

「はは……なんだ。そっか。うん。ご両親に挨拶だけしておこう」

よく考えたらこういっつのは昨日すべきだったと思いつつ。

僕は乾いた笑い声をもらし、でもどこかほっとしながら、そう呟くのだった……。

6、クリアと桜の坂道

そんなこんなで、登校初日、通学路。

雲なのか霧なのか区別のつかない程度に白みがあった春らしい空の中、僕たちは紅葉台高校へ続く坂道を上ってゆく。

紅葉台は町全体が小高い丘に立っているせいなのか、とにかく坂道が多かった。

それこそ、駅から学校まで通おうとすれば、毎日の登校が山登りみたいに感じられるかもしれない。

まあ、実際は直通のバスがあるので、わざわざ歩いてくる人なんてそうそういないだろうけど……。

「をを！ すっごいな、ピンク色の道が続いとる」

バスの通らないこの道には、バス通いでは味わえない特権がある。

ゆるく長いカーブに沿うようにして立ち並ぶ桜の木。

千本桜とまではいかないだろうけど、学校までのメインの通りは別にあるため、

車通りも少なく、地元の穴場といってもよかった。

自分で言った言葉そのままの景色に、はう、と見とれていたクリアは、

もっと良く見ようと、結局胸ポケットの中から移動して、僕の頭の上に乗取る。

「紅葉台やのに、赤やないんやね〜」
と、ふいにクリアはそんな事を呟いた。

「ま、春だし。桜だしね」

そんなこと、クリアはもちろん承知上で呟いたんだろうけど……。何の根拠もないのにそう言うクリアの声色に、どこか残念そうなものを感じ、まるで言い訳するみたいに僕は言葉を返していた。

「……………」

その言葉に、クリアは答えない。

ついでに頭の上にいるからその表情も分からなくて。

まだ出会って一日そこらしか経ってないはずなのに。

その何だか微妙な雰囲気僕ららしくないなって、そう思ってしまった。

「何？ クリアは紅葉のほうが好きなのか？」

「そやね。クリア、紅葉台っちゅーくらいやから、てっきり一年中紅葉見られるって思ってたん」

願望。

そんなことはないと分かかって言っているように、僕には聞こえた。そんなクリアの言葉を聞いていると。

まるで、限られたこの時にしか見られない儂い光景につかされ、感化されているかのような……。そんな気分になる。

思ってた以上に繊細な子なのかもしれない。

僕ららしくない、なんて、会ったばかりの僕のひとりよがりなエゴなのだろうと。

「まあ、いくらなんでも一年中は難しいんじゃないかな」

「そうなん？ だって桜は年中咲いとる場所、あるやろ？」

「や、それもないと思うけど」

「えー？ ごしゅじんがある言うたんやで？」

「あー、そうだったっけか。うん、前言撤回。冬に咲く桜あるって
いうし、秋桜って言うくらいだし、そういうこともあるかも」

言われた僕は、思わず屁理屈述べて半笑い。

一体ごしゅじんなる人はクリアに何を教えてるんだらうと思わなく
もない僕である。

「ま、今は無理だけどさ、昨日駅からの山道……外界のある辺り、
歩いたろ？」

あの辺りは秋になつたら壮観だよ。ここが紅葉台って呼ばれてる意
味、よく分かると思う」

「そうなん？ それは、楽しみやなあ」

頭の上にいるせいもあるだらうけど。

そんなクリアの言葉は、僕の脳にダイレクトで響くような……そんな
嬉しげな声だった。

その言葉に、どんな意味が含まれているかなど、気付くこともなく。

桜色のカーブを上りきると……視界は一気に開けた。

それは、町のとっぺんを意味するとともに、紅葉台高校の敷地へと
たどり着いたことを意味していた。

広がる青空から視線を下げると、目の前を塞ぐのは物々しい有刺鉄
線。

たとえるなら仰々しいインターチェンジのような、一昔前の関所のような、紅葉台高校の敷地に入るための入り口だった。戦う相手こそ異なるうとも、この場所が軍事施設のようなものであると、如実に分かる威圧感がそこにある。

まだまだ登校時間より少し早くてまだ生徒がほとんどいないのも、その雰囲気づくりに一役買っているのかもしれないけど。

それでも、入り口の監視員らしき人に【付属】の新入生を証明する学生手帳を提示すると、あっさり通してくれて、ちよつと拍子抜けしてしまつた。

これ見よがしにクリアが頭上で手足をバタバタさせて自分をアピールしていたが、全く気付く様子もなかつたこともあるだろうけど。

実の所、昔ここに住んでいたのにもかかわらず、これから先は数えるほどしか足を踏み入れたことはなかつた。

入れたのは、年に一度の学園祭のときくらいだった。幼い時分ならば、入つてはいけないと言われれば気になるものだが。冗談抜きに敷地を囲む有刺鉄線には電流が流れていたりして（今もバチバチいつてる）怖かつたのだ。

この拍子抜けは、こんな幼い頃からのイメージのせいだったのかもしれない。

それを考えると【付属】とはいえ、ここに来られたことが何だか誇らしい気持ちにさえなる僕だったけど。

そんな気分は、視線で射殺せるんじゃないかって思えるくらいの強い、でも懐かしい視線で吹き飛んだ。

「潤ちゃん」

「…………吟也？」

漆黒、としかいいようのない、混じりけのない黒の長髪がさらさら
とこぼれる。

しなやかでスラリとした長身。

包むのは紅葉台の【生徒】を示す、真紅のブレザー。

三年近くも会ってないせい、僕の記憶に残る潤ちゃんよりも、
ずっと格好よくて綺麗で凛と気高い、そんな雰囲気伝わってきた。
変わらないのは、その強く澄んだ光を放つ、心のうちまで届きそ
うな黒曜石の瞳だけ。

名を呼んだ僕に対し、同じように僕の名を呼んで、何かを見極めて
るみたいに視線を外さない潤ちゃん。

彼女は、思ったことを包み隠さず口にする子だったから、約束を守
れなかったこと

(そんなこととつくに忘れていくという可能性はとりあえずおいて
おく) に対して、

針千本に匹敵しそうな言葉を投げかけられるんだろうなって、そう
思ってた。

けれど、僕はまだ諦めたわけじゃなかったから。

とにかくその強い視線から逃げずに受け止めようって、そうも思っ
てた。

それは、今まで何度となく自分の弱いところを見せてしまっている
潤ちゃんに対してのせめてもの抵抗というか、意地だったのかもし
れない。

と……。

「でしっ、でしっ！」

そんな事を考えて、何だか二人で睨み合うかのような状態になっていた時だった。

突然頭上にいたクリアが、しゃくりあげるかのように言葉を発する。それはかがみ姉さんの時のように、他のつくもんが近くにいと反応すると、クリア本人が言っていたものだった。

「……えっ？」

ま、まさか潤ちゃんまでつくもんなの？

思わずそう叫びそうになって、慌てて言い留まる僕。

そのギリギリの判断は、どうやら正しかったらしい。

潤ちゃんは、僕が急に驚いた声を上げた僕を見て、

「何、急に。……どうかした？ 私、なにか変？」

呆気にとられたかのように、窺うように声をあげている。

「ちゃうちゃう、この人はつくもんやないでございじん。

たぶん、この人の持つとるかばんの中にもおるんちゃうかな。お

ーい、いるんなら返事せいやー」

「……」

どうやら潤ちゃんにはクリアの声は聞こえないらしい。

しかし、クリアがカバンに向かってそう呼びかけたが、それに答えるものもなかった。

「あれ……？ 反応消えた。どういことやる？」

やがて、クリアのしゃっくり声さえ止まってしまい、クリアはそれ

が不思議なのか、しきりに首をかしげている。そのことについてはよく分からない僕だけだ。まあ、よくよく考えてみれば、潤ちゃんがつくもんのはずはないのだ。

ついさつき、彼女の両親に引越しの挨拶をすませてきたばかりなのだし。

「い、いやっ、ははは。ごめん、なんか緊張してるのかも、僕」

乾いた笑いで、何とか誤魔化してみたけれど、さすがにちよつと苦しかったかもしれない。

けれど、それで潤ちゃんは一応納得してくれたのか、再び凜とした雰囲気を取り戻したかと思ったら、気付けば僕の目の前にいて。あるうことが僕の頭上に手を伸ばしてくる。

おそらく、クリアのいるだろう所へ向かって。

「え、う、うそやー！」

クリアのほつも、見えているはずないと、そう思っていたのだろう。頭の上から、驚きとちよつと怯えの混じった、そんな声がする。

ばしっ。

「あ」

「……………」

だから……………だろうか。

ほとんど無意識に僕は、潤ちゃんの手を掴んでいた。

可能性として、本物の紅葉台高校の【生徒】なら見えるんじゃないかって考えてた部分は確かにあった。

それでもここまで連れてきたのは僕の責任だろう。

僕にはクリアを守る……クリアが人を襲うような悪いやつじゃないんだって主張する義務があったから。

「……………」

「……………」

先程と同じようできて、ちょっと違う沈黙が辺りを支配する。

けれどその静寂は、一瞬だった。

それまで鋭い表情を変えなかった潤ちゃんが、ちょっと戸惑ったように苦笑を浮かべたからだ。

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。別にとって食おうってわけじゃないんだから。」

【付属】は【本校】と違って校則も厳しいって聞いてたから、没収される前に、って思っただけよ。

いきなり手を出したのは悪かったと思うけど。吟也ぜんぜん変わってないから、昔の世話焼き癖が自然と出ちゃったみたいね」

「あ、ご、ごめんっ。わざわざ、ありがとう」

そこでようやく僕は、潤ちゃんの急な行動が、サングラスなクリアのことを慮ってだったことに気付く。

心外ね、とでも言うようにまくし立てる潤ちゃんの様子が、何だか僕が思ってる以上に傷ついているみたいに見える。

悪いことしたなあと、とにかく真摯に謝って潤ちゃんの手を離し、慌ててクリアを頭上からブレザーのポケットに隠す。

「うう、目えあった。この人ちょっとおっかないで」

とって食うって言葉にびびったのか、クリアは胸ポケットの中で情けない声をあげている。

もちろんその声だつて、聞こえているなら間違いなく潤ちゃんに届いているはずで。

でも反応のないところを見ると、どうやら僕が危惧していたような事態にはならなかったことがよく分かる。

安心していいのか悪いのが良く分からない心持ちでいると、潤ちゃんはさらに笑みの度合いを深めた。

小さい頃のみんなのガキ大将なイメージがあつたせいか、

約束を果たせてない自分にそんな優しい笑顔を向けてくれることがなんだか不思議で……意外な気がする。

「ふふ、別に謝ることじゃないでしょう。ずいぶんと久しぶりのはずなのに、なんだかあまりそんな気がしないわ。そうそう、さつきね、お母さんから吟也が帰ってきたって連絡があつたから飛んできたのよ……って、まずは挨拶しなきゃ、順序があべこべじゃない。おかえり、吟也」

もしかしたら、約束忘れてるのかなつてくらいに、潤ちゃんの様子が柔らかい。

しかも、堰切つたように言葉を紡ぐその感じで、潤ちゃんの再会を喜んでくれてるのが伝わってきて、何だか照れくさかった。

「う、うん、ただいま、潤ちゃん」

僕もそう挨拶を返しながら……やっぱり子供の頃とは違うんだなつて、強く思った。

まあ、今や、本物のヒーローだといって遜色ない紅葉台高校の【生徒】なのだから、

当たり前といえばそうなのかもしれないけれど。

「ま、ただいまって言っても、約束守れたわけじゃないから。帰ってきただけ、って感じもするけどね」

とはいえ、僕が紅葉台の【本校】には入れなかったのはブレザーとかで一目瞭然だし、

いい加減そのことに触れないのにも耐えられなくなって、ごまかし笑いを浮かべながら、僕自らそう切り出した。

「約束……そっか」

潤ちゃんは、約束を覚えてくれていたらしく、すぐに反応が返ってくる。

だけど、ちよつと考え込むような難しい表情には、何か思うところがあるらしい。

そんな潤ちゃんは、しばらくすると顔をあげ、

「吟也は……まだ紅葉台に入ること、諦めてないの？」

まじめな口調で、そんなことを聞いてくる。

僕にはそれが、何だか今までは違っていて、トゲのある言い方にも聞こえた。

ちよつとだけ、口だけだって、痛い事実をつかれた過去の言葉を思い出す。

「もちろん、だって夏に編入試験があるって、そう聞いたし」

「吟也には不可能だって、私が……言っても？」

そして、何だかその確信めいた潤ちゃんの言葉に、僕は否応なしに火をつけられる。

「もちろん！ 僕はまだ、約束を破るつもりはないから」

やっぱり僕って変わってないなあなんて自分で思いながら……きっぱり、そう断言する僕。

でも、きっとその潤ちゃん言葉には紅葉台高校へ入ってからの大変さと苦労とかも含まれているんだろうと思う。勝てもしないのに突っかかっていっていった、向こうみずな自分のためを思つての言葉なんだって。

だけど僕は、そんな潤ちゃんに対して昔から天邪鬼なところがあった。

本当に潤ちゃんの言う通り無理なのだとしても、無理だと分かっても挑戦したい男の意地みたいなものがあつたんだ。昔はそれでよく潤ちゃんと喧嘩したものだけど。

「そう。吟也がそう思うのなら仕方ないわね。約束、守ってくれること、私も祈つてるわ」

流石に今となつては、そんなこともないらしく。大人な潤ちゃんの対応に、子供なままの自分がちょっと恥ずかしくなってくる。

と……。

思ったより話し込んでる時間が長かつたのか、僕と同じビリジアンカラーの制服を着込んだ人たちがちらほら見え始める。

すると、潤ちゃんはよくよく見てなきや分からない程度だったけど、何だか慌ててるように見えた。

僕と一緒にいるのを見られるのが恥ずかしかったりするのかな？なんて思ってしまう自分は、本当に馬鹿さ加減全開で。

「ごめんなさい、吟也。寮の点呼の時間なの。もう行くけど、入学式頑張つて。試験、期待してるわ」

そう言つて手を振り去つていく潤ちゃんに対し、本当に申し訳ない気持ちになる。

よく考えてみれば、すぐ気付きそうなものだけど。

潤ちゃんは、紅葉台高校の【本校】の生徒なのだ。

そこは、全生徒が校内にある寮で暮らすことを義務付けられている。

つまり、潤ちゃん自身は通学路を通る必要はないわけで。

わざわざ出てきて待っていてくれたんだって気付いたのが、たった今だったのだから。

「ごしゅじゅん、せっかく他のつくもん近くにおつたのに……」

「はは、忘れてた」

そして……さらに追い討ちをかけるように、そんなこと言ってくるクリアがいて。

何だかもう笑うしかない、僕なのだった……。

7、クリアと緑の楽園（パラダイス）

とはいえ、へこんでたからって今日がなくなるわけもなく。

増えだした緑のブレザー姿たちに混じりながら校舎までの最後の長い坂道を上っていくと、すぐ目の前、真ん中に道をぶった切るような植樹帯が見えた。

近付いていくとその植え込みに看板が刺さっており、【本校】は右、【付属】は左と書いてあるのが分かる。

しかも、そこには先生らしき人が立っていて。

看板見れば分かりそうなものなのに、【付属】の生徒は左に曲がるように、なんて誘導していたりした。

僕は挨拶をしつつ、それでも自分のような中途入学者（実は紅葉台は通う場所こそ違えど小中高一貫だったりする）もいるからしょうがないんだろうな、なんて思いながら左の道を歩いていく。

しかし……。

僕は歩いていくうちに、先生が別れた道の所で誘導していた訳を知ることになる。

「なんだよ、これって……」

思わず啞然として呟いた僕の目の前に、この紅葉台校を囲む、あの電気の走った有刺鉄線の金網がずっと続いていたのだ。

いや、ずっとではない。

校舎に近付けば近付くほどそれは太く頑丈なそれと変わり、さらにその先まで来ると、コンクリートか岩かよく分からないけれど鉄筋

でも入っただけでそんな分厚い壁が、お互いの道を遮っていたのだ。

何だかそれは、【付属】の人間がみだりに【本校】に入らないようにと言うレベルじゃすまない気がした。

まるで牢獄にでも入れられているかのような、そんな嫌な気分がするけれど何よりも僕が不思議に思ったのは、僕以外の【付属】の生徒たちがそのことを全く気にしていないということだった。まるでそれが当たり前のことのような、そんな空気すら感じる。

「なあな、ごしゅじん」

と、そんな事を考えていると。

ブレザーのポケットから顔だけ出し、僕と同じ方向をまじまじと見つめていたクリアがふと顔をあげる。

「ん、どうかした？ ポケットの中暑い？」

「ううん、そうやのうて何かおかしくない？ クリア、目の前の光景にめっちゃ違和感覚えるんやけど……」

そして、金網のほうではなく、幾人かの【付属】の制服を着た生徒たちの集まりを見ながらそんな事を言った。

「あ、うん。実はちょっと僕も、非常に嫌な予感がするんだけどね。実はその違和感、僕は潤ちゃんとは別れてすぐに気がついてた。ただ、その事を考えたくなかったというか信じたくなかったというか……」

その違和感が違和感でないのなら、もしかしたら僕はとんでもない過ちを犯してしまったことになるからだ。

そして……。

戦々恐々として迎えた【付属】の生徒のみによる入学式（ほとんどは進学式、らしいけど）で。

僕は、その違和感を決定的なものとして突きつけられこととなる。

そう。なんと【付属】は、男子校だったのだ！

目の前に広がる、男、男、男。

ついでに、先生まで男ばかりで。

「ぼ、僕の華やかな高校生活が……」

これはサギだと、そう思った。

入学案内の便覧にも、そんな事はひとつも書いてなかったぞ！

い、いや。男子校が悪い、とは言わないけどさ。

知って来てるのと知らないで来てるのでは大きな違いがあるじゃないかっ。

って感じで、付属長のありがたいお言葉も、右から左にむせび泣いていると。

「あれ？ でもごしゅじん、女の子のニオイするけど？」

なんてことを呟くクリア。

「何っ？ クリア、そんな事まで分かるのかっ？」

「うん、だつてクリアはごしゅじんのつくもんやもん。っていうかごしゅじんのつくもんなら、これって基本の能力やで？」

思わず勢い込んでクリアに問いかけると、案の定そんなありがたい

ようなありがたくないようなお言葉が返ってきたので。

言われるまま男子校かどうかから、論点がずれてることを自覚しつつ女の子の姿を探していたせいか、式の内容なんてほとんど耳に入らず……入学式が終わってしまった。

その時の僕は、その式に中で聞き逃すわけにはいかなかったことを話していたなんて、もちろん知る由はなかったわけだけ。

その、聞き逃すわけにはいかなかった重要なことは、式のために使用していた体育館を出て、誘導されつつやってきたクラス（どうやら中途入学組は、中学からの持ち上がり組と比べての経験の差を考慮して、ひとまとめにされるらしい）で、隣になった人物に教えてもらうことになるわけなのだが。

70

「ごしゅじん、この子やで。よかったな、おとなりさんや」
クリアが僕の気も知らずにこにことそんなことを言うので、正直それどころじゃない僕がいた。

「さつきも紹介したけど、俺は若穂^{わかほ}由宇^{ゆう}だ。よろしくな」
「お、おおう。僕は紅恩寺吟也だ、よろしゅう」
若穂くん？は、そんな僕に笑顔を見せてくれたけど。

思わずクリアの喋り方がうつつちゃうくらいには、動揺していたと思っ。

それは、僕が女の子の前じゃろくに話もできないやつ……っていうわけじゃなく、

若穂くんがクリアに言われなきゃ、おそらく気がつかなかっただろ
つてくらいバツチリ男のふりをしていたからだ。

これしかないのかもしれないけれど、当然僕と同じ制服を着ている。
ショートボブのオレンジの髪とあいつて、女顔（女の子なのだと
したら当たり前だが）だけど男、って言ってもいいだろう。

口調や仕草だつて、よっぽど僕より男らしかった。

これは、あれだ。

よくある何かの目的のために正体を隠してるってやつだろうか。

もし男子校に女の子がいるなんて知れたら、大変なんじゃないだろ
うかって思うけど……。

いや、待てよ？

入学案内のパンフには男子校だなんてこと一言も書いてなかったわ
けだから、

彼女は男装が趣味なだけなのかもしれない。

よく考えたらこの【付属】は一応工業高校なわけだし。

共学でも女子が少ないのは当たり前のこと、なのだろうと。

となると、趣味についていろいろ突っ込んだ話をするのは、いきな
り初対面じゃちょっと失礼なのかもしれないな、なんて思う。

「あー、そういえばさ、【付属】って女の子ほとんどいないんだな。
僕、男子校に入っちゃったと思ったよ。これってサギじゃない？
いかに工業校とはいえ、これはさあ。華の学園生活返してくれって
感じだよ」

だから当たり障りのない……かどうかは微妙だけど、休み時間の合
間の話題としてはありだろうなって思いつつ、そんなことを若穂く
んに話かけてみる。

「そうか？ 俺は男同士だつて全然アリだと思うけどな」

「……」
だが、返ってきたのは予想だにしなかった、そんな言葉だった。固まってる僕をよそに、クリアがなんか同意するみたいに頷いて、さらに僕に追い討ちをかける。
すると、僕がよっほどショックを受けているのが伝わったのか、若穂くんははつとなり、

「お、おいおい、冗談だつて。そんなマジで間に受けんなつて!」
慌てるようにそんな事を言つて、僕の肩をばしばし叩いてくる。
これで若穂くんが本当に男なら、笑つて、マジでお前にそういうケがあるのかと思つた、なんて返せるのだけでも。

若穂くんが女の子だと初めから見ているせいか、どうリアクションを返せばいいのか迷つてしまふ。
もしかして若穂くんはこの【付属】の惨状?を知らなかった僕とは違い、
分かつてて敢えてここにいるんじゃないか?なんて馬鹿な考えにまで至つてしまつた。

そんな、未だにちよつと引いてる僕のこと気付いた若穂くんは、
一層慌てた様子で言葉を続ける。

「だ、だいたい華だか知らないけどさ、ここが嫌なら他行けばよかつたんじゃないのか?」

「いや、嫌つてわけじゃないんだけどさ……【付属】に入れば【本校】の編入試験、受けれるんだろ?」

「そりゃそうだ……つて、吟也つて言つたか?お前、【本校】受けるつもりなのか?」

そう言う若穂くんは、何だか地球外生命体で見たかのような顔で、僕を見ていた。

女の子だと知ってなければどついてやりたくらい失礼な顔だが、どうしてそんな顔されにゃあかんのか、僕には皆目見当もつかなかった。

「な、何だよ。その顔はっ！ も、もしかして僕は見た目だけで無理だと判断されてるのか？ やっぱり顔か？ 顔なのか？ 紅葉台の【生徒】っていったら芸能人みたいなものなものな。こんな老人みたいな白銀髪のプロサ面は駄目ってか？ はは、そうだ。そうだろうよ！

なんてたつて、履歴書突っ返されて試験さえ受けさせてくれなかったわけだしなあっ！」

「ご、ごしゅじんがこわれとるよ〜」

見た目は男だけど女の子な若穂くんに言われて堪えたのも確かだろうけど。

ひよっとしなくても【本校】に受からなかった理由ってこれなんじやなかるうかって心の叫びを、僕はぶつける。

その勢いにちよっと引き気味だった若穂くんだったけど。

しかしその言葉にどこか納得行くところがあつたのか、ぼん、とひとつ手を叩いて、

「履歴書、送ったのか？ 吟也がか？」

本気を問うかのような目で、こつちを見てくる若穂くん。

「何だよ、その送っちゃ悪いみたいな言い方はさあ」

ここは、そんなことないぜ、ってくらいのフォローがないと、本気でへこむんですけど

なんて思いつつも、とりあえず頷く僕。

すると、しばらく何事か考えていた若穂くんはやがて顔をあげ、

「多分、その履歴書、冗談半分で受け取られたんじゃないか？ 何せ【本校】は女子校みたいなものだし、男子が真面目に履歴書提出してくるなんて普通は考えないだろうしな」
そんなことを言ってくる。

「……………」

おそらく、聞いてすぐには若穂くん言葉を理解できなかったんだと思う。

それが、じわじわと紐解かれていくうちに、数々の自分の言動が思い起こされて……………」。

気付けば僕は、叫んだ。

「じよ、女子校！ じゃ、じゃあ僕はそもそも受験資格なくせに絶対受かってやるなんて啖呵切った勘違いヤロウ……………」ってこと！？」

「お、おい。ちょっと落ち着けて！」

今日一番の……………」というか、今までやってきたこと全てを覆されかねない衝撃の事実、思わず魂の叫びのごとき大声をあげる僕。
休み時間とはいえ、いきなり奇声を上げれば注目の的にもなるだろう。

何事かと注視してくるクラスメイトたちの視線に晒されるのが嫌なのか、恥ずかしそうに縮こまる若穂くん。

それを見た僕はようやく我に返り、いつの間にか立ち上がった席に再び腰をかけ、自身を落ち着かせるように息を吐いた。

「ごめん、あまりの衝撃的事実に、取り乱した」

これで完璧に変なヤツのレッテル貼られただろうなあと内心へこみつつ、何とかそう言って乾いた笑みを浮かべてみせる。

「吟也、何も知らないでここに来たんだな。テレビのニュースとかで【生徒】たちのこと見かけたりしなかったのか……？」

「あ、そっぴや女の子ばっかで男の【生徒】の姿はあんまり見たことないような……」

言われてみれば確かにそうで、今更ながら潤ちゃんの、受からないよって言葉が身にしみてくる。

というか、穴があつたら入りたいくらいだ。

潤ちゃんも、男は駄目なんだってはっきり言ってくればよかったのに……。

いや、きつと受かるって信じ切ってる僕を傷つけまいと気を使ってくれたのに違いない。

潤ちゃんは昔からそう言う子、だったから。

「馬鹿みたいだなあ、僕。最初から無理な約束してたってわけだ……」

今まで気負っていた何かがどつと抜けた気がして、うなだれる僕。そんな僕に、若穂くんは何を思ったのだろう。

元氣付けてくれるかのように僕の肩を叩き、

「ま、そう落ち込むなって。そこまで【本校】に行きたいのなら、夏の編入試験受ければいいじゃないか」

そんなことを言ってくる。

「え、試験？　だって、女子校ならそもそも男の僕じゃ駄目なんじゃない？」

急に手のひらを返すように逆のことを言うので、僕は何だか混乱してしまった。

思わず首を傾げていると、何かに耐え切れなくなったかのように若

穂くんは笑みをこぼす。

「さっき、女子校みたいなものって言ったろ。別に男が入っちゃ駄目ってわけじゃない。」

ただ、男で履歴書出したり、試験受けようとするヤツがないだけでさ。」

「えーと……つまり、どういうこと？ むしろ僕のイメージだと野郎どもがかつついて試験に臨みそうな気がするけど。」

ようは、学校側も男が試験を受けるわけがないと思っっているから、履歴書を出し手もいたずらだと取られる、と言いたいんだろぅが……今度こそ、若穂くんの言っている意味が僕にはわからなかった。

僕の知らぬうちに、世界の平和を守る【生徒】は女の子の仕事だと慣例化してしまったのだろうか、なんて考える。

その時の僕は、間違いなく頭上に？マークが浮かんでいただろう。

「そう思うなら、夏の編入試験、受ければいいさ。」

そう言う考えのヤツほど難しいと思うけど……事実、去年の編入試験で合格した男、いるしな。」

「なんだよ、うらやま……じゃなく、それを早く言ってくれよ。そうか、先駆者ありか。」

それを聞いて安心した。やる気が戻ってきたぞ。」

前例があると思うと、気持ちがあぐつと楽になるのは何故だろう？

っていうかさ、男がいるなら女子校だなんて脅かさないでほしいよね。

「ま、そうと決まったらみっちり勉強しないと。いろいろ指導し」

鞭撻のほど、頼むよ」

「何だよ、俺にも受けさせる気か？」

「いや、なんつーかその、若穂くんって僕より全然詳しくそうだしさ」「……考えておくよ。あ、それから俺のことは呼び捨てでいいから俺もお前のことそう呼ぶし」

僕がそう言つと、わずかに笑みを浮かべ、そう言つ若穂くん……じやなかった、若穂。

その笑みは何だか複雑そう。

それは多分、若穂が女の子だって事とかにも関係しているんだろうけど。

僕はその時、気付かぬふりをして男友達でいることのほうが若穂にとっていいんじゃないかって、そう思っていて……。

8、クリアとねこみみ

それから。

入学式ということ、半日で授業が終わって。

【付属】の見学がてら若穂やその他仲良くなった級友たちと学食で過ごしてしばらく。

また明日の約束をして、なんとなく別れた後。

僕はクリアとともに家には帰らず、校舎に残っていた。

目的はもちろん、

「ほなごしゅじん。つくもん探し、はじめるでーっ」
である。

授業中や若穂たち級友が近くにいるときはおっぴらに会話もままならなかったせいか、随分と張り切っていた。

仮に、このテンションでクリアのような子たちが増えていく事を考えると、

いつでも会話できるような何か気のきいたものでも作ってみてもいいかな、なんて思う。

「そう言えば学校の中にいるって言ってたっけ。場所、分かるの？」

「うん、だいたい場所は把握したで。潤はんのところにいる子も含めて三人、

このまままっすぐいったとこに……って、ごしゅじんこそなんや場所分かつとるみたいやん」

「はは、まあね。予想の範囲といつかなんと……」

クリアの感心したような声に、僕は苦笑で返す。

僕たちが今向かっているのは【付属】と【本校】の境界線だった。

ホームルームの時にもらった紅葉台高校の地図によると。

それまで建物の2階と8階（ちなみに10階建て）に、校門から続いていた境界線がない部分……互いをつなぐ渡り廊下があるのが分かったからだ。

境界線の意味が分かった今となつては、境界線自体にさほど抵抗はなくなつていたけれど。

地図を見る限りではこの先通行禁止という感じでもなさそうだったので、どうなっているのかなと気になつていたので。だから、他のつくもんさんたちがいるってことは結果論なわけだけだ。

正直な所、ほぼ女子校と分かっている【本校】に、【付属】の男が何の許可も得ずに勝手には入れないだろうなって考えていた。

クリアには悪いけど不法侵入のレッテルを背負う度胸もなかったのだ、今回は様子見くらいのつもりでいたのだ。

誰かがいれば、【本校】へ入るための許可申請の仕方とかそういうのを聞くのもいいかな、なんて思ってたんだけど……。

やがて辿り着いた【付属】と【本校】を繋ぐ場所は。

それまで刑務所か何かのごとく互いを遮る鉄線どころか遮るもの何ひとつもない、両側にある窓からあたたかい陽射しの入り込む、距離こそあれど何の変哲もない渡り廊下だった。

立ち入り禁止のような類のことが示された看板とかもなく、普通に通ってもおかしくない、そんな佇まいである。

「ごしゅじん、向こうに女の子がおるで」
ただ、どうしてかは分からないけれど。

緊張した声色でクリアが呟く通り、渡り廊下のちょうど半分くらいのところに【本校】の真っ赤な制服を着た女の子が、何するでもなく誰かを待っている様子で、そこに立っていた。

潤ちゃんトリボンの色が違うから先輩だろうか。

向こうも気付いたらしく……だけど、何だか観察でもするかのよう
に僕のほうをじっと見つめている。

その視線に圧されたからなのか、僕は渡り廊下の直線で立ち止まっ
た。

何故かと言えば、あまりにも無防備すぎて、逆に勘ぐってしまった
からだ。

この先は【本校】。

うかつに足を踏み入れたりなんかしたら、警報とかが鳴ったりする
んじゃないのか……って。

「ごしゅじん、せかしといて今更やけど、この先危険かもしれへん」
と、胸ポケットから身を乗り出し、何だか真面目な表情でクリアが
そんなことを言ってきた。

「危険？どうしてそう思うんだ？」

確かにいろいろな意味でこの先は危険がありそうな気はするんだけど。

クリアが言うその危険は、僕が考えてるようなものとは少し毛色が違うような気がした。

だからそう聞き返すと、しかしクリアはふるふると首をふり、

「うーんと、その、はっきりとは分からん。ごしゅじんが分からへんならクリアの思い違いのような気いもするけど」

どうやら、さっきの言葉はなんとなく口をついて出たものだったらしい。

ただ、クリアにもその危険の正体は分からないようだ。

当然僕にはクリアが不安がるようなことなど分かるはずもなく。

分からないのならやっぱり聞いてみるのが一番なんだろう。

幸いにも、廊下の向こうにいる先輩らしき人は僕に注目してくれていたので声をひそめるのをやめ、

「すいませーん。【付属】の新入生なんですけど、この先【本校】ですよ？ やっぱり常識的に考えて通行禁止なんですかね、ここ」
佇む先輩らしき女の子に呼びかけてみる。

すると、その人は遠目見ても分かるくらいに不思議そうな顔をしてだけどすぐに、何だか楽しそうな笑みを浮かべているのが分かった。それは思っていたより好意的なものではあったけど。

同時に遠目で気のせいかもしれないけれど、何かをたくらんでるみたいな含みがある笑みにも見えた。

それは、まさしく……。

「通行禁止？ 一体どこでそんなこと聞いたのにやーっ」

そう、言うなれば猫のような、そんな笑い方だった。

つて、にゃー？ほんとに猫？

よくよく見てみると、橙の髪に混じって三毛のふさふさのネコミミが見える。

いや、たぶんきつとあれはつけ耳かなんかだろう。

でなきゃ、耳が四つになってしまうわけで。

そもそも冷静に考えてみたら、ネコミミつけて語尾ににゃーつけるくらい、クリアのプリティな存在に比べればむしろいて当然……っというのはちよつと違うかもしれないけど、全くもって気にすることないじゃないかって、自分を無理矢理納得させて。

「い、いえ！聞いたわけじゃないですけど、なんとなく【付属】の生徒がおいそれと入ってはいけない雰囲気があるような気がしたもので！」

僕は自分を落ち着かせるようにして、そう答える。

「そんなのないにゃーっ。むしろ逆じゃにゃいかな。あたしたちはいつでも大歓迎なのじゃ。通りたいのならどうぞ、なのじゃーっ」

すると彼女はそう言い、再びいたずらっぽそうな、面白がっているかのような笑い方をする。

正直、怪しいの一言だった。

なんとなく、一步踏み出したとたんトラップでも作動して、矢とか飛んできちゃったりするんじゃないか、なんて勘繰ってしまうほどに。

「1」つゆじふ……」

と、そこで聞こえてくるのは名を呼ぶだけのクリアの声。
さしずめ目的のためには向こうへ行きたいけど、でも心配って感じ
だろうか。

「ま、いつか。通っていいって言ってるんだし」

相変わらず僕の動かし方を分かってるなーなんて内心思いつつ、僕
は一步踏み出す。

まあそれは、いいって言ってるのに引き下がったらへタレみたいだ
なって自分で思ったのもあるけど。

それは……そんなさもない男のプライドみたいなものに押されて。
クリーム色のリノリウムの地面に降り立った瞬間だった。

「うおっ?」

突然身体が重くなったというか、周りの空気に圧されるかのような
感覚に陥る。

思わず声をあげると、その場の変化がクリアにも分かったらしい。

「ごしゅじん平気か? へんな結界みたいののなかに入ったで!」
大げさなほどの、クリアの声が胸元に響く。

そして、そのままバタバタと暴れだしポケットから出ようとするの
で、僕は大丈夫だと落ち着かす意味も含めて、ぼんぼんと軽く胸ポ
ケットを叩いた。

「そっか。知らなきゃ結界だと思ってても仕方ないかもね。……大丈
夫だよクリア。」

たぶん、【付属】校舎と比べて【本校】は気圧が高いんだよ。加圧
トレーニングってやつ?

あ、これは違ったかな?」

よく考えてみれば【本校】の生徒たちは、【魔物】と戦うために日々訓練とかしてるんだろうし、

【本校】ごと気圧を高めておくってのは、ありなんじゃないかなって思える。

【本校】は全寮制で寮も校舎の中にあるらしいから、もしかしたらそれが日常になっているのかもしれない。

「ごしゅじん、へいきなん？」

「ん、ああ。無問題だよ」

クリアは本当に心配性というかなんというか、心配されて悪い気分じゃないけれど。

僕は心させるように笑ってみせた。

そういえば、家の雑多なものを集めた倉庫の中にでかい風船みたいな遊具があって、

その空気が変わる感覚が面白くてよく遊んでたし、意外と僕ってこの環境に向いてるんじゃないかなって思える。

「まさか、涼しい顔して歩いてくるとは思わなかったにや〜」

と、いつの間にやら近くまで来ていたらしく、すぐ目と鼻の先でそんな驚きと感心を含んだような声がする。

顔を上げると思った以上に彼女が近くにいて。

首を傾げ、下から覗き込むようにこっちを窺っていた。

その仕草も、琥珀に輝くつり目がちな瞳も、猫としか表現できないほどに猫っぽい。

よっぽど猫が好きなんだろうな？なんて思うわけだけでも……。

「ええと、何か？」

やっぱり勝手に入っちゃまずかったのだろうか、内心びくびくしながら僕は彼女との間合いを取る。

間近で見て今更ながらとっても可愛い子だって実感したのもあるだろうけど。

「ふうん……ふむふむ。きみ、どこの誰にゃ？」

「あ、すいません。挨拶が遅れました。【付属】一年の紅恩寺吟也です」

とても興味深そうにそう聞いてくるネコミミの先輩に、僕は慌てて挨拶をする。

ネコミミの先輩は僕の名前を反芻するように呟いて、

「きみ、【付属】の制服着てるけど、女の子じゃにゃいよね？」
そんな言葉を返してきた。

いや、確かに普通よりは髪だって長いけどさ、さすがにそこまで女顔じゃないと思うわけですよ。

「ええ、もちろん男ですよ。証明しろって言われたらちよっと困りますけど」

もしかしたらネコミミの先輩は最初に考えてた通り、ここで監視か何かをしている人なのかもしれない。

もしそうだったら笑ってられないなあと思いつつ、それでも苦笑して答えると、ネコミミの先輩は僕の言葉を信じてくれたらしい。

再び何かに感心したかのように頷いて、

「ところで吟也くん。【本校】に何か用事でもあるにゃ？」

かと思つたら、そんなことを聞いてくる。

聞かれた僕は正直なところ、言葉に詰まってしまった。

よく考えてみれば、わざわざ【本校】に行くのならば何か用件があ

つてしかりで。
かといつてつくもんを探しにきた、とそのまま用件を口にするわけにもいかず……。

「あ、えーと、今日のホームルームで校内地図もらったんですけど、何かここ、普通に通れるみたいだからちよつと気になったんです。ほら、校門のほうとかすごい嚴重じゃないですか。だから、興味本位というかなんというか……」

それもそれで嘘ではないけれど、なんだか言い訳じみた言葉が口を吐いてでる。

「うーにゃ。フツの男の子はそういう考えにも至らないはずなんだけどにゃー」

「うっ……いやその、すいません。常識のないやつとはよく言われます」

ここに来て、若穂の言っていた言葉が重く響く。
やっぱり僕が知らないだけで、【本校】に近づく男はもちろんのこと、男で【本校】に入ろうと思うことは普通じゃないのだと。
言うなれば、男がタカラヅカに入ろうとしているようなものなのかも、なんて思う。

「うにゃ。そういうこと言ってるわけじゃないなくて、【本校】は危険だからってことにゃ」

「危険？ やっぱり何かのトラップとかあったりするんですか？」

「……まあ、似たようなものにゃ。下手なところに迷い込めば、死ぬかも」

「……」

そう言われ、僕は思わず息をのむ。
きつと、不法侵入対策のトラップとかのことを言ってるんだろうけど。

その言葉にはジョークのかけらも含まれておらず、どこまでも本気だった。

とすると、ネコミミの先輩は僕みたいな非常識な【付属】の連中が勝手に入ってこないようにつて、ここにいるのだろう。

普通はここには来ないというのはつまり、この先にはトラップ盛りだくさんだつて知っているから、とも言える。

「そうですかあ。やっぱそううまくはいかないか……」

少なくとも、そのトラップの位置を正確に把握できなければ単独の侵入は難しいのは分かった。

なんだかこの言い方、侵入する気満々みたいでいやだけど……。

「興味本位つて言つてた割には、随分ご執心にやのね。そんなに【本校】見学したいの？」

「いや、そのなんていうか、できるのならそうしたいですけど」

そう聞かれると頷かざるを得ない僕である。

許されるのなら見学したいという気持ちは、クリアのお願いのためだけじゃなかった。

そこは確かに自分の目的であり憧れていた場所だったから。

すると、ネコミミの先輩はやっぱりどこか意外そうな顔して頷いて

「それなら……うん、吟也くんつてクラブ入る気ある？」 【付属救

援隊】つてやつなんにやけど」

そんなことを聞いてくる。

たしか、紅葉台のクラブ活動は、ほかの学校とはひと味違っつてこ
とは聞いていた。

どこにでもある通常のものとはべつに、民間の消防隊のごとく、授
業時間外でも実地に出て戦う【本校】の【生徒】たちをサポートす
るためのクラブがあるらしいと。

先輩はたぶん、その事を言っているのだろう。

もともと試験に受かって【本校】に行くつもりだったし、どうせ入
るならばと考えていたクラブではある。

「はい、そのつもりですけど」

「そっか。んじやさ、もう少ししたら【本校】と【付属】合同の歓
迎会があるんだけど、

吟也くん、それに参加すればいいんじゃないかじゃ？ その会場つ
て【本校】の『生徒会室』だしその日なら自由に【本校】見学でき
るんじゃない？」

「へえ。そうなんですか？ 知らなかったな」

これは思わぬ収穫と言えるかもしれない。

少なくとも不法侵入してる、とかでびくびくする必要がないのだから。

と、その時。

馴染みのチャイムの音とは違う、サイレンのような音が鳴り響いた。
それで真っ先に思い浮かんだのは【魔物】が出現したときのものだ
った。

思わずびくりとなったが、しかしネコミミの先輩は少しも慌てた様
子もなく。

「あ、集まらなきゃいけない時間が来たにや。あたしもう行かなきゃ。吟也くんそれじゃ、歓迎会でね。待ってるにや」

そう言つて手を振り、笑顔できびすを返すネコミミの先輩。そこで初めて気づく、耳と同じ三毛のネコしっぽ。

本格的だなあ……って、そうじゃなくてっ。

「あのっ？ この番はしなくていいんですか？」

どうしても気になって、気づけば僕はそんなことを聞いていた。すると、ネコミミの先輩はぱつと振り返り首を傾げ、

「ばん？ ばんってなんにや？」

なんて聞き返してくる。

「あれ？ そのためにここにいたんじゃ？」

「うんにや。ここはぬくいからひなたぼっこに最適な場所なんにや。ただそれだけにやけど？」

「……………」

えーと、なんだ。

つまり、先輩がこの番をしていると思つたのは僕の勘違いで。

僕はたまたまここにいた先輩のおかげで助かったって、そういうことなのだろうか。

となると歓迎会の事も教えてくれたし、これってお礼言つとくべきなんだろうなってそう思う。

と、そこまで考えて今更ながら先輩の名前を知らないことに気づく僕。

だから、遅れたら怒られるにや、なんて言つて立ち去ろうとする先輩に僕はもう一度声をかけた。

「あ、すみません、あとちょっとだけ」

「にゃ？ まだ何かあるにゃか？」

「あ、はい。先輩の名前聞くの忘れてました」

すると、先輩は一瞬きよとんとしたあと。

「まつしろ・みおん松代美音にゃ。好きに呼んでくれていいにゃ」

笑顔を向けてそう答えてくれて。

「じゃあ、美音先輩。歓迎会のこととか、わざわざ教えてくださいさうてありがとございます」

「にゃはは。……うん、じゃあまたにゃ」

僕が礼を言つと。

美音先輩は破顔して、しっぽをふりふり去っていったのだった……。

9、クリアと歓迎会

「うむ、先輩のいい笑顔も見れたし、いい情報もゲットしたし、帰るかな」

「え？ ごしゅじん、今日はもう向こうには行かないんか？」

僕がそう呟き【付属】校舎に向かってきびすを返すと、ちょっと不思議そうなクリアの声がする。

「んー、まあね。入ってもいい日があるんならわざわざ今日、危険を冒してまで行くことないかなって思ったんだ。それに、忠告してくれたのにこのまま無策でつっこむのもどうかなーと。」

あ、でも、つくもん集めに時間がないって言うんなら考えるけど？

8階の渡り廊下のほうを見ておくのはありだしね」

クリア自身は別段急いでいる、という風には見えないけれど。

言いながら思い出したのは、スーパールのジャンク屋で僕以外に気づかれることなくひとりでいたクリアのことだった。

この校舎のどこかで、もしかしたら他の子もひとり寂しく待っているんじゃないか……って。

「うっん、そやな……その歓迎会の時でかまへんで。いくらごしゅじんでも、ほんまもんの犯罪者にさすわけいかんし」
けれど、僕のそんな考えもどこ吹く風。

なんだか微妙にひっかかるけど、もっともなことを口にするクリア。

「そか。それじゃ今日は帰ろう。かがみ姉さんが待ってる」
僕はそれに頷き、今日のところは引き返したのだった。

その時のクリアの口調の中に何故か、引き返したことへの安堵の様子を感じながら……。

それから。

特段何があるでもなく、数日が過ぎて。

僕は結局、【付属救援隊】のクラブに入った。

あれからクラブの説明会があつて、詳しい内容を知つて、ますます入りたくなつたというのもあるし、何より若穂もそのクラブに入つて言ったことが大きかつたんだと思う。

隣の席で他の奴よりは話しやすかつたのもあるだろうけど、若穂が男だろうが女だろうが関係なく、僕にとって気の合う奴だつたから。

そんなわけで僕達は今、【付属救援隊】にあてがわれた【本校】にほど近い、部室と言うよりは造船ドックというか、基地みたいな場所にいた。

「ここ、ごしゅじんとよく似たニオイするな」

例のごとく、クラブ用のモスグリーンの作業着の胸ポケットに陣取つてるクリアが、しみじみとそんな呟きを漏らす。

「僕、そんなにおうかな？ 一応毎日風呂入ってるんだけど」

僕は苦笑し、ズボンのポケットに忍ばせた小型のキーボードを駆使

してそう返す。

それは、クリアに独り言ばかり呟かせとくのもなんだなって思い、数日前に僕が作ったもので。

今頃、クリアにかけてる緑色のちっちゃな片メガネには、その言葉がテロップで流れ出ているはずだった。

「うーんと、ほら、ここキカイたくさんやから」

『……なるほど』

たしかにこの部室は、家にあるラボと似たようなニオイがすると言えはそうかもしれない。

それはここが、【生徒】を補佐するための道具……主に【魔物】と戦うための武具を修理したり、生産したりするところだからなのだろう。

前述した通り、【付属救援隊】は、そういった戦いのための様々な物資を作ったり運んだりするクラブなのである。

もともとそうだったことが好きな僕にとっては、これ以上ないクラブとっていいかもしれない。

「待たせたな、先生はまだか？」

「うん。……お、ナイスタイミングみたいだよ」

僕より少し遅れて同じモスグリーンの作業着を来た若穂がやってくるのと同じくらいに、僕ら新入部員の集まる場所へ向かって【付属救援隊】クラブの顧問の先生らしきしぶい男の人がやってくる。

一見すると、職人気質な親方って雰囲気を持つてる人だった。

普段の授業とかでは見かけないから、上級生を受け持つてる先生なのかもしれない。

その先生は僕らを見渡すと、

「ごくろう、新人生諸君。今年も大漁のようだよ」

見た目のイメージよりもずいぶん気さくというか、気の抜けた感じでそう呟いた。

「僕は志島徹威しじまとおとじゃ。上のやつらにはオヤジ、なんて呼ばれとる。

ま、長い付き合いになることを、祈っとるよ」

若そうに見えるけれど、もしかしたらけっこういい年いつてるのかもしれない。

だが、その好々爺然とした口ぶりにはどこか含むものを感じる。

何気なく、奥のほうで作業をしている上級生たちを見ると、十人いるかいないかなのが分かる。

まあ、ここにいる人達で【付属救援隊】の部員全員ってわけではないのかもしれないけれど。

【付属】の一年のほぼ三分の一（100人くらい）の新人部員がここにいることを考えると、

上辺の説明会とかでは知りえない……辞めてしまうような大変なことがあるのかもしれないな、なんて考えたりする。

「きみたちがこの部にどのような気概と目的を持って志願したのかは、問わない。

だがな、この部に入った以上自分自身も含めて、この部でなしたことが全て人の命にかかわってくる、と言うことを肝に銘じてほしい。……ま、こんな事は言わんでも、君たちなら分かってるだろうがね」

言葉通り、実際に【魔物】との戦闘が起こったとき、その戦地に赴

くということもあるのかもしれない。

だとすれば、当然僕たちにも危険はあるんだろうと思う。

ただ……頭の中だけで分かっている、それは僕にとって実感の伴わないものと言えた。

それこそ【生徒】たちと【魔物】たちの戦いはテレビの向こうにある別世界で、実際にその世界に立った時、自分がどうなってしまうのか想像できなかった。

そこには、漠然とした根拠のない恐怖があるけれど。

でも、憧れから来る自分への期待感みたいなものが確かにあって。

そんな自分への儂い願望を、最低限でも裏切らないように改めて心構えしておかなくちゃって思える。

「ま、初日だし、今日はこんなところかの。この後、【本校】との歓迎会がある。

それまで自由にしててよいぞ。先輩方の活動ぶりを見学するのもいいな」

けれど、僕が内心そんな熱い決意をしてる中で、トイ先生はやっぱり気の抜けたような声色でそう言っただけでその場を去ってしまった。

その、あまりにもあっさりとしすぎている感じに、周りの生徒たちは戸惑いざわついている。

「うむ。もっと軍隊とか自警団みたいなお堅いのをイメージしてただけだな。何か適当というか、放任主義というか」

「【付属】の、しかもひよっ子の俺らにはそこまで期待していないって感じにも見えるよな」

僕の言葉に続くように、何だか怒ったような様子でそんな事を言う

若穂。

まあ、ちよつと変わっているとはいえ部活なわけだし、そこまで厳しくはしないのかもしれないけど。

「ま、それならそれで見返してやろつ」

「ああ、そうだな」

【本校】の生徒に比べたら、まだまだなのは自分では分かっているつもりだから。

せめて、できる限り自分のすべきことをするしかないんだろう。

だから僕たちはそう言っつて、頷きあつのだった……。

そして。

迎えた歓迎会。

それは僕がイメージしていた、【本校】と【付属】が一緒になってご馳走を食べたり、わいわい楽しくおしゃべりする……みたいなものじゃ全くなかった。

僕たち【付属救援隊】の部員が集まったのは、昨日美音先輩と会つた二階の渡り廊下の【付属】サイドにある、ちよつとした広場で。

「ずいぶん殺気だつてるな、先輩方」

「うん。これじゃあ歓迎会っていうより、マラソンでも始めそんな雰囲気だね」

僕や若穂が見つめる先には、渡り廊下の入り口の直前で押し合いへし合いしながら、

少しでもいい陣地を取ろうとでもいいだけに、自作なのかそれぞれがごつい武器防具を身につけ、

睨み合っている先輩方の姿があつた。

その後ろに僕たちを含む新入部員たちがいて、やはり何が始まるのかよく分かっていない様子で佇んでいる。

見学していたときは、こんな事なかつたのに……もはや先輩方には歓迎ムードなどこれっぽっちも感じられなかつた。

「えー、これから歓迎会の説明をはじめ。内容を知っているやつも知らんやつも一応聞いておけよ」

と、そのときだった。

今度は背後から、トイー先生の声がする。

「じゅじん。このおっちゃんできるで。全く気配感じられんかつた」

『そりゃ、先生だし。そのくらいできるんじゃない？』

まあ、する意味があるかはまた別問題だけど。

ただものじゃなさそうなのは、僕でも分かる気がする。

先生の雰囲気というか纏う空気というか、声色なんかは気が抜けたように聞こえるのに、どこか芯が通っているような、そんな感じなのだ。

証拠に、それまで殺気だつてすらいた先輩方が、まるで統率の取れた兵隊のようにびしっと並んで先生に注目している。

意外や意外、もしかしたら怖い人なのかもしれない。
同じようにして振り向き姿勢を正して先生に注目すると、先生はそれに満足したように頷き、再び口を開いた。

「君たちには、これから【本校】の10階にある『生徒会室』を指してもらおう。

方法、ルートは問わん。部の活動時間内に辿り着けたものには【本校】へ編入できる権利が与えられるぞ。ああ、もちろん人数制限などない。張り切ってゴールしてくれたまえ」

「……え？」

「本気かよ」

淡々とあっさり言うものだからつい聞き逃しそうになったけど。

先生何気にとんでもないこと言わなかったか？

思わず耳を疑う僕の隣で、若穂が呆れたように呟く。

この思いも寄らぬおいしい展開に、新入部員たちがどっと沸いた。

「ただし、【本校】のみなさんがきみたちを手厚く歓迎してくれるそうじゃからな。

命の惜しいやつは、悪いことは言わん、すぐにここへ戻ってこい。

戻ってこれたらの話だかの」

しかし……そのざわめきは、そんなトイ先生の言葉で一瞬でかき消される。

まあ、そんな上手い話があるわけないとは思っていたけど。

なるほど、歓迎会ってのはそっちの意味だったわけだ。

先輩方が殺気立ってたのはそのためだったんだろう。

「すみません、先生」

と、僕がそんな風に自己完結していると、若穂が手をあげる。

「ん？ 何か質問かね？」

「俺たちは、何の準備もしてないんですが」

「ああ、その程度のアドバンテージはあってもいいじゃろ。先輩なんだからの」

「しかし、これではいくらなんでも」

「危険だって、そう言いたいのかな、若穂由宇くん？」

「いいんじゃないよ、それで。この歓迎会はそれを肌で感じるのが目的なんじゃからな」

「……」

さらに静まり返る、辺りの空気。

トイー先生は、ちょっとおどかしすぎたか、なんて顔をしていたけど。

おおむねその通りなのだろう。

若穂はさらに何かを言いかげようとし、反論は無駄だと悟ったのか、そのまま黙りこくる。

「ま、そんなわけじゃ。思わずネタばれしてしまったが……何、【本校】の生徒たちだってきみたちに【本校】に来てほしいと、切に願っているのは事実なんじゃ。それに応えてやるのが、男つてもんじゃないろう？」

トイー先生は発破をかけるようにそんな事を言い、僕らを見渡す。そう言われると、やらないわけにはいかないよなあって思ってしまったのは確かだ。

「それでは、今からきっかり五分後、チャイムが鳴ったらスタート

じゃ。

僕は10階で待ってるでしょうかの。ここにいる多くのものがゴールに辿り着けることを祈っとよ」

トイ先生は、そんな言葉を残し、軽く手を上げて、【本校】に歩いてゆく。

それを、何だか複雑そうに見送っていた若穂だったけど。何か吹っ切れたのか、ぱっと顔をあげて。

「こうなったらなるようになれ、だ。頑張ろっぜ、吟也」
きりり、と引き締まった表情で、そう言う。

「ああ、もちろん。せっかく巡ってきたチャンス、逃すわけにはいかないしね」

僕はそれにしっかりと頷いて。

そこでようやく、美音先輩が【付属救援隊】に入ることすすめたのはこのためだったのだと、気付かされるのだった……。

10、クリアと三原色の翼

そして、五分後。

チャイムが鳴り響き、その場はロードレースのスタートのような喧騒に包まれる。

まさか、このクラブに入って、こんな事をする事になるは思いもよらなかった。

ただ、こういう雰囲気、僕は嫌いじゃなかったから。

だから、できる限り行けるところまで行ってやるうって、そう思ったんだけど。

『……………た……………けてっ!』

「っ?」

「なっ?」

突然、脳に直接響いてくるような、誰かの声がした。知らない声。

だけど、助けを求めている……………女の子の声に聞こえた。

僕は思わず上階へと上がっていく【付属】の生徒たちの波から抜け出し、立ち止まる。

「吟也? どうかしたのか?」

それにすぐに気付いた若穂が、同じように立ち止まって人波から出てくる。

「いや、ちょっと……………トイレっ、トイレ知らないっ?」

我ながらぐずぐずな嘘だったけど、若穂はそれで納得してくれたらしい。

「マジかよっ！ た、たしか、一階に男子トイレあったはずだけど」「そっか、悪い！ ちょっと行ってくる！ 若穂は先に行ってくれ！」

「お、おい、ちょっと！」

僕はそう言い終わるより早く、ダッシュで一階へ降りる階段を駆け降りていく。

若穂に嘘をつくのは心苦しいことではあったけど……僕の事情に若穂を巻き込むわけにはいかないし、たぶんこれで良かったんだと思う。

案の定、若穂は後を追ってはこなかった。

「クリア！ 今、声が聞こえたよな？ けど、気づいたのは僕らだけみたいだった。それってつまり、他のつくもんの誰かって事じゃないの？」

「う、うん。クリアにも聞こえたで！」

「何で急に？ 今までこんな事なかったよな？」

はつきりとは聞こえなかったけど、それがただごとじゃなさそうなことはすぐにわかった。

助けてって、そう言っているように聞こえた。

「うん、こんなこと通常あるわけない。たぶん、その子の命に関わる何かが起きてるんや思う」

そう。はじめからこういうテレパシーみたいなことができるなら、とっくにしてておかしくないはずなのだ。

「どないしょ、こんな予想外やったわ」

クリアは、こんな事があるなんて信じられない、という顔をしている。

ひどく動揺しているその口ぶり。

「どないするも何もない、助け求めてんなら助けるだけだろ！」

僕は、そんなクリアを叱咤するように叫び、

「場所の特定はできそう？」

すかさずそう聞いた。

「んと……はつきりとは断言できひんけど、一番近いつくもんさんは、ここからもっと下の方やな」

「わかった！ 行ってみよう！」

僕は、クリアの答えが返ってくるのと同時に、さらに下に降りる階段を駆け降りていく。

そしてたどり着いたのは、空調がきいているのか、やけに涼しい感じのする地下三階だった。

「クリア、どう？ 近くにいそう？」

「んと、まだ下や。でしって言わへんし」

「下？ ここが最下層じゃ……って、待てよ？ そう言えば」
入学案内か何かで見た記憶がある。

この広い土地をつまぐ活用するために、学校の地下には大規模なゴミ処理施設が併設されていると。

僕はそこまで考えて、頭に浮かんだのは、最悪の想像だった。

クリアの言った命に関わるようなこと。

彼女たちの姿は僕にしか見えず、他の人には『もの』に見える。もし、その『もの』が壊されてしまったらその子はどうなる？

「くそっ！」

僕は、より走る足に力を込め、左へと続く道を折れる。

さらに下がる辺りの温度。

「じゅじんっ！」

何か警告発するようにクリアが叫んだけれど、聞かずに薄暗いコンクリートに囲まれた細い道を駆ける。

その先は袋小路の行き止まりになっていたが、鉄扉と関係者以外立ち入り禁止の看板もあった。

「あれだっ！」

僕はその鉄扉のノブにとりつき、ひねる。

しかし鍵がかかっているのか、開かなかった。

思わず舌打ちしきびすを返そうとすると。

「……そこは、立ち入り禁止」

低く、無感情な響きが、すぐ側から聞こえる。

顔を上げると、おそらく【本校】の生徒だろう、灰色がかったベリースョートの髪の女の子がいた。

着ているのは男物の僕と同じモスグリーンの作業着だったけど、彼女によく似合っている。

なんとなく、若穂と同じようなタイプなのかな、なんて考える。つて、悠長に人物描写してる暇なんてないっつての！

「ごめん、君、【本校】の人だよな？ 僕、紅恩寺吟也って言うんだけど」

「塩生命……」

君は？ と名を聞く前に、彼女はぼそりと名を名乗り一礼する。無表情だけど礼儀正しい感じだった。

「ご丁寧にどうも。……それでさ、この立ち入り禁止の先って地下のゴミ処理施設に行ける？」

「……ああ」

こくり、と頷く女の子。

薄い、静かな色をたたえた瞳が、僕の真意を問うようにロックオンされている。

「この鍵って、どこかで借りられないかな？」

「……ここ、立ち入り禁止」

再び、無感情に同じ事を繰り返す女の子。

「うん、それは承知の上なんだ。頼むっ！ どうしても、この先に行かなきゃならないんだっ、そこをなんとかっ！」

僕はなりふり構っていられず、土下座する勢いでそう叫ぶ。

彼女が鍵のありかを知らないただの通りすがりとは考えなかった。ただ心の中から生まれる感情だけで彼女に訴える。

すると、その思いが通じたのか。

彼女の小さな手のひらにあったのは、さらに小さな鈴付きの鍵。

「立ち入り禁止。……だけどどうしても言うなら貸してあげないこともないけど……」

「けど？」

「紅恩寺吟也君、と言ったね。その代わりに条件……君にやってもらいたいことがある」

「ああ、分かった。僕ができることならっ！」
時間がないから、というのもあったけど。
即答する僕に、彼女はちょっと驚いているみたいだった。

「ん……ならいいよ」

ただどすぐに、ほんのわずかばかりだけど笑顔を浮かべて、僕の手
に鍵を落としてくれる。

その今まで無感情だなんて思ってしまったのが失礼くらいの嬉しそ
うに見える笑顔に、わけもなく不安が募りはしたけど。

「ありがとう！ 恩に着るっ、約束、守るから！」

それを考えるのは後でいい。

僕は借りたばかりの鍵を使い、鉄扉を開けて中へと飛び込んでいっ
たのだった……。

飛び込むとそこは、すぐに螺旋階段が待っていた。

それを、もう転がるようなスピードで駆け降りると、目の前に広ま
った丁字の道が見えてくる。

「クリア！ どっちか分かるか！」

「んと、右やっ！」

言われるまま駆けていくと、しばらく地面が硬いコンクリートから
何か柔らかいもの……ベルトコンベアに変わっていることに気付く。
かまわず走っていると、しかし突然ガクリとつんのめる感覚に陥っ
た。

見ると、片足が乗っていたベルトコンベアみたいな地面が動いてい

る。

とたん、何か大きな機械が動く出す振動。

ふと、背後に大きなものの気配を感じて振り向くと。

「げっ！ ぐ、ゴミの塊っ？」

僕の身長のはあるうかという四角く固められたゴミの塊が、迫ってくる。

潰されては叶わんと、慌てて駆け出す僕。

すると、だんだんと道が広くなって、コンベアのスピードも心なしか速くなっているのを感じた。

気付けばその道が、片側二車線の道路くらいの広さになっている。

何で広くなったのだろうか、何気に後ろを振り向いて、

「どわあっ？」

いつの間にやら分身したいくつものゴミの塊たち。

それを目にした僕は、小さな川が海に向かううち、ひとつひとつが重なって大きな河川になる、

ということを思わず想像してしまった。

僕は、半ば悲鳴混じりに背を向け走り出す。

果たしてゴミの行き着く先には何があるのか……そんな考えも、至らぬままに。

と……。

「でしっ、でしっ！」

そのタイミングで、他のつくもんの居場所を知らせるといっ、クリアのしゃくりあげるような声が聞こえてくる。

「たっ、助けをつ、求む、でありますう〜っ！」
すると、僕がクリアにその場所を聞く前にクリアとは違うそんな甲高い少女の声が聞こえてきた。

「ごしゅじん、あっちゃー！」

クリアがポケットから身を乗り出して指し示すのは、ベルトコンベアの終着地点。

近づくにつれ、ゴウウツと地鳴りのような凄い音が聞こえてくる。

終着地点は、まるで滝のように折れ込んで先がなかった。

音の発信源はその先。

おそらく、焼却炉の炎が燃え盛る音なのだろう。

確か、燃えるゴミだろうが燃えないゴミだろうが混合廃棄物だろうが、

おかまいなしに灰にするっていうけもの焼却炉だって聞いている。
助けを求める少女は、コンベアとコンベアの継ぎ目にある金属レールの淵に、小さな手で何とかつかまっている、という状況だった。
動くコンベアに身体を流され、いつ落ちてもおかしくない状況である。

長いシヨッキングピンクの髪がざんばらに広がり、否応なしに僕の危機感をあおる。

「待ってる！ 今助ける！」
僕は叫び、さらに加速する。

「っ！ た、たいちよーっ！ 来てくれたで……はっ、いけません
たいちよーっ！ それ以上は御身につ、わっ、わわあっ？」

僕の声に気付いた小さな女の子は、一瞬だけ嬉しそうな顔をしたが、
すぐにくしゃりとその表情を歪ませる。

ぎりり、と心が痛んだ。

その痛みをこらえながら、僕は必死に考える。

このまま進めばまさしく火の海。

後ろからは道を塞ぐゴミが迫っているだろう。

この期に及んで僕のことを心配しようとする彼女を、なんとしても助けなくちゃいけない。

考えて考えて……僕はクリアと、目があった。

「クリア、頼むっ！」

確信があったわけじゃない。

それは、ただ無意識の行動だった。

「任しとき！」

言われたクリアは力強い声でそれに応え、僕のポケットから飛び出す。

今にも落ちそうな、ショッキングピンクの髪の少女に向かって。

「いくでーっ、モディフ・ウァリア《変異》やっ！」

それは、【曲法】なのだろうか？

瞬間、クリアの身体が目も眩むほどの白光に包まれる。

視界を霞ませる光の中に生まれ出たのは。

プリズムの輝きを放つ、クリアの身体の何倍も大きな翼だった……。

11、モトカとまいっちな思い出

プリズムの輝きを放つ、クリアの身体の何倍も大きな翼。

「うつ………？」

それを見たたん、フラッシュバックする、僕の知りえない記憶の映像。

大空を、それぞれが異なる翼あるものたちと遊び舞う……そんな情景。

(そうか、だから僕は……)

クリアに空を舞う力があること、頭のどこかで分かっていたのかも
しれない。

だから僕はクリアにお願いしたのだと、そんな気がした。

その一瞬の何とも知れない情景は、どうしてかそんな説得力があつて。

だがそれは、あつという間に、僕の頭の中から消え去り、黒く塗りつぶされる。

その、自分の頭の中を勝手に弄繰り回されているかのような感覚に少し不快感を覚えつつ。

我に返った僕は、次に自分のことを考えようと努める。

いつの間にかそぐそこまで迫っていたベルトコンベアの終わりに怖
気つつ、立ち止まって方向転換。

その無理な動きに、僕の足はびきびきといやな音を立てたけど、構
わずコンベアの流れに逆らって走り出した。

すると、目の前にはまるで津波のように迫ってくるゴミの山の姿。

(さて、僕はこれをどう切り抜けるか、だな……)

【本校】の【生徒】たちが使うような武器でもあれば、なんてこと
を思う。

あるいは【生徒】たちが【魔物】に対するために使う、【曲法】の
ような力でもよかった。

幼心にテレビで彼らの活躍を見て、憧れたものだけど……。

まあ、憧れてるだけでは何もできないのは明白であって。

そんな僕が思いつくのは、迫ってくるゴミの塊にとびついて、飛び
越える、くらいで。

「よしっ、いちかば、って、早いって！」

考えてた時間はそれほどではなかったはずだけど……現実は無常だ
った。

飛び越えようと思った時には、ゴミの塊はもう目前だった。

なすすべなくそれに巻き込まれ、僕は転がっていく。

そして、ゴミと一緒に押し出されて頭から焼却炉の中へ落ち……な
かった。

足場がなくなり、感じた浮遊感が残っている。

刹那、凄い音を立てて、ゴミの塊が次々奈落へ落ちていき……。

「ご、ごしゅじん、平気か？」

頭上で、そんなクリアの声がする。

必死にそちらに目をやると、そこには虹色の燐粉を蒔きながら宙を舞う、クリアの姿があった。

そのクリアにしがみつくようにして、ショッキングピンクの髪の子の姿も見える。

「すごいな、クリア……お前、空飛べたんだ。おかげで助かったよ」

「えへへっ、まあな。それほどでもあるけど」

照れて頬をかくクリア。

それはそれで可愛かったんだけど、とたんに感じる重力。

「ごはっ？」

「あーっ！ご、ごしゅじんっ！」

寝めるタイミングを間違ったというか、タイミングが悪かったというか、

背中から落とされる僕。

「う、うお、うおっ？」

じたばたし、ベルトコンベアに流されたが。

クリアが再び飛んできて僕を宙へとさらっていく。

「すまんごしゅじん。っ、つ、ついが抜けてもって」

「いや、いいよ、うん」

自分の発した言動には、責任持たなくちゃいけないのは本当だな、なんて思ってしまう僕である。

ちょっとニュアンスが違うかもしれないけど。

「クリアたいんっ、たいちよーっ！ まだでありますっ！」
と、一息ついて和んでいると、切羽詰った女の子の声。

「う、ごしゅじんっ！」

続く、クリアの悲鳴に近い声。

思わず顔を上げると、天井近くまで積み上げられた四角いゴミ（しかも、今度は廃金属だ！）の塊が、二段、三段と重なって運ばれてくるのが見えた。

「おいおい、ゴミ出しすぎだろうっ！」

確かここって、東京都と近県の境の近くにあるから、そこら辺のゴミがもれなく集めてくるんだっけ……なんて今更なことを思い出す僕。

どちらにしろ、さつきみたいに飛び越える、なんてことすら到底無理な高さなのは確かだった。

クリアたちだけなら、天井とのわずかな隙間から抜けられるかもしれないけど。

きつと彼女たちはそれを納得しないだろうことは、ここ数日の付き合いで分かっている。

とはいえ、それくらいしか方法が……。

「たいちよーっ！ ここはモトカを、モトカのお使いくださいっ！」

なんて考えていると、ショッキングピンクの髪の女の子が僕の頭の上に降り立ち、肩口まで降りてきてそう叫ぶ。

至近距離で合う視線。

不思議な桜色の輝きを放つその瞳には、しかし猛ける炎のような強さがあった。

「え、でもモトカはんまだつくもんバトル……って、そんな事言ってる場合やない、か」

続いて聞こえる、頭上からのクリアの声。
どうやら彼女は、モトカ、と言っらしい。

背格好はクリアと同じくらい、だろうか。

髪の毛のボリュームがあるからなのか、4つにくくられたその髪は、なんとというかドリルみたいだった。

まさか彼女の元となる『物』が、ドリルってことはないだろうか……。

「バトルせずとも、たいちよーとクリアたいいんは、モトカを救援しに来てくれたであります。モトカはその思いに報いるために、たいちよーの駒として戦い抜く所存であります！」
今度はたいちよー、か。

どうやらそれぞれに呼び方が違うらしい。
多分理由を聞いてもごしゅじんの趣味だと言われるオチが見えてるし、そもそも今はこんなやり取りしてる間もなかった。

すでに、対処のきかない近くまでゴミの塊が迫ってきている。
加えて、平気そうにはしてるけれど、クリアも何だかふらついてい
るし、

ここはモトカの方ってやつにかけてみるしか、手はなさそうだった。

「分かった！ 任せるよ、モトカ！」

「了解でありますっ！ ではではっ、バトルモード、でありますっ！」

僕が頷くとモトカはそう叫び、とたん、さっきのクリアのように全身から目映い桜色の光を発する。

僕がその光に目をすぼめていると、今まで肩口にいたモトカの姿はそこにはなく。

気付けば僕の手には、一本のスパナが握られていた。

それは、普通のスパナとは大きく異なっていた。

まず、通常のものより柄の部分が断然長かった。

おそらく一メートル半はあるだろう。

さらに、両先端部分がさすまたのように大きく広がっている。

それは工具ではなく、武器と違っていい代物だった。

何より驚かされたのは、おそろしいくらいに手に馴染んでいる中央の握りの部分、だろうか。

あまりにも馴染みすぎて自分の身体の一部のような、そんな感覚にとらわれる。

彼女たちが、物に宿る九十九神であるならば。

その、手に馴染む感覚は正しいのかもしれないけれど。

僕には、当たり前前になるほどの武器を使った記憶などまるでなかった。

なのに自分のきき手は、それを否定する。

一体、どうということなんだろう。

どっちが正しいのだろう。

答えが出ないまま轟音を立て、迫り来る鉄の塊。

僕は、相対するものに対し本能で拳を握るかのごとく、スパナを構える。

心を置き去りにして、身体が覚えていた。

「………
《断谿》ライス・リソルトション っ！」

発せられた言葉。

それは、モトカのものだったのだろうか、僕のものだったのかは分からない。

無造作に突き出すように掬い上げられたスパナの切っ先が、鉄塊の中心へめり込む。

まるで豆腐でも切っているかのような、手ごたえのなさ。

(………っ、また?)

と、その瞬間。

それまで黒く塗り潰されていた僕の頭の中に、どことも知れない記憶の映像が展開される。

………見えるのは、いかにも凶悪そうな【魔物】の姿。

青いたてがみ。

鋭い牙と爪。

そして、こちらに向かって振り下ろされる、血塗れのショートソー
下。

僕の視点と一体化している刃向けられしものは、その絶体絶命の危機に抗うかのごとく、スパナを繰り出す。
そのスパナは、あっさりと何の抵抗もなく【魔物】の腹にもぐりこんで……。

テレビの電源が切れたかのように、突然闇に塗りつぶされる、その映像。
はっと我に返る僕。

気付けば……目の前にはがらんどうが広がっていた。
あれほど大きかった鉄の塊が、まるで最初からなかったかのようにぞっとした。
もしそれを、自分がやったのだとしたら、どんなに恐ろしい力なのだろうかと。
あの青い魔物も、こうやって消されてしまったのだろうか。

「さすがたいちよー。ウデは全く鈍ることを知らないでありますねえ」
「……………」
どこからともなく聞こえる、モトカの声。
紡がれるは僕の知りえないこと。

違う、僕じゃない！
思わず僕はそう叫ぼうとして。

「この感触、なつかしいであります。殺さずをモットーとするた
いちよーの活躍ときたら、それは見事でありました」

「殺さず？」

「そうであります！ 今でもたいちよーの勇ましい姿が目浮かぶ
であります。

『お前の服は、もうお前の元には戻らない』……あれは名台詞であ
りました」

……あれ？

何だか僕が思ってたのとは方向性がずれてきているような。

つまり、その……今のよく分からんモト力の力を、二人の言うごし
ゆじんとやらはセクハラまがいのことに使ってたってこと？

「あ、そんならクリアの覚えとるで。いやーん、まいっちゃんぐやー、
とか言っでずるい攻撃してたな」

「そう、それも痺れるセリフでありましたねえ。全く、ほればれす
るほどの女の子の敵でありました」

そう言っで、二人は楽しげに笑いあう。

仲の良さそうな感じなのは、とてもいいことではあるんだけどさ。

「違う、そんなの僕じゃなーいっ！」

思わず口からこぼれる、魂の叫び。

気付けばさっきまでの不安も恐怖も消えてて、それはそれで良かつ
たんだけど。

「またまたあ、ごけんそんを」

本気でそんなおい、じゃなかった、犯罪まがいのことをした記憶なんてない。

というかそもそもそれは僕じゃないはずなのに、今更誤魔化すなんてサイテー……的な目で見られた僕は。

（くっそう、絶対本人見つけて、とっちめてやるっ！）

なんて、ひそかな誓いを立てて……。

12、モトカとクリアのステレオ攻撃

それから……。

正しく命からがら鉄扉を開けて凱旋すると。

わざわざ待っていてくれたのか、さっきと同じ場所に鍵を貸してくれた、塩生さんがいた。

「……大丈夫だったか？」

視線があうとともに発せられた言葉は、心配の気持ちが籠っていて。

「あ、うん。この通り平気だよ」

でかいゴミに襲われたりして、微妙にゴミくさくなってる自分がいたけれど。

ここに入れてくれていったのは僕自身だし、塩生さんは駄目だと言っていたのだから、そんな事は自慢げに話すことでもないだろうと判断。

着替えにいったほうがいいだろうか、なんて内心考えつつ、そう言うだけに留める。

しかし流石に匂ったのか、塩生さんは俯いて、

「……ちよとど、ゴミの搬入の時間だった。でも、君は中に入りたいと、そう言った。

人が中にいるからと言ったのだが、上手く伝わらなかった。……口下手で、すまない」

申し訳なさそうに、ああなつた経緯を教えてください。

「なるほど。うん、謝るのはむしろこっちのほうがだな。ごめん。なんか面倒ごと背負わせちゃったみたいで。とりあえず、これ返すよ。ありがとう」

「じゅじん、おひとよしやな。死ぬような目にあつたのに」「さすがたいちよー、女の子にはとことん甘いでありますー」
クリアとモトカのステレオ攻撃が心に響いたたけど。

そこはとりあえず聞こえないふりをして、塩生さんに鍵を返す。

「いや、うん。……あ、そうだ。それより、用は済んだのか？」

塩生さんは塩生さんで、なんだかうろたえながら鍵をしまい、そう聞き返してくる。

「あ、うん。おかげさまで。この子を助けられたよ」

目の前の彼女にどう見えてるのは分からないけど、ちょっと仕返しの意味で、手のひらサイズの女の子の姿に戻って肩口にいるモトカを指し示す。

「うわわっ、た、たいちよーっ、何をっ！」

他の人には見えないって言ったのはクリアたちなのに、モトカは注目されてアタフタと慌てだす。

「この子？ スパナを……助けた？」

冗談に近いノリでいったつもりだったのだけど……対する彼女のリアクションは微妙だった。

どうやらスパナに見えているようだけど、まるでモトカを観察するかのよう凝視している。

それに気圧されたのか、ソソソと僕の首の後ろに隠れるモトカ。

逆に焦つたのは僕である。

今もしかして、スパナが動いているように見えてんじゃないのって。

おそろおそろ塩生さんのリアクションを窺ってみる。

ただ塩生さんは、それに気付いてない様子で。

「大事なものなんだな……見れば分かる。よかったな、助かって」
柔らかく、僅かにだけど笑ってくれた。

『どづいづこと？』

「どづいづこともなにも、動いとるって思つとんのごしゅじんだけ
やからなあ」

思わずクリアに聞くと、なんて身も蓋もないコメントをいただける
始末。

まあとにかく、彼女たちは動き回ろつが喋ろつが問題はないという
ことは改めて分かった。

ついでに、塩生さんが『物』を人のように扱つてもひかない心の広
いタイプってことも。

「ああ、塩生さんのおかげだよ。それで、僕にさせたいことって？」
どうやら塩生さんにも迷惑をかけてしまったようだし、元々その約
束だったわけだから、早いうちに聞いてしまおうと、そう口にする。

すると、塩生さんはまたしても何かうるたえたような様子を見せて
くる。

意外とリアクションの大きい人なのかもしれない。

「……あ、いや、うん。実は私、副会長の仕事をしていんだが……
今、相方が病気で動けないんだ。見ての通り、そう言う仕事は向い
てなくて、君に代わりをお願いしたい……と」

「副会長の仕事？ それって【付属】の生徒がやってもいいの？」
確か、生徒会って【本校】と【付属】で別れていた気がする。

おそらく、塩生さんの言っているのは【本校】の生徒会のことなん
だろつけど。

「……【本校】の生徒じゃ……ない？」

「え、だってせいふ……あ、これ作業着だった」

確かに言っただけでなかったけど、塩生さんはどうやら僕が【付属】の生徒だと気付いてなかったらしい。

「今、歓迎会で、【本校】に来てるんだ」

塩生さんは、歓迎会のことを知らなかったのだろうか。

僕がそう言つと、ますます不思議そうな顔をする。

「……じゃあ、君は男の人、なのに、どうして……」

呟く塩生さんのその様子は、美音先輩と同じ印象を受けた。

というか、僕って誰が見ても男だと思うんだけどなあ。

なんて地味に僕がへこんでいると、それから塩生さんは何だかとても深く考え込んでいるようだった。

だが、しばらくすると妙案を思いついたって顔をして、

「吟也君、だったな。……君、生徒会長、やってくれないか？」

いきなり話を飛躍させる塩生さん。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ ま、まあ約束だし、引き受けんとは言わないけどさ。」

勝手に決めちゃっているの？ 現職の人とかにも聞いたほうが……」

「それは大丈夫だ。今……というより、ずっと生徒会長の席は空いたまま、だから」

それで、どうやって生徒会を運営しているんだろう、と言う素朴な疑問が沸き上がったけれど。

それより根本的な問題があった。

「ちなみに、最初の質問に戻るんだけど、それって【付属】の人間

でも立候補できるの？」

「……もちろん、無理。何故なら会長は【魔物】との戦いにおける総大将だから」

「……」

あれ……？

生徒会長って何かイメージしてたのと違うような？

今度は逆に、こっちが首をかしげる番だった。

しかし、何だかテンションが上がっちゃってるらしく、そんな僕にお構いなしに塩生さんは言葉を続ける。

「だから、早く【本校】に来てほしい……というお願い」

それはつまり、編入試験に受かるか、今日の歓迎会で時間内に生徒会室についてことなんだろうけど。

今になって僕自身、歓迎会の最中だったことに気付かされたその時。無常にも部活動の時間の終了を告げる、チャイムが鳴り響いた。

うーん、ま、仕方ない……か。

モトカのピンチだったわけだしな。

自分では間違った選択をした、とは思ってなかったから……
せっかくのチャンスではあったけれど、思ったほどの落胆はなかった。

「ま、約束だしね。意地でも夏の試験受かって、ご期待に沿えるようにするよ」

「……？ 別に今から生徒会長にイスに座っても構わないぞ？ 私
もこれから向かうところだし」

ますます試験を落とすわけにはいかなかったなあ、なんて思いつ
つ僕がそう言うと、塩生さんは笑顔でそんな言葉を返してくる。

きっと冗談のつもりで言ってるのだろうけど、何だか大げさに買い

かぶられてる気がしないでもなかった。

「またまたあ、そんなプレッシャーかけんといて。そうなれるように頑張るけどさ。」

あ、そうだ、集合場所に戻らなきゃいけないんだった。もう行くね
「あ、ああ……」
こうして、僕は手を上げ塩生さんと別れたのだった。

自分がとんでもない約束をしたこと、その時は知らぬままで……。

「しかし、制限時間って何分くらいだったんだろ。けっこう早かったな……」

急いでいたこともあったんだろうけど、歓迎会が始まってからそれほど時間たつてないんじゃないかなって思える。

「ん？ 何の話でありますか？」

と、気をつけの姿勢で僕の左肩に陣取っていたモトカが首をかしげ、そう聞いてきた。

そう言えば歓迎会のこと、ちゃんと話してなかったんだっけ。

十中八九気にするだろうから、と黙っていたけれども、そう聞かれれば答えないわけにもいかず、一通りモトカのところまで来た経緯を話すと……

案の定、モトカは申し訳なさそうな顔になって。

「モトカが隊のお荷物になるとはっ、不覚の極みでありますっ。…

…かくなる上はっ」

「後悔もしてないし、間違っただことをしたとも思っただから、たとえ冗談でも、その先は言っちゃだめだよ」

「あう……」

気付けば僕はモトカの言葉を遮るように、そう呟いていて、言葉を失ったモトカは泣きそうな顔をする。

ちよつと、言い方が高圧的だったかもしれない。

力が入ってしまったてるのは確かだったけれど。

「自分から言っというてなんだけど、気にしなくていいよ。

どうやら僕は、今すぐにでも【本校】行けるらしいし？ 夏の試験に受ければいいだけの話だからね。 夏の試験

それより、せっかくこうして会えたんだ。これからよろしく、な」
クリアのときも思ったけれど、やっぱり女の子が悲しむ顔は苦手だ。とてつもなく、いたたまれない気分になる。

自分勝手だとは思うけど、笑顔がほしいうって気持ちになる。

だから僕は、おどけつつ握手のつもりで、手を差し出した。

「は、はいっ。よ、よろしくであります……ぐすっ」

すると、泣きながら、モトカは手にしがみ付いてくる。失敗した。

これじゃあ何かいじめてるみたいだ。

「じゅじん、なーかした」

その一部始終をポケットの中で見てたクリアからの突っ込みが、やっぱりいたい。

じゃあどうすればよかったのさあ、って叫びたいくらいに。

しかも、僕の言葉がよっぽどくさかった（正直自覚はあります）からなのか、

そう言いながら何か照れてるから、余計いただけない。

僕はおほん、とわざとらしく咳をして…話を戻すことにする。

「【本校】生徒の歓迎って、どんなのだったんだろうなあ。……受かった人、どれくらいいるんだろ」

「きつと、あのおつちゃんがつまいこと言つて、ほんまはそんな気になかつたんとちがうか？」

「そうかも、なあ」

そう言えばどこかで聞いたことがある。

何らかの課題を与え、それが成功したら褒美がもらえると云う嘘に對しどう対応をとるか、とかなんとか。

その時の反応で、人間性を知ることできるし、この場合なら【本校】へ行くことはそう甘くないと分らせることができるだろう。

まあ、普通は嘘だなんて言われたら怒ると思うけどね。

それでも、100人以上いたわけだし、何人かは受かつてるんじゃないだろうか。

若穂はどうだったんだらう？

そんな事を考えながら、ようやく僕は地下から地上へと帰ってくる。

一階、二階と上がり、集合場所の見える渡り廊下を歩いていく。

そして、【付属】の校舎に入る瞬間、分厚い空気の壁を貫くような感覚に息がつまる。

そう言えば、気圧の負荷がかかってたんだっけ。

今更思い出した僕は、結構鈍感なのかもしれない。

……と。

「吟也！」

【付属】の校舎に戻ってきたとたん、若穂の呼ぶ声がする。

「お、若穂。どうだった……」
生徒会室まで行けた？と聞こうとして、その隣にトイ先生がいるのを知り、なんとなく口を噤む。

「きみは……外部からの新入生、じゃったな？」

「あ、はい。紅恩寺吟也です」

何だか二人とも、ちょっと様子がおかしい、というか、そこには先生と若穂の二人しかいなかった。

あんなにたくさんいた他の生徒たちはどうしたのだろうか？

二人の、まるで遭難者を見つけたかのような態度も含めて、思わず首を傾げる僕である。

「一体、今までどこにいたのかね？」

「え？ あ、はい。下のほうの階にいたというか、なんとというか」

実はずっとトイレにこもっていたんです、なんて嘘がつけないような、緊迫した雰囲気がある。

もしかして僕は、何かやらかしてしまったのだろうか。

「身体のほうは平気かね？」

「は、はい、特には」

もしかすると、早いと感じたのは僕の勘違いで、実はかなりの時間が経ってたのかもしれない。

なのにいつまでたっても帰ってこないから、余計な気を使わせてしまった可能性もある。

そんな感じで僕が申し訳ない気分になっていると。

「心配させるなよ。トイレに行ったと思ったら、全然帰ってこないんだもんよ。……便秘か？」

僕の嘘っぱちを、信じて疑ってない風の若穂がいて。

「はは……まあ、そんなところ？」

僕はただ、苦笑いするしかない。

そんなある意味バレバレな僕を、先生はどう思っただろう。ふっと息を吐くように、笑みを漏らし、

「ま、無事であることに越したことはない、か。吟也君といったね。わが部を続ける意思があるなら、明日また来なさい。……よければ、僕がじきじきに指導してあげよう」

「あ、はい……？」

何でか知らないけど、お咎めなし、らしい。

しかも今のセリフは、何か正式に【付属救援隊】の一員に認められたっぽい感じがしなくもないんですけど……。

「それじゃあ二人とも、明日からよろしく。僕はちょっと医務室のほうを見てくるとするよ」

なんて内心浮かれていると、先生はそう言い残し、早足で去っていく。

「医務室？ 誰か怪我したの？」

そんなせわしない先生の背を目で追いながら、若穂にそう問いかける。

「いや、誰かっていうか……」

なんだか言いにくそうな若穂。

どんな歓迎があったのか知らないけど、そんなにひどかったのだろうか。

答えにくいならばと、僕は話題を変えることにする。

「あ、そうそう。合格者って言うか、生徒会室まで行けた人、何人いたの？」

「いや、誰もいないよ」

「え？ 一人も？ あんなにいたのに？」

俯き、やり切れなそうに呟く若穂。

しかし、よりにもよって一人もいないとは。

やっぱり【本校】へ編入できるって件はハツタリだったのかも知れないな、なんて思う。

「そっか。それじゃ、若穂も駄目だったんだ」

「え？ あ、ああ。そうだな」

一瞬だけ戸惑いの表情を見せ、慌ててそう頷く若穂。

まるで、自分は頭数に入ってなかったかのようなリアクション。

やっぱり何かあるのかなあ、なんて勘ぐってしまう。

もしかして、実は【本校】のスパイ？ だったりして。

だから歓迎会に参加する必要、本当はない、みたいなの？

まあ、全部僕の妄想だけ。

「そ、それより、吟也、本当にトイレだったのか？」

「うぐっ……す、すいませんした。嘘です。ごめん。実は探し物をしてたんだ」

「お初にお目にかかるでありますっ、モトカでありますっ！」

僕に続くように、モトカはそう言って、びしっと敬礼する。

クリアもそんなモトカの真似をしていたけれど、見えてない聞こえてないじゃ、空しいねって感じた。

「探し物って、そのでかいスパナ……って言っているのかそれは？」

「一体どこに？」

「あー、うん。実は立ち入り禁止の地下のゴミ処理施設まで。もし

かしたらまだ匂ってるかも」

おどけて言っただつもりだったが、なんだかちよつと若穂の顔が青い。

「……近くに、【本校】の男子生徒、いなかったか？」

「いや？ いなかったけど……」

女の子ならいたけれど、わざわざ言うこともないかなって、口にはしなかった。

というか、僕の悪事？に加担した、なんて思われるのも（若穂はそんなこと思わないだろうけど）なんだつたからだ。

「そうか。運がいい、というかなんていうか……吟也って見込みあるんじゃないか？【本校】の編入」

と、僕の言葉に、なにやら考えこんでいた若穂は、期待に満ちた顔でそんなことを言い、肩を叩く。

「うゝむ、なんだか知らんが買いかぶられすぎるのも、困るなあ」「イヤってことはないけど、何かみんなして根拠がないっていうか。」

「買いかぶりじゃないさ。実、吟也はこうしてここに立ってるだろ？」

「意味がちよつと……？」

それだつたら若穂だつてそうじゃんかとは、ちよつと言えない雰囲気。

とはいえ、言いたいことがよくわからないので聞き返すと。

「気にならないか？ 歓迎会に参加したほかの奴らのこと」

若穂はまるで謎かけでもするかのようにそう聞いてくる。

「なんだよ、おどかすなよ。みんなどうしたって？」

「半分は途中リタイア、あるいは逃走。残りはみんな医務室さ」

「……マジかよ」

思い出すのは、医務室に行くと言った先生の姿。

若穂から紡ぎだされた言葉は、それでも予想を遙かに上回るもので。

「マジだよ。ほとんどの奴が、開始10分で逃げ出した。……俺もそのうちの一人さ。」

それに耐えたやつだって、結局は苦しんで、もがいて、気絶してぶっ倒れた。

だからむしろ、吟也が何事もなく帰ってきたのを見て、逆に驚いたんだ。多分、先生もそうだったんじゃないかな」

そう言う若穂の顔はいまだ青いままだ。

そのときのことを思い出したのかもしれない。

「みんながそんなになっちゃうなんて、一体何があったんだよ、上で？」

でも、若穂には悪いけど、どうしてもそれは聞いておきたかった。

みんなが逃げ出すような目に僕が遭わなかったのは、若穂の言う通りただの偶然というか、関係のないところにいたせいなんだろうけど……。

僕は、何か失敗してしまったらしい。

若穂の目に、驚愕の色が見てとれる。

「聞いちゃ、まずかったか？」

本当に、一体どんなことがあったんだろうか。

不謹慎にも、むしろ知りたいと思ってしまう僕は、やっぱり最低なのかもしれない。

そんな自分にへこんでいると、しかし若穂は何かを決意したように顔を上げ、

「わかった。明日話す。……今日はもう遅いしな」
そう呟いた。

つられて渡り廊下に目をやると、意外にも結構時間が経っていたらしい。

いつの間にか、深い朱の夕日が落ちていた……。

13、モトカと燃え盛る魂の歌

その日の夜、自宅。

やっぱり当番制にしようって提案はしたんだけど、

『わたくしだけお留守番で仲間外れなのですから、せめて家事くらいさせてください』

なんて頑として聞いてくれないかがみ姉さんの頑ななだけはある、おいしい夕飯をいただいた後の風呂あがり。

自室に戻る途中、かがみ姉さんの部屋の部屋で、何やら話し声が聞こえてくる。

どうやら、クリアやモトカもいるらしい。

古いけどとにかくでかい家なので部屋は有り余ってたから、僕の部屋においてくれという彼女たちをなだめすかしそれぞれに部屋をあてがったのだけれど。

よく考えてみたらクリアやモトカに一部屋は広すぎて、寂しかったのかもしれないな、なんて思う。

つくもん同士……というか、女の子の付き合いもあるだろう。

邪魔するのもヤボだろうし言い訳になるかもしれないけど、立ち聞きするつもりはなかったんだけど。

「……そんな話、聞いてないであります！」

あまり穏やかとはいえないモトカの、唸るような声に、僕は思わず立ち止まってしまった。

「でも事実です。現に、クリアちゃんは……」

低い、これまた聞きなれない、感情を押し殺したようなかがみ姉さんの言葉が続く。

よく分からないけど、話してるのはクリアのことだろうか？

はっきり聞こえないのがもどかしく、駄目だと分かっているにもさらに聞き耳を立ててしまう僕。

「そ、そんなのっ、黙って納得できないでありますっ、モトカ、たいちよーにっ！」

「あかん！ そんなんしたら、クリアたちにいる意味なくなるって、分かっとするはずや」

怒りを含んだモトカの叫びは、クリアの鋭い声に遮られた。

そこには同時に、強い悲しみにも似た感情が渦巻いているようにも聞こえる。

クリアたちのいる意味？

モトカの言う、僕に言いたかったことって、何のことなんだろう？

「でも、この結末をおやかたさまが許すでしょうか？ それはクリアちゃん、あなたが一番分かっているはずですよ」

「わかっとする、わかっとするけど。クリアお願いされたから。クリアがもらった初めてのお願いやから……」

「……………」

静かだったけど、有無を言わせないようなかがみ姉さんの声。

ただっこのような……………さらに泣きそうな、クリアの声。

僕はすぐに聞いてられなくなった。

もう話の終わりがけだったのか、結局何を言っているのか僕には分からなかったけれど。

それはクリアをはじめとした、今、僕の周りにいる子たちが僕の行動いかんでその運命すら変わってしまうって。そんな予感を僕にさせるのには充分だった。

ならば今、僕はどうするべきだ？

思い切って、話していた内容を聞くか？

でも、話してくれるとも限らないし、何より勝手に聞いてしまっている後ろめたさがある。

僕には、その後ろめたさに打ち勝つ勇気がなかった。

多分まだ、彼女たちの運命みたいなものを背負う覚悟も。

僕は、そつとその場を離れ元来た道を引き返す。

足音のしない絨毯の廊下をこのときばかりは感謝しつつ、しばらく行ったところでぐるりと向き直って。

「現実にかくされた　　ほんとう 眞実を掴むまで」

ちっぽけでも燃え盛る魂を歌った、僕の大好きな歌。

いかにも風呂上がりであることを強調するかのような大声で歌いながら、廊下を歩く。

今僕にできること。

彼女たちには似合わないギスギスとした空気をつやむやにしてやることしか、僕には思いつかなかったから……。

次の日。

朝食のテーブルで顔を合わせた三人は、昨日の出来事が嘘であったかのようにかしましかつた。

そこにはぎこちなさは微塵もなく。内容も知らないくせに運命とかいって気にしすぎだったのかなと思う反面、たとえ何かあるとしても、まだ僕が聞いていいことじゃないんだろうな、なんて考える。

いつかはきつと、面と向く必要のあることなのだろうけど……。この今を壊したくなかったって、そういう気持ちもあったかかもしれない。

その行動が正しかったのかそうでないのかは……分からないけれど。

そんなこんなで、留守番のかがみ姉さんを残し、クリアとモト力を連れての登校。

校門近くまで来たところで、若穂の姿を発見した。どうやら、待っていてくれたらしい。

「おはよう、若穂。待っていてくれたのか？」

「ああ、おはよう。昨日の話の続き、ここで話したほうが分かりやすいと思うてさ」

頷き、僕は若穂と連れ立って歩きだす。

そのまましばらくは、特に会話もなく歩いていただけ。

例の【本校】と【付属】を遮る金網の見える所まで来て、若穂は立ち止まった。

「吟也は、何のためにこの金網や柵があるか、知ってるか？」

「え？ …… そりゃ、【本校】は女子校みたいなもんで、【付属】は男子校みたいなもので…… ってことじゃなく？」

それだったらもう分かりきってることだし聞かないよなあとは思いつつ、僕は思ったままを答える。

すると、若穂は改めて得心したように顔を上げ、

「ああ、もちろんそんな単純な理由じゃない。あやまって【付属】の生徒や、関係のない人間が入り込まないように、という意味では同じだけど…… 簡単に言えば【本校】の敷地に入ること自体、【本校】の生徒以外には危険だからなんだ」

「危険……？」

確かに、気圧が違っていて、慣れない人には長時間は危険かしれないけれど。

「そう、危険だ。下手をすれば死を招きかねないほどの危険が、【本校】にはある。」

……いや、正確には【本校】の生徒に、と言ったほうがいいかもしれないな」

そう言う若穂の口ぶりから判断すると、気圧のことを言っているのではないことが分かる。

「【本校】の生徒が危険なの？ って、何で？ 僕、何人かに会ってるけど……」

「もしかして、【本校】の生徒に親しい人…… そうだな、たとえば恋人とか、いたりするの？」

問いかけたはずなのに、逆に聞き返される。しかも、よりもよつてとんでもないこを。

「こ、恋人つておい！ いるように見える？」

「……ノーコメントで」

正直に答えたのに、何かバカにしているような顔をする若穂。

むう、ホントの男だったら、どついても許される顔だぞ、それはつ。

「親しい人は？」

「うん、いるっちゃいるけど」

それにはコクコク頷く僕。

そのくらいなら、まあ潤ちゃんも許してくれるだろ、なんて思いつつ。

「そうか。もしかしたら吟也には免疫があるのかもしれないな。【異世^{アジール}】に入ったのにも関わらず、平気でいられたのはそのせいか」
やはりか、つて感じで、一人納得してる若穂。

「【異世】って何さ？」

何か聞いてばっかりだけど、分からないものは分からないのだから仕方がない。

再度問いかけると、若穂は頷き、

「【異世】とは……そうだな。分かりやすく言えば、対【魔物】のための【生徒】が用いるバトルフィールドのことだよ。【魔物】が出現したときにはそれを展開して戦うのが普通で、【生徒】たちが【魔物】と戦うための力に目覚めたときには、すでにあつたとされているものなだけ……」

結構謎の多いものでさ。一番の謎は、その領域が男性体を拒む、ということなんだ。

現在【本校】に通っている男子や、吟也…お前のような特別な人間を除けば、だけど」

熱のこもった様子でに一気にまくし立てる。

「違う世界に入った気いしたの、そのためやったんやな」

「さすがたいちよー。さすが女の敵、であります…って、うわわっ誰だか知らんけど余計な言葉覚えさせやがって、なんて思いつつ、肩上げして無言の抗議。

「特別、ねえ？ 言われると何かドキドキする言葉だけど、正直あまり実感わかないな」

「そう思ってる時点で特別なんだよ。そんなだから気がつかなかったんだろっけど、戦いの雰囲気慣れるよう、事が起こったときに迅速に行動できるように、【本校】の敷地にはその【異世】が常に展開されてるんだからな」

「……………う、うむう」

そう言われると、確かに僕はそんなこと全く気づいてはいなかった。気圧が変わった、くらいにしか思っていなかった。

きつと、それが【異世】だったんだろっ。

だとすると…………。

「歓迎会に参加した、他のみんなは……………どうなったんだ？」

知りたかったのは昨日若穂が言葉を濁した、その内容。

今日話すと言ってくれた、本題。

若穂はその時のことを思い出したのか、青い顔をして俯いて。

「實際肌で実感できなきゃ掴みづらいとは思っけれど、多分、いきなり深い海の底に放り込まれたって感覚が、一番ニューアンスとしては近いんだと思う。」

始まってすぐは、まさかそんな事になってるとは思わないし、空気が重いな、くらいのものだったけど……【異世】に入ったことを実感した瞬間、パニックが起こった」

息継ぎをするみたいに、一度言葉を切る若穂。

その場にいるかのごとき臨場感に、僕もクリアもモトカもそろって息をのむ。

「水圧のようなプレッシャーは全身を縛り、拒絶からくる恐怖が呼吸することを封じ、

大半のものは空気を求め逃げ惑い、そのことを経験で知っていた上級生や比較的冷静だったものも、

その無呼吸状態に等しい自らを拒絶する世界に、長くは耐えられなかった。

しかも階が上がる度に、水深が増すように、その領域は濃くなっていくんだ。

歓迎会とは名ばかりの、まさに地獄絵図、だったよ。次々と意識を失ったものたちが運ばれて……」

改めてそこで僕を見る若穂。

真剣な瞳に、違う意味でドキドキしてきたけれど。

「だから俺はそれからだいたいぶたって何事もなく帰ってきたお前を見て、逆に恐怖すら覚えたくらいだった。それが当たり前のはずなのに……ひどく異質に見えたんだ」

ブラウン管の向こうの悪夢を語るかのごとく、若穂は呟く。

正直、それは僕の予想の範疇を超えていたものだったけど。

【本校】に男子生徒がほとんどいなかったり、男で【本校】の試験

を受ける人間が通常ありえないのはそのためだったのだと、そのとき僕は初めて知った。

紅葉台高校のこと、【生徒】のこと、僕は予想以上に何も知らなかったらしい。

「そうだったのか。僕、何も知らなかったんだな。若穂ってすつげえ詳しいんだな。僕も見習わんと」

無知のまま突っ走ってた自分が恥ずかしい、とさえ思える。

たまたま潤ちゃんのおかげで平気だっただけ、というか、これもきつと昔みたいに彼女が僕を守ってくれたんだろう。

だからその時は、純粹に自分への反省のつもりでそう呟いたのだけど……。

「えっ？ や、それは、俺っ……」

はっとなり、あたふたと慌てだす若穂。

初めはどうしてそんなにうるたえてるのか分からなかったけど、すぐに若穂が僕の言葉を受けて、詳しすぎる若穂に疑問を抱いたのだと勘違いしていることに気づく。

いや、まあ、疑問を抱いているというか、正体を隠して彼女が【付属】にいることをとくに分かっちゃってはいるんだけどね。

確かに思い返してみれば、無防備に語りすぎな感はなくもないけれど。

だからと言って、君の正体は分かっているんだぞ、なんて言って困らせるわけにもいかず。

「今更隠さなくてもいいって。僕に隠れて猛勉強してるんだろ？
今度僕も混ぜてくれよな」

「たいちよー、それちよつと無理が……あわわっ」

「30点、やな」

もちろん自分でも苦しいなってのは十二分に分かってたけど。

他に気の利いた言葉が浮かばなかったんだから仕方ないじゃんって肩上げ。

「何でモトカばかりっ、てったい、てったいでありますーっ！」

「わあっ、ふ、二人はきついつて」

モトカは肩の上に耐えられなくなったのか、自分だけずるいでありますよとばかりにクリアの隣へと避難するモトカ。

別にどっちがってわけじゃなく、たまたまだったというか、モトカが仕返しのしやすい場所にいただけって話なんだけど。

まあ、言われてみれば、モトカはついついいじめたくなってしまいうタイプ、って感じはしなくもない。

「お、俺は誤魔化してなんか……って、あれ？ ああ、ま、そういうことなら」

と、若穂には見えないところでやいのやいのしていたら。

若穂としても、自分の素性を知られるのは本意じゃなかったんだろう。

戸惑い、苦笑しながら、クリアの言う30点の僕の言葉に頷いてくれる。

ま、本当に気づいてないのか？とは聞けないしね、きつとお互いに。

「お、おう。よろしく！ 頼りにしてるぜっ」

対する僕もちよつときこちなくなってしまうけど、その思いは嘘じゃなかったから……。

若穂がそうありたいのなら、男友達として、この高校生活楽しくできればいい、なんて思う。

「そ、そか……。あ、長話しちまったな。そろそろ学校、行くか」
「お、そうだね」

そうして。

なんだか少し照れた様子の若穂の言葉に頷き、改めて学校へと歩を進めたのだった……。

13、モトカと燃え盛る魂の歌（後書き）

そろそろ更新ペースが落ちてくるかもです。一日、1話はなんとかしたいなあ。

14、モトカと本校のBIG3

「……っ、何で？ 委員長クラスの【生徒】が3人も？」

再び登校路を歩き出してすぐ。

若穂が突然口調を変え、【本校】へと続く通学路の通りを見やり、立ちつくしている。

それにならない僕もそっちに視線を向けると。

そこにはよく知った顔……潤ちゃんと、それから【本校】校舎で会った美音先輩と塩生さんの姿があるのを知った。

「おー、逃げてく逃げてく。おもしろいように逃げてってるでありますよー」

さらに、二人でポケットはやっぱり窮屈だったのか、再び定位置に戻ったモトカがそんなことを呟く。

背中越しだからはつきりとは言えないけれど。

それはきつと、増え始めた【付属】の……正確には男子生徒たちのことを言っているんだろう。

思いつくのは、【付属】の生徒にとって【本校】の生徒こそが危険だという若穂の言葉だった。

「世界を守るヒロインなのに、こんなうとまれとるなんて皮肉なものやね。潤はんが家近いのに寮暮らしなんかは、そのせいなのかもしれないからへんな」

ポケットの中で、じつと潤ちゃんを見つめたままのクリアのその言葉が、心に響いた。

誰が悪いわけじゃないんだらうけど、何だか無性に腹が立つ僕。

でもそのことで逆に、若穂が僕に対して言っていた、僕が特別だつて言う意味がちょっと理解できた気がする。

もう慣れてしまっているのか、気にしないふりをしているだけなのか。

そんな周りの雰囲気なんかお構いなしに、こちらへ歩いてくる彼女たち。

考えなくても、僕に何か用事があるんだって分かったから。

「おはよう、潤ちゃん。それと美音先輩と塩生さんも。みんなそろってどうかした？ まさかこの僕に会いに来てくれた、とか？」
テンション上げて、笑顔で挨拶。

「え？ 吟也、知り合い？」

若穂はそんな僕を見て目を丸くし、彼女たちを見てバツの悪そうな顔をしつつ、そう呟いている。

その様子は、彼女たちを他の【付属】の生徒たちのように恐れていると言うのとは単純にちょっと違うみたいだった。

どちらかというところ、面倒臭い奴らにあっち待たせて感ぜって感じな、気の置けない様子だろうか。

もしかして、若穂は彼女たちと知り合いか、それ以上の間柄なのかもしれない。

「おはよう、吟也。そのまさかよ。ちょっといくつか聞きたいことがあったから」

「……おはよう」

なんて思っていると、僕の売り言葉をそのまま打ち返すがごとく潤ちやんが答え、続いて塩生さんが口数少なくぺこりと頭をさげる。

「おはよ〜にゃー。吟也くん。……を、そっちの人は吟也くんのこと

レかじゃ？」

そして、美音先輩はそれこそ格好の獲物を見つけたかのような怪しい笑顔で、何故かサムズアップ。

「な、な何言ってる！ ……どうも、クラスメートの若穂ですっ」

思わず詰め寄って胸ぐらでも掴み上げそうなのそんな勢いすらあったけど。

それも一瞬で、我に返ったかのように慥然とした言葉を紡ぐ若穂。

「三水潤よ。……えーと、よろしく」

「どうも、塩生、です……」

「あ……は、はいっ。よ、よろしくですっ」

かと思ったら、潤ちゃんや塩生さんの挨拶に対しては再びかしまつてそう返す。

それはやっぱり、恐れているからなんかじゃなく、尊んでいるからこそそのものに見えなくなかった。

美音先輩に至っては、親しさすら覚える若穂の態度に、不思議と安心している僕がいる。

それまであったはずのわけの分からないイライラも、自然となくなっていて。

「それで、何か僕の用事があるんでしょう？ ……っていうか、三人知り合いだったんだね」

「ええ、ちよっと縁があつて。仲良くさせてもらってるわ。で、その事も含めて、なんだけど……吟也、【付属救援隊】に入ったんですって？」

「うん、美音先輩に歓迎会のこと教えてもらったからさ」

潤ちゃんという言葉を受けて、僕は美音先輩に視線を向けつつそう答える。

でも、さっきまで笑顔だった美音先輩は何だか不満そうな顔をしていた。

「せっかく教えたのににや〜、せっかく出張中の副委員長の埋め合わせできると思ったのに、吟也くん生徒会室に来ないんだもの」
それは、思わず出た本音だったんだろう。

しかも、僕が生徒会室に辿り着くこと前提なのが、なんというか、過大評価されてるなあって思える。

「いや、それは……どっちにしろ無理だったんじゃないですかね。僕、【本校】のこととか【生徒】のこととか全然知らなかったし、運良く無事だったのも潤ちゃんのおかげだし」

ホントはモト力を助けに行ってたことがあったからなんだけど、それを話したら立ち入り禁止の場所へ入ることを見逃してくれた塩生さんの悪い気がして、とりあえずそう誤魔化してみる。

「私のおかげ？ それってどういうこと？」

「あ、うん。僕さ、【本校】に広がってる【異世】ってやつ？ あんまり影響みたいなんだよね。それって、潤ちゃんが近くにいられたおかげだつて聞いて……」

「誰にそれを？」

「ああ、この話は若穂から聞いたんだけど」

「え？ あ……え？ その、すいませんっ」

潤ちゃんに視線を向けられ、何故か謝ってる若穂。

まあ、潤ちゃんってそうさせる雰囲気というか、眼力とかある気がするし、分からはないけれど。

「そう。そうだったら私も嬉しいことだけど。やっぱり言うだけあって、吟也にはもともと才能あったんじゃないかしらね。じゃなきや、もつと世界に【生徒】が溢れていてもいいはずだもの」
その口調は穏やかで、ホントにちよつと嬉しそうに潤ちゃんは答える。

昔は中身も、纏う空気のまんま感じてたけど、しみじみ潤ちやんっていい方になつたんだなって思える。

そんな潤ちゃんに、若穂も気付いたらしい。

まだどこか引けてる部分はあつたけれど、納得したように頷いている。

「はは、そうだったらいいけど」

たぶん、それは昔から欲しくて、でもずっと得られなかったもののひとつだから、嘘でもそう言われると照れてしまう僕である。

「紅恩寺は自分を知らなすぎ。……君なら、生徒会長にだってなれる……はず」

だけど、そこでそんな僕を諭すように言葉を発したのは、塩生さんだった。

「そう、それよ！ 私が一番聞きたかったのは、吟也、あなた生徒会長になること約束したんですって？ っていうかあなたたちいつの間に知り合つたのよ。私に一言あつてもいいでしょう？」

「え？ せ、生徒会長！？」

かと思えば、かつての潤ちゃんらしい、そんなセリフ。

それを聞いた若穂は、ひどく驚いた様子で、僕を見てくる。

「ちよ、ちよつと待って！ 何か話が大きくなってない？ 確かにそんな約束はしたけど」

まるで自分から立候補したみたいない方に僕自身も動揺を隠せな

い。

そもそも、なんで僕が推薦されたのかもわかんないのに。

「ひどいじゃあ。あたしの約束は守ってくれきゃかったのに命ぢやんとだにやんて」

でもって、そこにかぶせてくる、何だか誤解を招きそうな美音先輩のセリフ。

「ごしゅじん、もてもてやわあ」

「さすがたいちよー、罪なお人、であります」

それを、クリアとモト力が助長して、

「紅恩寺、しーっ。……二人だけの秘密」

止めを刺すかのような、塩生さんの言葉がつづく。

塩生さんとしては、鍵を貸したりなんかした件とかのことを言うてるんだらうけど。

「ぎ、吟也っ！ この私に隠し事なんかしていいと思ってるの！」

「わあっ？ 潤ちゃんが昔に戻ったーっ！」

いきなり理不尽な怒り方をする潤ちゃんに、思わずガキ大将だった頃の彼女の姿が重なる。

これは、折檻食らう前にとっと逃げたほづがいいのだろうか、なんて思っている。

ふと、頭に浮かんできたのは、潤ちゃんのお別れのとときの記憶、だった。

僕の強がりで喧嘩中だったあの時。

その流れで、【生徒】になってやるって、半ば強引にした約束。押し付けがましい一方的な物だって分かってて、それでも潤ちゃんにその約束が叶うまで待っていてほしくて。僕は約束が叶って紅葉台の帰ってくるまで、僕の代わりとして潤ちゃんに渡したものがあつた。当時の潤ちゃんのことを怖いって思ってた部分も多分にあつて。なんだか人質を取られたような気分です。

「べ、べつに潤ちゃんが言うような隠し事なんてないって。塩生さんとは、この子を探してた時に会っただけだよ」

「……この子？」

「うう、何か緊張するでありますっ」

僕がそう言っただけで肩にいたモトカを手のひらにのせる。

それが、潤ちゃんたちにどう映ってるのかは分からない。

ただ、目が合ったのか、言葉通り緊張してカチコチになってるモトカその仕種が可愛くて、モトカにはは悪いけど思わず苦笑をもらっている。

潤ちゃんはふっと柔らかい表情になって。

「……そう。嘘は言っただけみたいね。吟也、やっぱり変わってないわ。」

「そうやって、自分の持ち物に、まるで家族みたいに接してるとこ」
「そう、呟いた。」

「家族みたい……か。」

「たしかにクリアやモトカを見ていたら、当然と言えばそうなのかもしれないけど。」

そこで、確信したことが、ひとつあった。

クリアの言っていた、潤ちゃんのところにいるつくもんの一人。それってやっぱり、お別れの時に人質として預けたもの……
小学校の頃愛用していた白いホッチキス、なんじゃないのかって。

「うん。『物』は大切にしなさいって、よく親父とかにも言われたしね。

……そう言えばさ、それで思い出したっていうか、ちょっと聞いた
いことあるんだけどさ、

僕が引越す時、【生徒】になってここに戻ってくるって約束のときの人質って、潤ちゃん今持ってる？」

「何よ藪から棒に。しかも人質って、物凄く人聞き悪いわね。

まあ、言いたいことは分かるっていうか、一応持ってるけど、それがどうかしたの？」

潤ちゃんなら、そう言えば伝わるかなって思ってそう聞くと、それに潤ちゃんは苦笑いして頷いてくれる。

「あ、うん。まだ約束はこれから叶えるところ、だけどさ。

こうして戻ってきたわけだし、返してもらおうかなって思ったんだけど……いいかなって」

残念なことに、今日の潤ちゃんはそれを持っていない（クリアが反応してないから）んだらうけど、それでも僕はその時、4人目のつくもんの子が、とりたてて苦労することなくゲットできるかな、なんて思っていた。

「それは……できない相談ね。」

だけど。

怒ってる風もなく、未だ約束を果たしてない僕を責めることもなく、でもきつぱりはっきり潤ちゃんは、否定の言葉を口にする。

「イヤよ。だって……人質だもの。返しちゃったら、約束果たさなくともって、思つかもしれないでしょ。我侂な暴君の相手なんかしないですむって、そう思つかもしれないでしょう?」

「や、そんな事しないって」

「でも! 私は不安なの。吟也が……っ」

続くその言葉は、小さくてよく聞こえなかったけれど。

たかが、と言ってしまえばそれだけの、でも僕にはそうは言えない、託した大事な『物』を。

潤ちゃんは潤ちゃんなりに大切にしてくれていたのが、なんとなく伝わってくる。

僕の一方的に押し付けたと思っていた約束も、真摯に受け止めてくれたってことを。

甘かったな。

さて、どうしよう?

潤ちゃんの言葉はすごく嬉しいけど、それとコレとはまた別問題で、夏の試験に受かるまで待つ、ということでもいいのかどうかだけど、これは僕一人では判断がつきそうになかったので、とりあえず二人に聞いてみることにする。

『どうしよう? 試験まで待つってのは、あり?』

「うん、困ったな。できれば早いほうがいいんやけど。基本的にクリアたちはものやから、ごしゅじんおらんと動けんしな」

案の定、歯切れの悪いクリアの言葉。
そう言うだろうなって気はしていた。
危険な目にあつてたモトカなんかがいい例だろう。

まあ、潤ちゃんのところにいるんだからそうそう危ない目にはあわないとは思っけど。

その姿が潤ちゃんに見えてない以上、潤ちゃんのところのいる子は、気の休まることはないだろうとも思える。

『ここは、人質交換……じゃなく、その子の代わりになる道具をた
いちよーがお渡しする、というのはどうでありますか？ ただ返し
てもらふよりはいいと思うでありますけど』
と、そこでモトカから出た案。

それはありかもしれないなど、そう思った。
かわりに何かプレゼントをして、と言うのは悪くない気がする。

「あのさ、だったら……」
その案をとりあえず口にしよとした、その瞬間。
鳴り響くのは、始業前のチャイムだった。

「あつ、予鈴鳴ったにや。二人の邪魔にならないように、あたした
ちはもう行くにや」

「それもそうか。……よし、紅恩寺、また会おう」

「ちよ、ちよつと？ 言ってるのよ！ ……って、もう行かなきゃ
つ。えつとそのつ、それじゃっ！」

時間に律儀なのか、三人は挨拶もそこそこに駆け出していく。

結局、モトカの良い案を口にすることもできず。
何だか妙に気まずい雰囲気の中、残された僕と若穂はといえば。

「ええと、僕たちも、行こうか？」

「……………ああ、そうだな」

結局潤ちゃんたちは何の用だったのかなとしみじみ思いつつ。

長かった登校時間に二人で苦笑しながら、【付属】校舎へ向かうの
だった……………。

15、モトカと選べない持ち主

そして……その日の放課後。

僕は若穂と連れ立って、【付属救援隊】の部室に向かっていた。

「しかし、吟也の幼馴染がまさかあの鬼の風紀委員長様、だったとはな」

「風紀委員長ねえ、今の潤ちゃんにはぴったりな気もするけど」

興奮してるっていうのと少しニュアンスが近いかもしれないけれど、若穂はヒマさえあれば僕にそんな、驚き半分、尊敬半分みたいな口調を向けてくる。

ついでに、僕は若穂から聞くまで知らなかったのだが。

例えば風紀委員会……その名の通り【本校】における通常の学校と変わらない風紀の仕事をこなす一方で、委員会とは、対魔物における一個隊のことを表わしているらしかった。

つまり、モトカの口癖じゃないけれど、潤ちゃんは【生徒】の中でも特に優秀な隊長のひとりなのだと言う。

「しかも、保健委員長や副会長とも知り合っているのか、随分目をかけられてるみたいじゃないか。

……お前は凄いやつだったんだなって、つくづく思うよ」

ちなみに美音先輩が保健委員長で、塩生さんが副会長である。委員長などの役職は学年とは関係なく、単純に力の差らしい。

熱く語る若穂のその姿は、詳しく知っている……というより、まさしくアイドルの熱をあげるファンの一人に見えるほど。

「だからって、僕が凄い理由にはならないと思うんだけどなあ」

「何言ってるんだ。お前はあの三人が一同に会すことの凄さを知らないからそんな事が言えるんだよ。いいか、三人が一度に出勤するなんてことはな、Aクラスの【魔物】が大群でやってくるとか、そういうレベルなんだぞ！」

別に出動してるわけじゃないんじゃない、とは流石に言えず、何だか若穂の新しい面を知った気がする僕である。

普段の落ち着いた感じは、やっぱりブラフなんだろう。

若穂が素らしい姿を見せてくれるのは、いいことなのだと思うけど。

「Aクラスってというのは？」

「吟也、冗談抜きで何も知らないんだな。ニュースとかでもよく流れてたはずだけど……」

まあ、いいか。うん、そうだな。Aクラスってというのは、GからAAまでランク付けされている【魔物】の強さ、あるいは危険度を表わすんだ。Aクラスって言えば上から三番目、だな。

一体現れただけで、町全体に避難勧告が出されるレベル、ってところか」

「確かに、それは強そうだな」

言われてみれば、中学の頃テレビで見たような気もするけど……

最近、外界と内界の境界がはっきりしてるし、【魔物】が出たっ

てニュースも聞かないからいまいちピンとこなかった。

2、3年そこらのことも忘れてるとは……僕ってもう年だろうか、なんて考えてしまう。

「ああ、そりやあもう。当然、【異世】の力だって桁外れなんだ。だから歓迎会のときだって、彼女たちは参加してなかったはずだ。

【付属】の生徒の命に関わるからさすがにな。……なのに吟也ときたら【本校】の、それも【異世】の中で彼女たちと会ったとか抜かしやがるし」

どこで彼女たちと会ったんだって、若穂がどうしても知りたそうにしていたから。

つくもんのことや鍵のこととかは伏せて、彼女たちと会ったときのことを、できるだけ詳しく話した。

そうしたら、僕がそれ以降、肌身離さず肩に担いでいるスパナ（若穂にはそう見えるらしい）を探していたことは納得してくれたけど、どうやら塩生さんたちに会ったこと自体が、ありえないことだったようだ。

今思えば、塩生さんがあんな所にいたのは歓迎会だから避難していたのかもしれないけれど。

「普通は、会うことも話すこともできない……ってこと？」

「そうだよ。ま、それはあくまで彼女たちが【異世】を展開していたらの話だけだな。

けど、普通のやつなら、そんな事しなくても彼女たちがいるだけで潜在的な恐怖を覚える。

紅葉台が【生徒】の資格あるものを集めてるのは、もちろん対【魔物】の為が第一だけど……

彼女たちがその力のために一般世界に馴染めないからって側面もあるんだ」

「……なんか、やだな、それ」

思わず出た僕の言葉。

若穂はそんな僕を見て、笑顔で肩を叩いて。

「だから、お前は凄いなだよ。吟也は自分が、彼女たちにとって何の掛け値ももなしに当たり前前に話しかけてくれる貴重な存在だということ、もっと自覚したほうがいい。それがどれだけ凄いことで救われることなのか。それが当たり前前の吟也には分からないかもしれないけどな」

「……」

最後は苦笑交じりでそうまとめる若穂に、僕はただ頷くことしかできなかった。

でもそのことで、色々なことが分かった気がする。

試験を受けると言ったら、無理だって言った潤ちゃんのことも。

来ないと分かっている、ずっとそこで誰かが来るのを待っていたはずなのに、

当たり前前のようにやってきた僕を見て驚いていた美音先輩のことも普通に会話してる僕に、何だか戸惑って本当に男なのかと疑ってた塩生さんのことも。

そして、今日の前で苦笑いしている、若穂のことも……。

「をを、ここ、たいちよーの気配がするでありますっ」

それから……部室に辿り着いて。

入るや否や初めてここに来た時のクリアと同じようなリアクションをするモトカ。

いや、確かに入ったとたんに、機械をいじるためのラボ特有の鉄くさい匂いとか、油の匂いとかするのは分かるんだけども。

これはちよつと、香水でもつけたほうがいいのかなって考えてしま
う。

あんまり好きじゃないんだけどな……って、それよりも。

「ずいぶんへつたな、昨日はあんなぎょうさんおつたのに」

これも若穂に聞いたのだが、前線に出て戦う【生徒】たちを補佐するクラブは【本校】にもあるらしい。

天下の紅葉台の補給拠点にしては、思ったより大きくないんだなと思っ
ていたけれど、

この部は紅葉台の組織からすれば補助の補助、なのだと言う。

したがって、この【付属救援隊】が前線に出ることはほとんどない
らしい。

まあ、本校の校舎内にすら長くいられないのなら、仕方がないこと
なのかもしれないけど。

かわりに、この部で行われる主なことは【生徒】用の武器防具、消
耗品の修理、作成とのこと。

そのためのラボスペースは、さすがに本場だけあって極上の環境が
整っているようだけど、やはりその分お金がかかるのだろう。

全部で数十台。そのほとんどが先輩方が使用しているため、正直昨
日の時点ではこの状況でこの人数をどうやってさばくつもりなんだ
ろうって思ってたんだけど。

クリアが呟く通り。それほど早い時間に来たわけでもないのに、僕

たちと同じ、いわゆる新入生の姿は僕たちをのぞけば三人しかそこにいなかった。

「この人がいないのって、もしかしなくても昨日の影響？」

「ああ、そうだろうな。まだ医療室から離れられない奴もいるらしい。多分……こうなることは予測済みだったんだろうけどな」

なんとなく、若穂の言う通り、初めからあの歓迎会は真の入部試験みたいなもので、補助の補助とはいえ共に戦場に立つかもしれない以上、【異世】に入れないじゃ元も子もないっていうのがあったんだろうって思える。

「ふむ。今年は5名か。豊作、と言えるかもしれんの。改めて……我ら【付属救援隊】へようこそ。」

さっそくだが、それぞれ担当の上級生についてもらい、戦闘用品の生成、修理のノウハウを覚えてもらう」

案の定、トイ先生は満足そうに頷いてからそう言つと、名を呼ばれた上級生たち三人が顔を出す。

あれ、でも2人少ないな、なんて僕が思っていると。

「でだ、紅恩寺吟也君と若穂由宇君。君たちはこっちへきなさい。」

儂が直々に教えてやるうぞ」

そんな言葉が返ってきて、ざわめく辺りの空気。

なんとなく、先生自ら指導、なんてことは滅多にないことなんだろうなって想像できる。

「よかったな。期待されているみたいだぜ」

呆気を取られる僕を前に他人事のように呟いて、若穂はトイ先生の背中を追いかける。

場の空気に流されているというか、もうなんか後に引けそうもないなあ、なんて思いつつ、僕もその後が続く。

そうして……。

二人そろって、クラブに使う道具について、その説明が始まったわけなのだけど。

正直、自分の家にもラボがあるので、その辺の知識は一応頭に入っていたりするわけで。

かといつてもう知ってます、とは中々切り出しにくく。

その説明を聞いているのは僕だけじゃなかったから、大人しくその説明を聞いていた。

「それでだ、君たちの記念すべき初仕事は【本校】の【生徒】が所持する武器の作成になる。大切なものとはいえ、消耗品であることに間違いはないからの。多く持つてるに越したことはないだろう。それに伴って、まずやらなくてはならないのは誰のものを作るか決めること、じゃ。

ここに、全生徒の簡単なプロフィールと、好んで使う武器、戦闘データについて書かれているファイルがある。参考にしてくれて構わないぞ」

そう言っで、でん、と置かれる分厚いファイル。

なんでこれだけアナログなんだろう、なんて思いつつ手に取るうとしたら、しかしその前に若穂に奪われた。

僕が目をしろくろさせる中、しばらくページをめくっていた若穂は顔をあげ、

「戦闘データはともかく、このプロフィールって必要なんですか？

何ですかこの好きなタイプってのは」

ほっとしたり慥然としたりの百面相で、そう呟く。

もしかしたら、そこに自分のもあるかも、とか考えてたのかな？

「どんな人が扱うのか、それが分からなきゃいい道具は作れない……
……ってことですよね？」

「さすがごしゅじん、クリアたちのことわかつとんな」

「モト力たちは持ち主を選べないでありますからねえ」

ほとんど無意識に出た僕の言葉に、はしゃぐ自称もの娘たち。
けれど、先生もそれに頷いて。

「その通りじゃよ。まあ、このファイル自体、相手方の要望でもあるがね」

「あ、本当だ。……って、すまん吟也、一人で見てた」

それまで一人でファイルを見ていた若穂は、そのことにようやく気付いてはつとなり、おずおずと僕の方へ差し出してくる。

見てみると、確かにそれは手書きのアンケート用紙みたいなものだった。

「本来ならば、持ち主となる本人に直接会っているいろいろ相談すべきなんじゃがの。」

さすがに私一人ではそうもいかんからな。こういう形を取らせてもらっているのだよ」

確かに、それが可能ならその方が絶対いいのだろうけど。

それより何よりも今先生、物凄く重要なこと言ったよな？

私一人ではきついつて、それってもしかしなくても、先生は直接本人に会ったりしているってことなのだろうか？

「いろいろ相談って、先生はもしかして【本校】によく行くんですか？」

僕は期待をこめて、そう聞いてみる。

その期待には、あわよくば僕も同伴させてくれつつもあつたりして。

「ん？ …… まあな。完成した品を運ばなければならんしな」

「それって、ついていくのってマズイですかね？」

おそろおそろ窺つように僕が言うと、先生は苦笑する。

「まさか君から言われるとは思わなかったよ。老体にあの量を一人ではちときつくてな、もしよければ、君に頼むつもりだった」

どうやら歓迎会のとき、何ら影響なく帰ってきた僕を見て、そのことを先生自身が考えてくれていたらしい。

「ほ、ほんとですかっ？ それじゃあ、お願いしますっ！」

僕は内心ガッツポーズ。

これでとりあえず、再び【本校】へ入る機会を得たわけで。

「ああ、こちらこそ期待しているよ」

「全く、行動力あるな吟也は」

満足そうに頷いてるトイ先生と、ちよつと呆れたように呟く若穂。

「あれ？ 若穂は行かんの？」

「あ、ああ。 …… 俺は吟也みたいに平気ってわけじゃないからな」

そのつもりで話していたわけなんだけど、どうやら若穂はあまり乗り気じゃないらしい。

まあ、そのについては、別に強制することでもないわけで。

「そっか。ま、それならそれで、若穂は誰に作る？」

「そうだな ……」

さくつと切り替えて、クラブ活動の話題に転ずる。

そうして。

その日のクラブ活動は、ファイルを眺めつつ過ごしたのだった……。

15、モトカと選べない持ち主（後書き）

そろそろ、サブタイトルがきつくなってきた……。。

16、モトカとその身に秘める恐ろしい力

それから……改めてクラブ活動、第一日を終えて、その日の夜。夕食を終えてすぐ。

「あのさクリア、つくもんのことで聞きたいことがあるんだけど」「ちよっと思うことがあって、僕はクリアにそう切り出す。

モトカと一緒にテレビに釘付けになっていたクリアは（ちなみに、かがみ姉さんは台所で夕食の後片付け中）、すぐにこっちに向き直り、机を駆けて僕のほうへやってくる。

「うん？ 何聞きたいんや、ごしゅじん。」

「クリアたちの元っていうか、クリアの場合サングラスなんだろうけどさ、元々誰のものなんだ？」

「ん？ 誰ってごしゅじんのものに決まってるやん」

「いや、うん……そう返されるとはちよっと思ってたけどさあ。

クリア、潤ちゃんと最初に会ったとき、潤ちゃんのかばんの中につくもんがいるって、そう言ってただろ？ ってことは、その子の媒体になってる『物』って、もともと僕の持ち物……ってことでいいの？」

それは、朝からずっと考えていたことだった。

クリアは会ったときから当然のように僕をごしゅじんだと言っけれど。

僕自身はクリアたちのことを知らなかった。

今まで生きてきて、九十九神の精霊が生まれてくるほどサングラスや、あるいはスパナを持っていた記憶、それが僕にはなかった。

だから、クリアがちよっと思いをしてくるだけで、本当のごしゅじ

んは別にいるのだとそう思っていた。

しかし今は。

僕が情けないことに忘れてしまっているだけで……っという気持ちがあった。

それは、モト力を助けたときに頭に浮かんできた知らない記憶や、昔から近くにいたかがみ姉さんの存在がそう思わせてるのかもしれない。

そんな僕が、クリアたちの言うごしゅじんであると証明しうる存在。それが、潤ちゃんのところにいるつくもんさんなのだと、そんな気がしていて。

「もちろん、そうや。つくもん反応があった以上、そこにつくもんがおったのは間違いないで」

「そっか……その子があのホツチキスだったのなら、やっぱり僕がごしゅじん、なんだな」

「今更何言ってん。ごしゅじんははじめからごしゅじんやで」

変わらぬクリアのその言葉に、僕はどう応えればいいのだろうか？

小学校のときに使っていたホツチキス。

引越すことになって、でも半分喧嘩状態でロクに話もできない中、それでも絶対帰ってくるって約束のしるしとして、僕が潤ちゃんに預けた大切な『物』。

もともと僕の持ちもので、それでいて潤ちゃんが持つてるものなんて、やっぱりそれしかないはずで。

それがクリアが反応したつくもんであるならば、僕がクリアの言うごしゅじんであること、もう疑いようもないことは分かっているんだ

けど。

クリアのことを覚えていない自分への罪悪感のせいか、どうもぎこちない苦笑を浮かべる羽目になってしまう。

と、気付けば、モトカもテレビを見るのをやめ、僕の事を真剣な眼差しで見つめていた。

かがみ姉さんも洗い物の手を止め、背中で僕たちのやり取りを聞いている感じで。

忘れていたのだと分かった、クリアたちと過ごした、その記憶。いったいそれはいつのことなんだろう？って考えてみる。

なのに……忘れてること以外、僕はどうしても思い出すことができない。

まるで、思い出そうとすることを何者かに止められているかのよう

に。

なんだかそれが、とてもしゃくだったけれど。今は、僕がごしゅじんであることに、僕自身が確信を得られただけでもよしとすべきなのかもしれない。

「そ、そっか」

結局、僕はただ、そう頷くしかなかった。

何故ならば、僕がクリアたちのこと未だ思い出していないことを知って、どこか安心したような顔をクリアがしたからだ。

「あ、それより、潤はんにあげるもん何かいいの考えたんか、ごしゅじん？」

それを悟られぬように、なのだろう。

話題を変えるクリアに、僕は再び頷き返して。

「ああ。考えたよ。せっかくだから、代わりに潤ちゃんのための武器、作ってあげようかなって思ってるんだ」
そう答えたのだった。

今から取り掛かれば、クリアの言葉と態度の矛盾した部分とか、余計なことを考えなくてすむ、なんて思いながら……。

次の日、部活の時間。

潤ちゃんのためにと決めた武器が完成する間もなく。

なんとトイ先生に【本校】へのおつかいを頼まれた。

行き先は、歓迎会の際に行けなかった生徒会室。

先生曰く、おつかいの中身は行けば分かる、だそうで。

一応通行の許可証はやるから一人で行って来いというのは、ちょっとぶん投げすぎじゃないかな、と言う気はしなくもなかったけれど、
とはいえ、一人で行動できるに越したことはないのは確かなわけで。

僕はさっそく、【本校】へと足を運んだ。

向かったのは、気分を変えて8階の渡り廊下だった。

一見、二階の渡り廊下とさして変わらない気のある場所である。

「そついえばクリア、他の子は近くにいそつ？」

一応おつかいだから、あまりゆっくりはしてられないけど、この

チャンスを逃す手はないだろうって思い、僕はそう問いかける。

「んと……ちょっと待っててや」

すると、クリアは任しときって感じて頷いてみせ、目を閉じる。

よく考えてみると、このクリアのつくもんレーダーな力も、不思議といえは不思議だよなあ、なんて思いつつその様を眺めていると。

「あっ」

クリアが他のつくもんの居場所をを補足する前に、声をあげたのはモト力だった。

「ん？ モト力、どうかした？」

「あ、あの窓の向こう、未確認生物確認でありますっ！」
言われるままモト力の指し示すほうを見やると、

窓越しに見える横に伸びた通路……向こうからも見えるだろう窓の位置に、

小さな……そう、ちょうどクリアやモト力と同じくらいの大きさの羽根を生やしたまさしく妖精っぽいものが、ゆっくりと飛んでいくのが見えた。

「く、クリアっ、あの子はっ？ つくもんじゃないのか！」

「……え？ 何？ なに言ってる。近くにつくもん反応ないけど」

「クリアたいいん！ あっちであります、あっち！」

目をしばたかせて首をひねるクリアに、モト力が窓のほうを指し示す。

そこには確かに、遠目で細かくは分からないとはいっても、見間違えようもないくらい堂々と空飛ぶ何かの姿があつて。

「ほんまや。なにあの子？ なんかもこもこしとんな。少なくともつくもんやないみたいやけど……ほんまもんの妖精はんか？」

「よし、追ってみよう！」

「つてごしゅじん、おつかいはええんか？」

「いや、だつて。つくもんじゃないんなら本物の【魔物】かもしれないだろ、それだったら一大事じゃんかっ」

「そんな興味津津々なキラキラした目で言われても説得力ないけど……まあ、ええか」

なんにしろ正体を確かめなければと、自分を誤魔化しつつ、急いでその後を追いかけることにする。

僕たちが通りの角を折れて空飛ぶ何かのいた長い廊下に出ると。

そいつはそんな僕らに気付いた様子もなく、ちようど突き当たりのこれまた曲がり角を曲がっていくところだった。

僕たちは、その姿見失わないようにと、まるで誘われるがごとく見知らぬ校舎の中ずんずんと進んでいく。

そして……しばらく進むうち、いつの間にやら校舎の雰囲気が変わり変わっていて。

別棟か何かに入ったのかも、なんて考えていたら、ふいに空飛ぶそいつはその姿を消した。

「でしつ、でしつ」

かと思つたら、唐突にクリアのしゃくりあげるような声がする。

「近くにつくもん、いるのか？ やっぱりさっきのつて……」

きよるきよると辺りを見回すと、かすかに扉の開いている部屋を発見。

このわずかなタイミングで姿を隠したとなると、その部屋の中の可能性は高いだろう。

そう思い、僕は軽くノックをして、しばらくしても返事がなかったのをいいことに、

控えめにお邪魔します、なんて呟いた後、扉開いて中に入ると。

そこには、予想しようもない、別世界が広がっていた。

「あれ？　どこかの部屋に入ったはずなのに、目の前に見えるのは何で緑？」

そう、僕は確かにその部屋に入ったはずなのに、目に映るのはどこかの豪邸にでもありそうな、草花咲き乱れる大きな庭園で。

ふと風が吹き、何か知らない花の香りがしてくる。

誘われるように一歩踏み出すと、それが幻でない証拠に、柔らかく感じる土の感触。

思わず振り返ると、ドアの形に切り抜かれた空間。

その中には、さっきまでいた廊下が見え、その外側には抜けるような青空が広がっている。

「どうなってるんだ？　ドアの向こうにさっきまでいたところがあって、だけど後ろには知らない景色が広がって……」

「じゅじん、どうやらまたなにもんかの別世界に取り込まれたみたいやで」

目の前で起こっている不可思議な現象に僕が首をかしげていると。

低い、何かに緊張してるかのようなクリアの声がする。

なるほど、これが【異世】ってやつなのかな？

そう言われると、宙に浮いてるようにも見える扉のカラクリも、そういうもんだって妙に納得できてしまうから不思議だった。

「別世界？それって若穂の言ってた【生徒】が【魔物】と戦うときに使ってたやつ？　でもそれって、【本校】の敷地一帯に広がって

るんじゃないかったっけ？」

確か若穂の説明だと、【生徒】がこの世界に普段から馴染むために【異世】ってやつを【本校】一帯に広げてるってことだったけど。この世界はそれとは違うのだろうか？
またもや僕が考えこんでいると。

「たぶん、つこてる術者がちがうんとちゃうかな。この世界はその扉のむこうより、いやな感じするしな」

「クリアたいいんもそう思うでありますか？ たいちょー、お気をつけください。モトカもなんだかいやな予感がします。まるで戦場にいるみたいな……敵意を感じるであります」

答えるクリアに、続くモトカ。

二人の口調は、変わらず固い。

自然と僕も緊張してきて。

それがピークに達したとき。

色とりどりの花園の中から、先ほど見た、遠目からは空飛ぶ妖精に見えたものが姿を現した。

「いや、ハチか？ けどなんか……」

明らかにほんものじゃないというか、どこかで見たことのあるその姿は、テレビとかでちよっと前に人気だったハチのキャラクターのぬいぐるみに見える。

僕はもっとよく見ようとして。

そいつとばつちり目が合ってしまった。

それは、プラスチックに色塗っただけのつくりものの目であるはずなのに。

その瞳の中に確かに僕は敵意のようなものを見い出す。

と。

その瞬間、脳天をつんざくにぎやかな……オーケストラの音。

それが、不法侵入に対する警報代わりなのだど気付いたときには、花々の中からいくつも顔を出す、同じつくりをした八手のぬいぐるみたち。

その手には、刺さったら痛そうな槍みたいなものを持っている。

「な、なあ？ こいつらはつくもんじゃないよな？」

「こんなもこもこなのつくもんにおるわけないやろ、見たら分かるでー！」

「そうでありますっ、たいちよーの配下であるモトカたちは、みんながたいちよーの好きな可愛い女の子のっ……っ！ 敵襲っ、敵襲でありますっ！」

分かってはいたんだけど、何だかムキになって否定してくるふたり。目の前のやつらがぬいぐるみにとっついた何かなら、仲間みたいなものかと思っただけで、どうやら違っらしい。

いや、うん。確かに目の前にやつらに比べたら、クリアたちのほうが好みではあるけどさ。

そんな事を考えてる間にも……せわしなく羽根を動かし、ひと塊になっって猛然と向かってくる八手のぬいぐるみたち。

「と、とりあえず逃げろっ！」

僕はそいつらに背を向けると、慌てて広そうな庭園を駆け出していく。

「なんや、ごしゅじん、扉んとこ戻ればいいやんか！」

「何言ってんのさ！ さっきここでつくもん反応あつただろ？」

「……う。でも、今は何やさっぱりなんやけど」

ひよっとして扉の中じゃなく、その周りにいたとかだったりしたらちよっと笑えないなあ。

僕は全力で駆けながら扉のほうを見てみるが、さっき八手たちがすぐそこまで迫ってて、戻る余裕などあるはずもなく。

「たいちよーっ、モトカをお使いください！ モトカ力ならあんなやつらっ」

「ごめん、それは無理っ！」

「ど、どうしてでありますかっ？」

「ノックはしたけど、勝手に入ってきてるのはこっちなんだしさっ
っ！」

「む、むう。それは確かに……仕方ないでありますね」

僕は叫び、さらに足に力を込める。

モトカはちよっと不満そうだったけど、納得はしてくれたみたいだった。

モトカ自身もモトカの力を生き物（かどうかは判断に困るけど）に使うことが、どんな結果を生むのか、分かっているのかもしれない。同時に、僕がそれを恐ろしいことだと思ってることも。

「とにかく、行けるとこまで行ってみよう！ まだこの中に他のつくもんの子がいないって保障もないし……クリアさっき、術者が違うとかって言うてただろ？ それってつまり、ここにこの世界つくった人いるってことじゃないか？」

「んー、たぶん。そうやと思うけど……」
気を取り直してそう言う僕だったけど、対するクリアはちよっと歯切れが悪かった。

まあ、はっきりとは確約できない事には領けないってことなんだろう

う。

だが、僕としては今警報鳴ったんだし、この中で逃げればそれらしい人が出てきてくれるかもしれない、なんて考えていた。二人の心配をよそに、僕はこの状況をそれほど大事とは考えていなかったんだろう。

それがどんな結果を生むのは、その時の僕には知る由もなく。僕らはあてもなく、しかし追われるようにして。

不可思議な庭園を駆け出していったのだった……。

17、モトカとたいちよーの、戦つといつこと

幸か不幸か、その不可思議な庭園は広く、高さのある植樹帯が行く先を隠し、まるで迷路みたいになっていた。

それなら隠れるところも多いし、あるいは他の出口とかがあったりするのかもしれない。

だから、最初は走りながら会話する余裕すらあつただけだ。

なんとかなるだろうなんて僕の考えは、大いに甘かつたらしい。

八チだけだった追つ手に、二足歩行のクマが、ぎよろつとした目をしたエイリアンが、ひまわり色のかわいいネズミが……それこそ、どこかで一度は見たことのあるような有名なやつから、手作りのオリジナルっぽいやつまで、節操なしに増える増えるぬいぐるみたち。動きが思ったより早くないのは幸いだったが、そいつらはその見た目とは裏腹な感じの、物騒な剣とか斧とか槍とかを持っていて。留まることを知らない追つ手の軍勢に、多勢に無勢なのは否めないわけ。

「じゅじん、相変わらずモテモテやな」

「しみじみ言うなって！ そんなもてはカンベンしてくれっ！」
クリアの呟きそうにそう叫び返し、植え込みの角を曲がる。

でもって再び加速しようとして、思わず急停止。

目に映るのは、キラリと光る、こちらに向けられたいくつもの矢じり。

ずらりと並ぶのは、白い小さな羽根をくっつけたキューピッドのぬいぐるみたちだった。

「たいちよーっ！」

モトカが叫び、その姿をスパナに変容させたのと、その矢が僕に向かつて放たれたのはほぼ同時だった。

一瞬だけ、僕の頬を撫でるいやな風。

たぶん、それが怖かったんだろう。

僕はそれを振り払うように、身体の動くままにスパナを振るった。

「……ライズ・リソルション【断鎔】っ！」

モトカなのか、僕なのか分からない声が響いて。

目前まで迫っていた矢たちは、スパナに触れた瞬間、熱湯に落と込まれた氷のごとく溶け消える。

手ごたえはなかった。

だからなのか、僕はそのままつんのめるように前方へ転がる。

そして、次に起き上がったときには、スパナが充分届く位置までキューピッドたちに肉薄していた。

自分が信じられないくらい、やっぱり怖いと思えるその動き。

表情など変わっていないはずなのに、キューピッドたちが動揺している様子が手に取るようにわかった。

僕は、そんなキューピッドたちにスパナを振り上げようとして。

ぼふっ。

その瞬間、びつくりした表情のモトカと目があった。

「あ、あれっ？ たいちよーっ、な、なんでっ？」

自分が元に戻ったことに気付いたのか、手足をバタバタさせて僕の腕にしがみつくモトカ。

僕は、そんなモトカにただ首をふる。

その間に、戦意喪失したのか飛んで逃げていくキューピッドたち。

「たいちよーっ、何故止めたでありますかっ？ 一歩間違えばたいちよーの身に危険が及んでたでありますよっ？」

「ごめん……」

「か、簡単に謝られても困るでありますっ、今のは完全にたいちよーの命を奪わんとした害敵でありますよっ？ 攻撃の手を緩めれば滅ぶのはこちらだというのに！」

「それはそうなんだろうけどさ……殺されそうになったから、殺すの？」

「仕方ないでしょう。それが戦でありますっ。現に、たいちよーが目指しておられる【生徒】だって、そのための組織ではないですかっ」

純粹に、ただ口から出た疑問。

モトカは一瞬だけすごく辛そうな顔をしたけど、すぐに唇を結んでそう言った。

それは、僕が知っているながら知らないふりをしていたこと、だったんだと思う。

憧れていたヒーロー。

ヒーローにつきものの、相対する悪物。

でも、現実に、殺して滅す以外にないものなんているんだろうかって思う。

悪いことをすることに、理由はない？

いや、そんなことはたぶん、ないんだろうつて思う。

この世界で悪とされている、【魔物】たち。

確かに人間の側から見れば滅すべき存在、なのかもしれないけど。

【魔物】たちからすれば、それは悪じゃないのかもしれない。

ただ、生きるために必死なだけだったのかもしれない。

殺さなきゃ殺されてしまうから、なのかもしれない。

僕が憧れていたヒーローなんて、うわべだけの甘い幻想だったんだろっか？

僕は、それを認めたくはなかった。

できればずっと、気付かないでいたかった。

「でも、やっぱり勝手に入ってきててるの僕らだし」

「そんな事言ったらっ……」

「じゅじん、モトカはん、上やっ！」

怒りすらにじませて、モトカが何か言おうとしたそのとき。

それを遮る形で、それまで僕らのやりとりを難しい顔で静観していたクリアが叫んだ。

言われるままに視線を上げれば、そこには倍の数に膨れ上がったキユーピッドのぬいぐるみたち。

中には悪魔みたいなものも混じってたけど、それぞれが持っているのは、ピストル……いや、あれは銃剣つてやつだろう。

そのファンシーな外見とのギャップが、より残酷な気分を味あわせてくれる。

「たいちよーっ！」

二度目のモトカの叫びは、だから言ったのにつて気持ち半分と迫り来る危険への叫び半分、だったんだと思う。

とっさに、僕はクリアとモトカを内に抱え込むようにして転がった。ダダダダって地面が破裂し、風穴開けて吹っ飛んでいく。

間一髪だった。

あのままそこにいたら……って思うと、やはり僕は間違っていたのだらうかって、そう思う。

でも僕は、まだ怖くて。

刃を向ける勇気がなくて。そんな勇気なんてないほうがマシだっと思ってて。

「あーっ、もうっっ！」

吐き出す声とともに僕は起き上がり、次弾が来る前に再び走り出す。

「悪いモトカっ、やっぱ君の言う通りなのかもしれない！ も、やっぱ駄目だ、僕には無理だよ！」

言いたいこといっぱいあるだらうけど、今は逃げよう！」

「撤退でありますか？、しかしどこへ？ 後ろももう囲まれてるでありますっ！」

それでもなお背を向ける僕に、しかしモトカは何もなかったかのようにならうにそう返す。

やっぱり、そんな僕のことを、モトカのほうぎきつとよく分かっているのだらう。

「先に何があるのか分からないけど、うまく最初のとこに戻れないかな」

「あ、だったらごしゅじん、クリアの力使うか？ 翼生やして空飛べばこことうなっとなのか、分かるんとちがう？」

「うーん……」

悪くはないと思うけど、それは逆に言えば追っ手に居場所を知らせかねない行為だろう。

ただ、地上にいる数に比べれば、空飛んでるやつはそれほど多くはないから、彼らの持つ武器さえ気をつければなんとかなるかもしれない。

やってみる価値はあるだろうけど、一か八かの賭けなのも確かだ。

「どちらにしろ、逃げられるところまで逃げてみよう」

僕は、それを最終の案として置いておくことにし、そう言って再び走る速度を速める。

だが……そう決めて、いくらもいかないうちに。

「でしつ、でしつ」

クリアが再び、他のつくもんの存在を示す声を発する。

やはり、ここにいらしい。

辺りを見回しつつ、どこにいるのか聞こうとして。

そんな僕の言葉を遮ったのは、何か巨大なものが大地を踏みしめて歩くような、そんな音だった。

「……クリア、どっちのほうにいる？」

「前のほう、曲がってすぐやね」

それでもそう問いかけると、返ってきたのは予想通りのイヤな予感のするお答え。

クリアの示すのは間違いなく、巨大な何かのいる場所だろう。

「たいちよーっ、後ろっ、追いついてきたであります！」

そして、さらに追い討ちをかけるような、モト力の焦りを含んだ声

がする。

何でこんなことになっているんだらう？

こんな事なら、寄り道するんじゃないか。

……そう思う一方で、このピンチ、緊張感、増せば増すほど変に高揚している僕がいて。

「行こう、ふたりとも。『力』ってやつ、いつでも使えるようにしといてくれ」

「がってん！」

「了解でありますっ！」

気合いの入ったクリアの声と、何だかちょっと嬉しそうなモトカの声。

僕はそれを合図に、躊躇うことなく前へ飛び出す。

するとそこは……ちょっとした広場になっていた。

奥のほうには、大きな、僕の家と似たタイプの洋風なお屋敷が見える。

ゴール地点。

ふと浮かんだのは、そんなこと。

そしてそれを示すかのように、屋敷を守るかのように、その屋敷にも引けを取らない大きさのぬいぐるみが、広場の真ん中にある噴水の周りをうろろしていた。

その造型はなんと言い表せばいいのだろうか。

太鼓腹のデブ猫？

何かのキャラクターだったはずだけど、思い出せない。

確か、6畳間がいっぱいになるくらいでかいぬいぐるみとして、ち

よつと話題になったやつだ。
もつとも、目の前にいるのは6畳間どころか家一軒でも入らなさそうなビッグサイズだが。

「どううんっ！」

と、そんな事を考えていると、向こうもこっちの存在に気付いたらしい。

でかい図体に似合わず、何だかびっくりして言葉を失っているようにも見えただけだ。

すぐに気を取り直し、そいつはどんと腹を叩いてこっちに向かってくる。

思わずきびすを返しもと来た道を戻りそうになったが、そこにはすでに道を塞ぐ勢いでたくさんぬいぐるみたちが集まってきていた。やばいと思ったがしかし、そのたくさんぬいぐるみたちは僕たちのほうを見ているだけで、何もしてくる様子はなかった。

……いや、僕たちというよりは、あの巨体の行動を見守っているようにも見える。

「たいちよー、どうやらあのでかいのがこの大将のようであります。しかも、一騎打ちを望んでいると見たであります」

それには頷きたくなかったけど、何だかそうせざるを得ない状況になってるのは確かだ。

「ちなみにクリア、さっき反応のあったつくもんの子は？」

一見したところ、近くにはいないように見える。いるとすればあの屋敷の中、だろうか。

どちらにしろ、目の前の大将とやらをどうにかしなくちゃいけないらしい。

そう、思ってたんだけど。

「それが、なんやようわからん。あのでっかいのからつくもん反応でとんねん……でしっ」

そんな事を言ってくるものだから堪らない。

「え？ れじゃ、あいつつくもんなのか？」

思わずそう聞いたけど、しかしそれにはしっかりと首をふるクリア。

「それはちゃうで。あんなでっかい子、つくもんにはおらへんって」「モトカもそう思うであります。だってモトカたちたいちよーの配下のものは、

たいちよーの趣味でかわいい女の子のほすでありますからっ！ っ
て、かわいいだなんて、何度言わせるでありますかっ」

それに続き、間違いないと断言するがごとく、モトカが照れながら同じ言葉を繰り返す。

「ええと、それってつまり、あの姿はスパナに変形したモトカみたいに、つくもんがついてる元の物体……ってことでいいの？」

僕自身あんなでかいぬいぐるみを持ってた記憶なんてもちろんなかったけれど。

「いや、少なくともあれは「しゅじんの所有物やない。なのに、つくもん反応はばっちりある。ううん、どないなっとなんねん！ ……

…でしっ」

クリアにも何が何だか分からなくなってるらしい。

しかし、とすると一体どういうことなのか。

それを考えようとして……。

「たいちよーっ、来ます！」

鋭く叫びスパナへと変形するモト力。

その体躯のわりに、俊敏な動きで迫ってくる巨体。

それに対し僕は、操られてるわけでもなく、自然な動作でスパナを構える。

まるで、こういう状況に慣れているみたいに。

心を置き去りにして、身体は覚えている……そんな感覚。

さっきと比べても、より逃げるといふ選択の許されない状況。

だけど、モト力の力を、僕は使えるのだろうか？

その恐怖を知って、今一度使おう、なんて気になれるのだろうか？

その迷いが、一時の硬直を生む。

そのわずかな時間のロスが、戦いにおいて致命的であると気づいたのは。

巨体のその手のひらが、大きく振り上げられ地面に叩きつけるように迫ってきたときだった。

「……………うわっ！」

思わず縮こまり目を閉じる僕。

ドゴウッ！

まるで爆弾でも落とされたかのような、物凄い振動。

けれど、それによる衝撃は僕にはあまり伝わってこなくて。

かわりに感じたのは、背中から後ろに引っ張られるような、そんな感覚だった。

「ふう。いつでも力が使えるようになって言われとってよかったわ、ごしゅじん」

頭上から聞こえるのは、そんなクリアの声と宙舞う羽ばたきの音。どうやら、クリアが間髪一髪で力を使って逃げ延びてくれたらしい。ほっとすると同時に、僕って助けてもらってばかりだなあと、実感するのも束の間。

『……………』
シイド・スクイーズ
【楔刻】

はつきりと、僕の頭の中に、そんな声が響いてきて。

ゾクリと、怖気がするほどの巨大な気配を感じ、僕はさらに上を見上げる。

そこには、鈍い銀色に広がる円柱状の何か……………シリンダーのようなもの、があった。

初めは、それが何なのかよく分からなかったけれど。

それが物凄いスピードでこちらに向かって落ちてきたとき。

僕は最初にモトカの力を見たとき、同じ恐怖を覚えた。

それは、その力の恐ろしさを知っている、ということからくるもので。

その時取った僕の行動は、自分自身でもびっくりするくらい、だったと思う。

「た、たいちよーっ？」

「なにしとん、ごしゅじんっ！」

すぐ側で聞こえる、元の姿に戻ったモトカとクリアの声。
僕はそれを無視する形で、暴れるふたりを後ろ手に放る。

そして……。

ふたりの悲鳴が響く中、迫り来る銀色のシリンダーとともに。

僕の意識は、地面に叩きつけられ、飛んでいった……。

18、リオンと初めてのバトル(前書き)

一日1話更新ギリギリかつ、短いです。

18、リオンと初めてのバトル

『どうして僕らは戦わなあかんのやるな？ どっちが悪くて悪くないとか、そんなもんありやせんのに』

たぶん僕は、また記憶に無い記憶を見てるんだと思う。

呟いてるのは、クリアとよく似たなまり方をする誰かの声だった。

『でもな、僕はこのままみすみす、お前を世界の犠牲にさすつもりはない。そのためやったら、お前にやって刃を向けられる覚悟がある』

それは……相対する誰かに話しかけているようでもあった。けれど、その姿を僕は見ることができない。まるでその間に、黒いカーテンでも引かれてしまっているかのよう

に。『僕はあるさんに勝って、サイコーのヒーローになつてやる。誰も犠牲にならへん、敵も味方ももちろん自分も、みんなが笑って暮らせるような……そんなどえらいことをやってのける、ヒーローにな』

その言葉は、とてつもなく衝撃的な、僕にとっては目の醒めるような、世界が開けるような、そんな言葉だった。

戦うことの意味に、こんな理由もあるんだって、思い知らされた。

それはもしかしたら……最もつらく厳しく、険しい道のりだろうけど。

失せかけていたヒーローへの思いが、今確かに復活したのを、僕は実感する。

無理だと、戯言だと言われても構わない。

僕も、そんなヒーローになりたい。

そう、思っ……。

僕が我に返ったのは、そのときだった。

「た、たいちょうっ、なんて無茶をつ！」

「よ、よかったあ。目え覚まして……ぐすっ」

僕が意識を失って、どれくらい経ってたかははっきりしないけれど、そう言っ……て両頬にしがみ付いてくるふたりが、瞳に涙を一杯にためてるのを見ると、相当な心配をかけてしまったのが分かった。

みんなを笑顔につてのは、まだまだ程遠いらしい。

「ごめんな、ふたりとも」

僕はふたりの涙を優しく指でぬぐうと、そのまま肩に乗せ起き上がる。

「ご、ごしゅじん、だいじょうぶなん？ あいつの攻撃、もろに受けたのに」

「ああ、平気だよ。……まあ、正確に言えば、今の攻撃、僕には届かなかったみたいだしね」

思い出したことがあった。

それは……僕がクリアの言うごしゅじんに間違いがないのなら、クリアたちは決して僕を傷つけることができない、ということだ。

でなきゃ、今頃僕は突然現れた円柱の鉄の塊……シリンダーの攻撃でぺちゃんこになっていたはずなのだ。

たぶん僕は、それが僕には届かないと分かってたから、あんな行動に出たんだろう。

そんな自分の行動にびびって気を失ってたなんて、言えやしないけれど。

「それって、一体どういうことですか？」

「うん、たぶんだけど、僕は君たちつくもんの『力』で傷つけることはできないんじゃないかな。そう言えば、ロボット三原則にも似たようなのがあったっけ」

別に主ヅラするつもりはなかったけれど、この時ばかりはごしゅじんでよかったと思えなくもない。

「え？　じゃあ、目の前のでっかいのつてつくもんなん？　……っ

て、そんなわけないやん。クリア全員の顔知つとるもん」

「そう、残るはその問題。クリアの言う通り、あいつはつくもんじやないんだろう。

でも、あのシリンダーの力は、間違いなく、クリアやモト力たちつくもんの使う『力』だったと思う」

何故ならば、それを受けた瞬間、僕の心の中に新たな記憶がこぼれ

だからだ。

その現象は、新しいつくもんの子たちに会うことで展開されるらしい。

そこにつくもんの一人がいるのは間違いないのだ。

ならば、これはどういうことなのか。

おそらくだけど……僕は予測がついている。

「モトカ、力を貸してほしいんだけど」

だから僕はそう呟き、一撃を加えただけでこちらを見て動かないでいる巨体を見据える。

「え？ しかし、たいちよーは戦わないのでは？」

「……気が変わったんだ」

僕は新しい記憶で、目指すべきヒーローのあり方を知った。

だからもう、ここで逃げるわけにはいかないのだ。

僕が、主であるべきものだと思いついて、混乱して動けなくなって…

…きつと苦しんでるであろう、目の前の子のためにも。

「了解でありますっ！」

モトカは、その一言で僕の気持ちを汲んでくれたらしい。

そのままスパナへ変形するモトカをしつかりと手に携え、クリアにはいつもの定位置のポケットに戻ってもらって。

僕は新たな気持ちで、スパナを構える。

一瞬の膠着。

もはやギャラリーと化した、とりどりのぬいぐるみたちの、息をのんで見守る姿すら感じられる静けさ。

その静寂に痺れを切らすごとく、先に動いたのは巨体のほう。僕は、その動きにあわせるようにして、腕を振り上げその懐へと入る。

自分とは思えないその動きに、しかし以前ほどの戸惑いはなく。

ぞん、と今度は確かに手応えを感じて。

スパナはそいつの大きく膨らんだ腹の中に潜り込む。

それは……風船に針が刺さり綻んでいくのを、スローモーションで見ているかのようにだった。

腹の中に敷き詰められていた綿が、スパナを避け広がっていき、そして……。

スパナは綿の中、最も深いところまできて、ぴたりとその動きを止めた。

いつの間にか身体のひとつをそいつの腹の中に潜り込ませていた僕の目の前にいるのは。

真綿のゆりかごに包まれて眠る、前髪の部分だけが鮮やかな銀色で、ポブの後ろ髪が緑色といった、

ツートンカラーが特徴的な……ちっちゃな女の子だった。

微動だにしないから少し心配になったけど、よく見ればどうやら眠っていたらしい。

僕は、スパナを持つてる手とは反対の手で、そっと彼女を解放したのだった……。

「むっ、こ、ここは？ ……はっ、そこにおわすのはもしかクリア
どのっ？ ならばやはり、とのもこちらにっ？」
僕が、デブ猫の開けてしまった腹のところを、常備してた裁縫セツ
トで縫っていると。
すぐ側でそんな声がする。

「うん、ごしゅじんならそこにおるで」

「あ、目、覚めた？ ……ええと」

振り返り、たぶん僕のこととは知っているんだろっけけれど、とりあえ
ず名乗ろうとしたら……

彼女はぱつと起き上がり、ひざまくらしてもらっていたクリアにか
たじけない、なんて頭を下げると、そのまま猛然と駆け寄ってくる。

黒一色でふわふわの、魔女が着るみたいなツーピースのドレスがつ
くもんの子たちの初期装備（一応彼女たちのために他の服は作って
あげたけど）なのかなって思ったら、どうやらそうではないらしい。
駆け寄ってきた彼女は、袴姿だった。

真っ赤な袴がまぶしい、というか、いかにも九十九神の精霊っぽい
感じがする。

「ご無事でしたか、とのっ！」

「無事って、リオンたいいんのせいでたいちよーがどれだけ危険な
目にあっただと思ってるでありますかっ」

そして、今にも飛びついてきそうな勢いだったけど。

肩口にいたモト力が言わなくてもいいことを言うもんだから、それまでの勢いはどこへやら、しゅんとしてうなだれたかと思うと、そのまま土下座でもするみたいに関膝をついて地べたに正座した。

「存じております。此度の件は、全てこのリオンめの所業にござ
います。どんな罰も甘んじて受けましょう。腹を切れ、とおっしゃ
るのならそれでも構いませぬ。ただ、厚かましいとは思いますが、
このリオンの我俣を、一つだけお耳に入れていただきたく」

「ううっ……リオンたいいん、本気でありますっ」

そして、かしまってそんなことを言うものだから、怒った自分が
悪い気がしてきたのだろう。

モト力までもがしゅんとしている。

初めて会った時に、同じようなことを口にしたのを、思い出したせ
いもあるかもしれない。

「しゅじん……」

そんな場の様子を察したのか、そうでないのか、何だか心配そうな
顔で僕を見上げてくるクリア。

「みんなしてそんな顔するなよ。っていうかさ、この状況でそんな
顔されると、僕が物凄い極悪人みたいでやなんだけど」

確かにちよっとひやっとしたけどさ。
たとえば、ここで起こったことが彼女……リオンの意思だったとした
って。

僕は間違いなく怒ることはできないだろうなって、変な自信があっ
た。

「……って、むおっ？」
なんてことを考えていると、空気が抜けたみたいに縮んでしまった青白のデブ猫のぬいぐるみ（それでも僕よりは背が高い）が、繕ったばかりのお腹を掻きながらのそりと起き上がった。

そして、感情の読み取りにくいというか、分からないプラスチックの目で僕を見たかと思うと、そのままのしし歩き、頭を下げたままのリオンと僕の間を割って入った。

それまで僕らを追いかけて、ギャラリーと化していたたくさんのぬいぐるみたちも、もう僕らに攻撃を仕掛けてくる様子はとっくにないらしく、物騒な武器を捨ててデブ猫の真似をするように、リオンの周りを取り囲む。

まるで、リオンを守るみたいに。
それとも感じるのは、このぬいぐるみたちにリオンが慕われてるってことだ。

「リオン、でいいのかな。ちょっと顔をあげてくれる？」
「は、はっ」

僕がそう言つと、かしまったまま、躊躇いがちに顔を上げるリオン。

その瞬間、ちょっと後悔。
だって、そのエメラルドみたいなきらきらの目に、涙がたまっていたからだ。

つくもんの彼女たちが泣き虫なのか、それとも僕自身がすぐに女の子を泣かすようなサイテーなやつなのか。

どっちかというその後者、なんだろう。

僕はそんな自分に深い溜息をつき、問いかける。

「もしかしてリオンは、僕に攻撃をしかけてきたっただけで、罰とか言ってるの？」

「はっ、此度のののに対する行為、言い訳の次第もございませぬ」

するとリオンは頷き、きっぱりとそう答えた。

たぶん、その言葉に何か不満でもあったんだろう。

ぬいぐるみたちがそれぞれ抗議の鳴き声をあげてくる。

当然何を言っているのかは分からないけど。

分からなくても、今回のことが何か訳があるというか、理由があるんだらうなって気はする。

リオンは悪くないって、そう言っているような気がした。

「分からないな。リオンがそんな風に思う理由が。……だって今、僕たちはリオンを仲間にするためにつくもんバトルをしてたんだらう？ 戦って勝って、僕ができるやつだって思わせなきゃ駄目なんでしょ？ なら、リオンは何も悪いことしてないじゃない」
だから僕は、かつてクリアに言われたことをそのまま口にする。

「そうだろ？」

そのままそれをモトカやクリアにふると。

「も、もちろんでありますっ、とってもいい勝負でした！ 先ほどはモトカも熱くなって言いきたでありますっ」

「せや。ようやくまともにバトルして、ゲットできたっちゅーわけやな」

ちよっときこちない笑顔で、そう言ってくれる。

「ま、そういうこと。ついでに勝ったから言うけど、嘘でも切腹と

か、言うのなしね」
ただでさえ、自分のことをあまり省みないのがつくもんの女の子たちの基本的な性格みたいだから……これだけはちゃんと覚えておきたかった。

「承知つかまつ……ぐ、ぐすつ。こ、このリオンつ、とのの厚いお心にこの身を賭して生きる所存でござりまするうっ」

言ったことが分かったのか分かってないのか微妙な言い回しではあったけど。

そんなこんなで僕は、リオンをゲット？ したのだった。

これでようやく折り返し地点。

毎回こんなじゃ先が思いやられるなあ、なんて思いながら……。

19、リオンとぬいぐるみたちの大いなる勘違い

その後。

僕たちは、リオンがぬいぐるみの中にいたこと、この【異世】のこと、ぬいぐるみたちのこと、改めて聞いてみることにした。

リオンによると、どうやらこの【異世】は、なつめ、という少女のものらしい。

ぬいぐるみたちも彼女のもので、彼女の【生徒】としての【曲法】による力によって、

命を吹き込まれていたことが分かった。

何故ぬいぐるみたちが、こうして侵入者を追い払ったかと言えは。

そんな彼女が原因不明の病に倒れ、この【異世】の中で床に伏せてしまったからなのだろう。

ぬいぐるみたちは、主の命がなければ、ごく単純なことしかできなかった。

しかし、ぬいぐるみたちは主を守りたかった。

その思いを、何の因果かたまたま近くにいたリオンが、なんとかしてやろうと、そう思ったらしい。

そして……言ったのだ。

『リオンにはこのために戦うことしか能はないが、このなら何とかしてくれるやもしれぬ』……と。

それだけでも随分とたぬきの皮算用って感じだったけれど、どうやらぬいぐるみたちはこのために戦うの部分を、このと戦う、ととっちらしい。

それで、あんなことになってしまったというわけで……。

「だいたいの理由は分かったけど……それじゃあ何で、彼のお腹の中に？」

残った疑問はそれだけだった。

注目されたデブ猫のぬいぐるみは、表情は変わってないはずなのに、何だか注目されて恥ずかしそうにしているのが分かる。

「おそらく、リオンの、とんから授かった膨大な『力』が必要だったのかと。どうやら彼らは『力』がなければ動き続けることができませんよ。」

「『力』？ ……それって【曲法】の？ 僕にそんなものがあるの？」

「何言つとん。クリアたちがこうしてしゃべったり、翼生やしたりできるんは、ごしゅじんの『力』のおかげなんやで。」

「単純に『力』という言い方だとピンとこないかも知れませんが、言い換えればたいちよーの生命力、と言えぱいいでありますよ。現に、たいちよーの『力』がなければ、元々『物』であるモト力たちはこうしてしゃべることはおろか、動くこともできません。すしね。」

今の今までそんな事教えてもくれなかつたくせに、当たり前のようにそう言うクリアに続き、モト力がしみじみとそんなことを呟く。

言われて思い出すのは、地下のゴミ焼却場に落ちそうになってたモト力のことだった。

その時は、何でそんなとにいるのかと思ってたけど、動けなかつたからってことを考えると、

その経過はともかく、あんな目にあっていたことにも納得はいく。

そして……今の会話の流れで、気付いたことが一つあった。

「ま、それは分かったよ。それで……そのなつめって子は、あの屋敷の中、かい？」

「は、さようで」

「そか、どんな様子が見てみるってのはありかな？」

リオンを中心に、ぬいぐるみたちにも確認をとる。

別に、医療の知識とかがあるわけじゃないし、リオンが言っていたように僕がどうこうできる問題じゃないかもしれないけれど、このまま何もせずにいるのはどうしても目覚めが悪かった。

それもこれも、全く何もできずに失ってしまったことへの反動なんだろうけど。

「はっ、是非に！」

まるでそれだけで解決したかのようににはしゃぐぬいぐるみたちと、嬉しそうなリオン。

「ごしゅじん、責任重大やな」

「……ははは」

クリアのプレッシャーがかかる呟きに、僕は少々ひきつった笑みを浮かべつつも。

そろそろと行軍を開始するぬいぐるみたちの後をついていく。

「……じぎりまする」

それから……屋敷の中へお邪魔させてもらって辿り着いたのは、硬く扉閉ざされた一室だった。

「鍵かかっているみたいだけど」

何とはなしに呟くと、後ろから後頭部をどむどむ叩かれる。

振り向くと、デブ猫のぬいぐるみもこもこの手のひらを開き、鍵を差し出していた。

「僕が開けるよ?」

僕はそれを受け取り、確認を取ってから扉の鍵を開ける。

そして、一同を見回した後、ノックして失礼しますと声をかけてから、その部屋に入った。

そこは、寝室だった。

この春めく季節にはちょっと暑そうだなと思えるくらいあったかそうな分厚いベッドの中、

リオンたちの言う、なつめと呼ばれる少女らしき人物が眠っている。

「うーん……」

見た感じ、僕にはただ眠っているだけのように感じられた。

特に苦しそうでもないし、規則正しく呼吸をしているのが分かる。

と、僕が考え込んでいると、その間に、次々とぬいぐるみたちが部屋の中に入ってきて少女を見守るように取り囲んだ。

たちまちぬいぐるみハウスと化す、静かな寝室。

一体どれくらいいるんだと思って振り返ってみれば、ぬいぐるみたちが部屋の中に入ろうと行列を作っているのが分かった。

もつとも、今はあのデブ猫のぬいぐるみが入ろうとして入れなくて入り口を塞いでいるから、これ以上はぬいぐるみまみれになることはないのだろうけど。

それを目にして……僕はピンときた。

「あのさ、一つ聞きたいんだけどさ、クリアたちって僕の……ええと、生命力みたいなので動けるんだよね?」

「そうやけど?」

何故今更それを聞くのだろう、といった感じのクリア。
僕は、深く、一息を吐き、

「じゃあさ、ここにいるぬいぐるみたちは？ ……いや、ここにいるのだけじゃない。

この【異世】ってどこにいたぬいぐるみ、一体どれくらいの数になるか知らないけど、どうやって動いてるんだろう？ ……ね？」

辺りをぐるりと見回して、僕は決定的な一言を投下する。
その瞬間、押し合いへし合いしていたぬいぐるみたちがぴたり動きを止め、あたりには恐ろしいほどの静寂が訪れて。

「さすがあは我がとの。それは盲点でございました……」
ややあつて、はつと我に返ってそう呟くりオンに。

僕はただ、苦笑を浮かべるしかないのだった……。

なつめという少女の『病』の原因が、自分たちであったことに気付いたぬいぐるみたちは、次々とただのぬいぐるみに戻っていった。
もはやみんなをまとめるリーダーと化してたりオンが、一度に活動していいのは多くても6体まで、と諭したせいもある。

今は、主の早い回復を待つために、動いているのはデブ猫のぬいぐるみ一体のみだった。

これで、何もしなくてもしばらくすればなつめという女の子は目を覚ますのだそうぞうで。

「では、参りましょう、我がとの。このリオン、どこまでもお供いたしまする」

それから僕たちは……デブ猫のぬいぐるみ（リオンによれば、『ど
んさん』というらしいけど）に見送られて、僕たちはなつめちゃん
の【異世】から、元の世界へと戻ってきているわけなのだが。

「それは構わないけど、なつめちゃんそのうち目を覚ますんでしょ
？ 挨拶とかしなくてもいいの？」

それは、なんとなくここから離れることに未練がありそうだったか
ら、口をついて出た言葉だった。

それを聞いたリオンは、案の定俯いて。

「リオンの姿は、彼女には見えませぬ。それに、いざ立ち会えばい
らぬ情も芽生えるでしょう。」

リオンがとのとあがめるお方はただひとり、でござりまするゆえ「
なんて、未練たつぷりの口調で、そんな事を言ってくる。」

「分かった。それじゃあなつめちゃんが元気になったら、改めて会
いに行こう」

「はっ。……って、え？」

僕が笑顔でそう言つと、リオンは頷きかけて、目をしろくろさせる。

「僕はリオンのとの、なんだろ？ だったら言うこと、聞けるよね
？」

「ははっ！」
あんまりそういうのは得意じゃなかったけれど、僕は敢えてそんな
言葉を口にする。

リオンはかしこまって返事をしていただけ。

その口調の中に、嬉しそうな感情がはつきりと含まれているのが分
かった。

「クリアたいいん！ たいちよーはやはり策士、であります！」

「そやねえ」

そんな、モトカの感心したようなセリフも、しみじみと頷いてるクリアにも、

僕自身も慣れたもので。

最初はどうなることかと思っただけ、結果的には気分よくその場を後にしようとした所で、

続くクリアの呟きに、僕は現実に戻される。

「けごごしゅじん、まだおつかい終わつたらんよ？」

「……うぐつ、わ、忘れてたっ！」

慌てて時計を覗く僕。

見ると、思っていたよりは時間はたつてなかったけど、寄り道してたのまる分くらいには時間が過ぎていた。

特に時間を指定されてたわけじゃなかったけれど、急いだほうがいいんだろう。

「みんな、しつかりつかまってるよ！ ちょっと急ぐから！」

胸ポケットにいるクリア、肩口に座っているモトカ。

そしてブレザーの右下ポケットから顔を出しているリオンに一声かけて、僕はダッシュする。

そう言えば、リオンって元々の『物』はなんなんだろう？

後で聞かないとな、なんて思いながら……。

放課後だからなのか、相変わらずというか、

今回が二度目だけど、【本校】の校舎は静かだった。

最上階にある生徒会室には、もちろんエレベーターがあっただけ

ど、何故か動いてなかったの、
自らの足音と、三人が増えてかしましくなつたつくもんたちのおし
やべりをBGMにしなから、
僕は階段を駆け上がってゆく。

その道中でも、やっぱり【本校】の生徒や先生と出くわすことはな
くて。

そう言う新たな出会いは大歓迎なのになあとか思いつつ、スパート
をかける。

なんだ、僕って意外と運動できるんだなあ、なんてちょっと思いな
がら辿り着いたのは9階。

どうやら、ここから上へあがる階段は、繋がっていないらしい。
辺りを見回すと、いかにもそれらしき場所が上にありますよって言
ってるような、横に長く広がった螺旋階段が、少し離れたところに
見える。

そして……。

集合写真でも撮れそうな広さだなあ、なんて考えながら、軽い気持
ちで最初の一段を踏み出したとき。
それは起こった。

「……………」

初めて【本校】に入ったときの空気が変わる感じ。

地下へ降りたときの、冷たい風の通る感じ。

なつめちゃんの【異世】に入ったときの、色とりどりの花の香り。
それらとは全く異質の、しかしよく似た、『別世界へ足を踏み入れ
た』と言う感覚が僕を襲う。

正直、今までは別の世界とか言っても、あからさまな実感はなかつ

ただのだけど。

これなら、鈍感な僕にも分かる。
未だかつて体験したことなどないはずの針さすようなほど強烈な、
痛いぐらいの何かの気配が、
この先にたむろしている、と。

「とのつ、お気をつけください。久方ぶりに感じる、並々ならぬ殺
気ですぞ！」

「これは明らかにこちらへの挑発行為でありますつ。たいちよーつ、
いつでも戦闘準備はできてるでありますよっ！」

「……っ」

それを、殺気だと称したりオンは、油断なく辺りを見回し、モトカ
は肩の上で立ちあがって、
何だかやけに気合いが入っている。

これが殺気？

僕はそんなもの体験したことなかったから、正直ピンとこなかった。
むしろ、僕が感じるニュアンスとしては、モトカの言うような、挑
発というか、
僕らを試して、あるいは観察でもしているかのような、そんな気が
する。

と、そこで何の反応もないクリアが気になって彼女のほうへと視線
を落として。
ぎよっとなった。

「く、クリアっ、大丈夫か？ 髪が真っ白じゃないか！」
クリアの瑞々しく綺麗だった赤い髪が、色を失っている。

心なしに顔色も悪い気がして、思わず立ち止まって僕は声をかける。
「ううゝ、ごしゅじん階段走るから、酔った……」

すると、クリアはそんな事を言っつて、ぐてつとポケットの中であなだれた。

「じゃあ、その髪も？」

「うーん？ た、たぶん」

「吐きそう？」

「ううん、へいきや。しばらく休めば大丈夫やと思う」

具合の悪そうなクリアには悪いけど、なにかの病気が、とか一瞬思っってしまったから……。

酔っただけ、なら一安心ではある。

きつと、上着のボタンを外してその状態で走つてたから、上にいたクリアはへんに揺さぶられたんだろう。

「ごめん、落ち着くまでちよつと休もうか？」

急いでいたとはいえ、悪いことをしてしまったとしみじみ思う。

今度からもつと気をつけないとって思いながら真摯に謝ると、クリアはふるふると首をふった。

「へいきや。ここにおればへいきやで。だからおつかいすませ。ク

リアのせいでごしゅじんに迷惑かかるのいややもん」

「……そっか、それじゃあ早くおつかいすませちゃおう」

そんなの全然迷惑に思っつてないっつていうか、僕としてはそんなクリアのセリフが一番きくんだけど、
とは言えず。

そのときクリアが発した言葉の本当の意味を、僕は気付くことはな
くて……。

20、ディアとようやく気付いた盲点

それから。

クリアの具合が悪そうだから、さっさと済ませて帰ろうと思ったからってわけじゃないんだろうけど。

リオンの言う殺気めいた世界の変化？ もいつの間にか消えてて。何が起ころでもなく、僕らは階段をのぼりきった。

そのまま辺りを見回し、生徒会室を探す。

……と。

僕の目にそれが飛び込んできたと同時に。

「でしっ、でしっ」

グロッキー状態でポケットの中で寝ちゃってるはずの、クリアのしやくりあげるかのようないつもの声が出た。

どうやら、他のつくもんの子が近くにいたときに反応する声は、クリアの意味とは関係のないものらしい。

それはそれで不思議といえば不思議、なのだけ。

「そんなところで、何してるの？」

それより何より、首を傾げなくなる光景が目の前にあった。

まず目に映るのは、生徒会室に続くだろうとでかいチョコレートみたいな両開きの扉の上にある、

大きな額、と言うか看板のようなものだった。

それには、外し忘れてるのか外すのが面倒なのか、『祝・歓迎！新^ハ

入生』

と、やる気があるんだかないんだかよく分からない文字がサインペンか何かで書かれている。

きつと、歓迎会のときの、ゴールゲートか何かのつもりだったんだろつ。

だが、注目すべきはそれらではなく。

それを両手で持っている、ちっちゃな女の子の存在だった。

「ふふふ。ずいぶんとぶしつけな質問をするじゃないか、先生。

ただの道具、しかもしがないクリップであるディアに行動権などないこと、先生が一番分かっていることだろつ?」

答える女の子は、どうやらつくもんのひとり、らしい。

クリアが反応したのは、きつとこの子なのだろう。

喋り方とかも個性的だけど、虹色に透けて見えるポニーテールとか蝶ネクタイにサスペンダーに長靴といった姿もこれもまた個性的で。

遠目から見ると、カラフルな造紙で作られた花みたいだ、とは言えるはずもなく。

「……何か怒ってる?」

「ふつ、ふふふ。そう、見えるかい?」

余裕を見せて微笑もうと努力してるみたいだったけど。

どう見ても不可能だろうって思える大きさの看板を支えている、ディアと名乗った女の子の手は、ぶるぶると震えていた。

これはいつ落ちてもおかしくないというか、今までよく支えてたなあと感心するくらいである。

「もしかして、その状態で待つてたとか？ 歓迎会の日から」
「期待させておいて悪いが、ディアは自ら望んでこんな目に、もとい、この仕事を行っていているわけではないよ。道具は、何に使われるかなど自身では選べないだろう？ 風呂場の排水溝掃除の使われる歯ブラシのように」

「どうやら当たりだったらしい。」

凄絶な笑みさえ浮かべそんな事を言うディアに、歓迎会の日にここへ来れなかったことが、申し訳なく思えてくる。

肩口でモトカが、「ひょっとして自分のせいでもありますか？」ってバツの悪そうに呟いているのが、この気持ちに余計に拍車をかけていて。

もしかして、さっきの刺すような空気って待ちぼうけされた彼女の怒り、だったんじゃないかなって思えてなくもない。

「だが、しかし。こうしてやってきてくれたことを、文字通り歓迎しようではないか。」

そして願わくは、このディアの解くことのできない難問に、是非とも答えてほしいものなのだが。

「よろしいかな？ 親愛なる先生と、我が同胞である愛妹子たちよ」

何かつつこみたいフレーズがあったけれどそれはともかく。

ディアがそう宣言した瞬間、その場に緊張が走った。

もしかして、つくもんバトルってやつ、する羽目になるんだろうか？ そう考えた僕に習うように、ダウンしているクリア以外にふたり、モトカとリオンが戦闘態勢に入っていたけれど。

「何日も待ちぼうけをくらわされてね、ディアの心と身体は今にも

張り裂けそう、なのだよ。

この痛み、先生ならいかにして癒す？」

しかし、次にディアの口から紡ぎだされたのは。

僕らの考えていたのとはちょっと異なっていた。

というか、冷静を装ってるけど、ずいぶん切実そうな言葉だった。

「……ごめん、とりあえずその手を離せばいいんじゃないかな？」

僕は何だか、とにかく謝らなきゃいけないような気持ちになって、

それでももつともなことを口にする。

なんだろう、このやり切れない感は。

さっきも感じた気はするけど……。

「流石は先生。ディアに解くことのできないこと、容易く解いてみせる。」

負けたよ、煮るなり焼くなりゲットするなり、好きにすればいい」

ディアは、それは目からうるこだなとも言わんばかりに得心して、手を離す。

すると、結構な音を立てて、がしゃんと落ちる看板。

「ついでに、ここから降ろしてもらえると非常にありがたいんだがね。高いところは苦手なんだ」

「あ、そうだね、ちょっと待ってて」

言い回しはとてもクールなんだけど、どうやら後ろ髪がフックに絡まってるみたいで。

一応足場があるから、大変な事態にはならなかったみたいけど。

宙ぶらりんなその姿は、とてもクールと言いがたいのが、何だか可愛かった。

「なるほど。ディアどのに『手を離せ』という命を、とのは与えたのでございますね。」

さすれば、普段動くことのままならぬ我らでもそれができぬことはない。深い問答でございました……」

なんだかなーと思いつつ、苦笑しつつ荷台になるものを探している。

そんな事を呟きつつ、尊敬の眼差しで僕を見てくるリオン。つて、あ、そうか。彼女たちって普通は動けないんだっけ。

まあ、リオンはそれで納得しているし、ここは黙っとくことにしよう。

「む、たいちよー、目標物発見でありますっ」

「お、ほんとだ。あつた脚立。あ、でも生徒会室って書いてあるな。使っていていいか許可とらなきゃ」

「ごしゅじん、変なところで律儀やね」

モトカの指し示す方向にある脚立を手に取り、生徒会室になら誰かがいるだろうって歩いていくと。

いつの間に復活したのか、クリアのちょっと呆れたような声がする。

「ん？ クリア、髪の色戻ってる。もう平気なのか？」

「……うん、休んだからな。ごしゅじんにくつついて寝とけば酔いなんてすぐ直るで」

「そっか、それじゃ早く、ディアを助けてあげよう」

すっかり元気そうなクリアに内心ほっとしつつ、僕はそう言って生徒会室の扉をノックする。

「すみませーん。どなたかいらっしやいますか？」

「はい、今出るわよーっ」

するとすぐに、何だかちょっと場違いなくらいの明るい声が返ってくる。

そして、勢いよく開かれた扉から出てきたのは【本校】の制服を着た、上級生らしいちょっと大人びた女の子だった。

「すみません、生徒会の方ですか？ ちょっとこの脚立、貸して欲しいんですけど」

「当たり前でしょう。この私を誰だと……って脚立？」

「駄目ですか？」

「え？ あ、別に構わないけど」

「ありがとうございます。あ、扉閉めますんで、ちょっとすみません」

「ちょ、ちょっと？」

生徒会の人は何かを言いかけてたけど、早くしてくれとばかりにディアが恨めしそうに見降ろしてくるので、僕はぺこぺこ謝りながら一旦扉を閉め脚立をそこに設置した。

そして、絡まってた髪をほどいて、ディアを救出した……その、瞬間だ。

モトカヤリオンを助け出したときと同じ、僕の知らないはずの『記憶』が、僕の頭の中に生まれてくる。

それは……言うなれば、授業風景だった。

知らない世界、知らない授業。

幻想と不思議と、夢に満ちたもの。

「……それじゃあ、紅恩寺吟也くん、キミはどうか？」

「僕もある思います。僕らが想像できることなら、たぶんきつと」

問いかけてきた先生にも見覚えはなく、周りのクラスメートにも覚えはなく。

なのにその先生は僕の名前を呼び、僕の見てる視点の人物に注目が集まる。

それを受けたそいつは、まるでクリアみたいなふぞろいな関西弁で、そう答えた。

立った拍子に、視界にこぼれるのは、クリアと同じ熟れた紅葉の色の髪。

一体どういうことなんだろう？

もっとよく考えようとしたら、あの黒いもやが……その映像を真っ黒にぬりたくり、消していく。

さすがに三度目ともなると、気のせい、などと捨て置けられるはすもなく。

しかしそれを理解するためには、後一步、決定的な何かが足りない気がした。

僕は、その後一步を踏み出すことを何もせずに待っていていいのかと、そう思う。

何かすべきことがあるんじゃないかって、そんな焦りがそこにあつて……。

「ありがとう、先生」

「……あ、うん」

はっと我に返ったのは、ディアのそんな真っ直ぐな感謝の言葉が、耳に入ったときだった。

「しっかし、ディアってクリップなんだろ？ 誰だよ、クリップにこんな重いものぶらさげたの。いい加減にも程があるなあ」
思わず誤魔化し、照れ隠しにそんな事を呟く僕。

しかし、それがまずかつたらしい。

「悪かったわね。いい加減で！ どうせ誰も来ないって思ってたのよー！」

そんな叫び声とともに、バカン！と扉が脚立にぶつかる音。

「わ、わあっ！？」

「ぐ、ごしゅじんっ！」

ぐらりと後ろに倒れる脚立。

僕はそれに抵抗するみたいに、前のめりになる。

そのまま足を踏み外して落下するその下には。

いきなり扉を開けて、今の状況を作った張本人の姿があって……。

ぶつかるっ！って思った瞬間、僕は自分でもほればれするくらいの動きをした。

衝突を避けるように両手両足をつっぱり、背中を仰け反らせて見事に着地する。

「……あ」

「……っ！？」

それが、組み敷いた女の子を今にも襲いそうな体勢でなければ。
その女の子の、胸に顔を埋めるような状態でなければ、もっと良かったんだけど……。

「いやあーっ！」

「ひでぶっ？」

そんな小さな後悔は、悔やむ間もなく。

強烈な顔面パンチの一撃によって、僕の意識はかき消されたのだっ
た……。

その後……。

目が覚めたときには、僕にきつい一撃をお見舞いした女の子の姿は
なかった。

ついでに、おつかいに来たはずなのに、生徒会室はもぬけの殻で。
やっぱり来るのが遅すぎたのかなんなのか。
怒られること覚悟でありのまま、寄り道してたら殴られて誰もいな
かったってトイー先生に伝えただけ。

「そうか、そりゃ仕方ないのう」

てな感じで何だか妙な笑顔でお咎めなしで。

一体おつかいってなんだったんだらう？

僕はそう首をひねりながら、帰宅したんだ。

だけど……。

その答えは、次の日、思わぬ形で知らされることとなる。

21、リオンとクリア、食卓にまつられる

その日は、学校の授業のない、休日だった。

昨晚までに、潤ちゃんに渡す代わりにプレゼントとして作った潤ちゃん用の武器が完成していたから、休日でも学校にいるらしいトイ先生に会って出来栄を見てもらうつもりだったんだけど……。僕が外出の準備を整えたところで、来客を告げるベルが鳴った。

「はい」

僕はそれに答え、扉を開けると……。そこには潤ちゃんがいるではないか。

「こんにちは。吟也、少し時間ある？」

「うん、かまわないけど……。そのフード暑そうだね。陽射しよけ？」
玄関に迎え入れた潤ちゃんは、まだ涼しめの春とはいえ、暑そうなコート着ていた。

思わずそう問いかけると、潤ちゃんは苦笑を浮かべて。

「一応私も【生徒】だから。外出のときは力を抑えるために、これを着てなくてはならないのよ」
そんな事を言った。

思い出すのは若穂の言葉と、潤ちゃんたちを避けていた男子生徒たちのこと。

デリカシーのないやつだなと、自分を自分で責めつつ、
「そっか、有名人だもんなあ。顔の一つも隠す必要があるってことか。ま、家なら不要でしょ。お茶出すから、あがって」
そう言っって誤魔化しながら潤ちゃんを迎え入れる。

「ありがとう」

「別に礼を言うほどのことじゃないでしょに」
たぶん、その言葉には色々な意味が込められてるんだろうけど。
やっぱり何だか照れくさくて、僕はそのままリビングに入っ
た。

すると、机の端っこにちっさい座布団を敷いて、リオンとクリアが
テレビを見ているのが分かって。

そう言えばかがみ姉さんはディアやモトカを連れて買い物に行っ
ていることを思い出し、仕舞い込んであったお茶っ葉に悪戦苦闘し
ていると。

いつの間そこにいたのか、僕のすぐ後ろで所在なげにしている潤ち
やんの姿がある。

「どしたの？ 座っていいよ」

「あ、その……サングラスとパンチがテーブルの上にまつられて
るのが気になって」

「ああ、言われてみれば」

リオンの元となるものは、どうやらパンチらしい。

僕には仲良くふたりでテレビを見てるようにしか見えないけれど。
潤ちゃんにはそうは見えていないんだろう。

一度自分以外の視点で彼女たちを見てみたい気がするが、

「気になるならちょっと席を外してもら……じゃなく、どかすけど
？」

「ふふっ、ううん。別に構わないわ。やっぱり相変わらずものを大
事にしてるなーって思ったただだから。……あ、そうそう。はい、
昨日言ってたホツチキス」

何だかちよっと楽しげにそう言う潤ちゃんは、お盆を手にした僕と
もに空いてるソファにつくと、

開口一番そう言うてくる。

「あれ、何で？ そうなん？ つくもん反応ないんやけど」
相対に腰掛けてお茶を配った僕に、潤ちゃんが差し出してきたのはひと目で大事に扱われていたと分かる、手作りの小さな手提げ袋だった。

よく見ると、袋はみの虫みたいにもぞもぞと動いている。
しかし、クリアが咳く通り、いつもの『でしっ』がなかった。

「はっ、もしや、狭い密封空間による酸欠でっ？」
続いてリオンがはっとなり、とてもいやなことを言う。

「あ、開けてもいい？」
「ええ」

頷く潤ちゃんを確認して、僕はおそろおそろ袋の中を覗きこむ。
そして安堵。

袋の中では、クリーム色のウェーブのかかった長い髪に巻かれて熟睡してる、小さな女の子の姿があった。

「知らなかった。熟睡しとるとつくもん反応ないんや」

「いらぬ心配だったでござりまする」
起こさないようにその様をクリアたちに見せると、ほっとした様子のクリアとリオン。

その子のことはクリアたちに任せ、僕は改めて……潤ちゃんに向き直る。

「でもさ、潤ちゃん。まだ僕試験に受かってないし、約束も果たせてないよ？ なんで返してくれたの？」

想定外な、潤ちゃんの突然な行動。

そのことが気になって思わずそう問いかけると、潤ちゃんは頷いて。

「今日はどちらかと言うと、そのためにここへ来たの。突然なんだけど、特例で吟也を【本校】に編入させることが決まって……その連絡を、私が頼まれたから」
なんて言った。

その、あまりにも突然すぎる急展開に、理解が追いつかない。

「な、なんで急に？ 僕、試験受けてないんだよ？」

「ええ、最初に聞かされたときは私も驚いたわ。何でも議長がそう決めたらしいんだけど」

「議長？」

「ええ、生徒会議長の名神真希先輩。ながみ・まき今、トップの生徒会長が空席だから、仮のトップを務めている人、なんだけど……」

潤ちゃんは、そこで言葉を止め、何だか訝しげな顔を向ける。

「だけど？」

怒っているようなそうでないような、なんとも言いがたい様子の潤ちゃんに、反射的に身を引いていると。

「吟也、あなた真希先輩に何か恨まれるようなことしたでしょう？」

あの能天気が服を着て歩いてるような先輩が、あそこまで怒ってるの初めて見たもの」

「怒ってた？ ど、どんな風に？」

その先輩の名は聞き覚えがなかったけど、いやな予感がして、そう聞き返す。

「どうって……生徒会長にして、死んでもこき使ってやるわ！ って叫んでたわ」

「し、死んだらこき使えないと思うけど」

「ああ、ウチ、一応科学班もいるからね。改造人間のサンプル欲しいって言ってたから、たぶんそれじゃない？」

「……」

僕のしょうもない突っ込みにも、容赦なく倍返ししてくる潤ちゃん。意識してやってるんじゃないのなら、それはきつと天性のもの、なんだろうけど。

それより何より、そこまで恨まれるようなことしちゃった人、いたっけかなあって脳内を検索してみる。

すると、そんな僕の考えを見透かし、答えるかのように。

「昨日、せいとかいしつ、とかいうところであつた人じゃないんか、ごしゅじん」

「ふむ。昨日とのがご乱心したときの被害者でござるか」

一緒になつて朝のワイドショーを見ていたクリアとリオンが、そんな事を言ってくる。

どうして、そうやっていつも大げさに僕を貶めようとするのかね、とか思いつつも。

言われてみればあの時、下にいた人もそうだけど、下手な落ち方をすればクリアたちが大怪我するかもしれないって思つてて。

だから、テンパってたんだと思う。

今更だけど、セクハラまがいのことをしてた……気がしなくもない。

「あー、なんとなく思い出してきたぞ。僕、殴られたんだ。たぶん、きつと、その人に」

「な、殴られた？ よくそれで無事だったわね」

「無事、かなあ？ だって、そのまま気を失つて、その場に置き去りにされたんだよ？ おかげで先生に頼まれてたおつかいできなかつたし……」

おつかいがままならなかつたのは、半ば自分のせいでもあつたけど。その理不尽な仕打ちを思い返し、ふつふつと怒りが込み上げてくる僕。

「無事じゃない。真希先輩って言えば得物を使わない【生徒】として最強の戦士なのよ。」
私、彼女の拳の一撃で魔物がこっぴみじんになったの、見たことあるもの」
「だけど、僕のその怒りは。次に繰り出された潤ちゃんの一言であっさり氷付けにされた。」

何かちょっとズレてる気もするけど、笑えない潤ちゃんの言葉。
しかし、潤ちゃんは訝しげに思ってた謎が解けたらしい。なにやらしみじみと頷いて。

「いきなり言われたから驚いたけど、良かったじゃない。命たちも吟也のことかかってたみたいだし。約束叶えられちゃったのは何だか複雑だけど……うん、約束だもんね。これから一人前の【生徒】として、私が鍛えてあげるわ」
「う、うん。僕も急でまだちょっと信じられないけど、よろしく頼むよ。潤ちゃん」

複雑、という言葉。

そこには色々な意味が含まれているんだろうと思う。

紅葉台に入って【生徒】になって、いつも守ってもらってた潤ちゃんを守る男になってやる。

それが僕にとつての約束で。

真に叶えられるようになるのは、まだまだ先で。

潤ちゃんから見たら、僕はまだまだ、守られる存在なんだろう。

もしかしたら、そのことでムキになろうとする僕ですら想定済みの複雑、なのかもしれない。

強くならなくちゃって思う。

潤ちゃんはもう、約束を守ってしまったと思ってるかもしれないけ

ど。

まだ僕の中で終わってないから。

「あ、そうだ。潤ちゃんに渡したいものあるんだ。ちょっと待って」

だから僕は、その約束……自分の内だけで決めた、潤ちゃんを守るくらいに強くなることの証として、昨日完成したばかりの、潤ちゃんののために作った武器を持ってくる。

急に立ち上がった僕に、初めはぼかんとしていた潤ちゃんだったけど。

僕が持ってきたもの……刃が銅鐸のように大きく広がった大きめの槍を見て、驚きの声をあげた。

「……どうして？ どうして吟也、私が愛用してる武器、持っているの？」

「うん、クラブの宿題でさ。潤ちゃん、アンケート書いてたでしょ？ それを参考に、真似て作ってみたんだ。ほんとはこの後、先生に出来ばえを見てもらうつもりだったから、実はちゃんと使えるかどうかわからないんだけど……ま、お守り代わりにもってて。あ、お守りにしたってでかすぎて邪魔かな、コレ？」

驚いたまま固まっていた潤ちゃんは、僕の言葉を聞くうちに事情を察したらしい。

ぶんぶんと首を振ったかと思うと、奪いとるかのような勢いでそれを手に取り抱きしめる。

「潤ちゃん？ カバーはつけてるけどそれつつすい皮のだからあんまり力入れると痛いよ？」

というか、思ってた以上の反応に僕が戸惑っている。
潤ちゃんはさらに首を振り、プイッと背を向けてしまう。

「……ありがと、一生の宝物にするから」

そして、僕を見ないまま、そう呟く。

その言葉に、内心ちよつと複雑な僕である。

そんな大げさなものじゃないっていうか、元々はホツチキスの代わりについて打算があったっていうか、言うなれば、懲りずに一方的に結んだ約束そのものなのに。

「あ、うん。どういたしまして。そう言われると、僕も作った甲斐があるよ」

正直なところは口にできないダメダメな僕。

そんな事思ってたからなのか、何だか微妙な間があつて。

「あのさ、吟也、私……」

「……ん？」

背を向けたまま、潤ちゃんらしくない蚊の鳴くような声が聞こえて、僕は聞き返す。

それを受けて、潤ちゃんが軽く息を吸って何かを言おうとした、その時。

ジリリリンッ！

どこからともなく、けたたましいベルの音が鳴り響いた。それを聞いた潤ちゃんは、はつとなつて携帯を取り出す。携帯の音の割には、随分と固いなあ、なんて思っていたら。

「し、ごめんっ吟也、ちよつと電話出てくるっ」

潤ちゃんは鋭くそう一言残して玄関のほうまで走り、しばらくは何やら言い争いをしてるような声がして。

たいした時間かかることもなく、潤ちゃんは電話を終えて戻ってきた。

が、その表情は何だかすぐれないというか、うなだれている。

「ごめん。本部……生徒会室からの緊急の呼び出しで、私戻らなきゃ」

その、凄くどんよりとして雰囲気、何だか僕は不安になった。

「もしかして、【魔物】が出たの？」

窺うように僕がそう聞くと、しかし潤ちゃんは我に返ったかのように気を取り直して。

「ううん、そういうわけじゃあないわ。……あ、違うとも言い切れないかも。

何かね、外界の話ではあるんだけど、紅葉山のとっぺん辺りに【魔物】が増え始めてるみたいなの。

今のところ、内界に入ってくる気配はないらしいんだけど、これ以上増えるようなら避難勧告が出される可能性はあるわね」

今あつたばかりの電話の内容を語ってくれる。

きつと潤ちゃんは、その警戒のために呼ばれたのだろう。

それを聞いた僕は、何だかわけの分からぬ不安に襲われた。

「それ、僕も行ってもいい？」

だから……自分が何かをしなくちゃいけない気がして、僕は気付けばそんな事を口にしていた。

「何言ってるのよ。ダメに決まってるでしょ。いくら【本校】への編入が認められたって言ったって、まだ正式な手続きもしてないし、何より基礎も知らない吟也が今現場に出たって、足でまといどころ

か、吟也危険な目に……ひいては他の子たちを危険に晒してしまうことだつてあるかもしれないでしょう？ 少なくとも一ヶ月は対【魔物】の戦闘やルール、【曲法】について勉強しなきゃ」

「……そっか」

そこまで言われてしまうと、さすがにそんなことないなんて大それたこと言えるはずもなく。

自分ひとりのワガママで他の人に迷惑がかかるなんて言われれば、引き下がるしかなくて。

でもそれでも、もやもやした感じが抜けなくて。

たぶん不満そうな顔、してたんだと思う。

それを見た潤ちゃんは苦笑して。

「ごめんね。ほんとはこの後、そのことについてみっちりレクチャ―していくつもりだったんだけど……帰還命令出ちゃったし、今日のところは【付属】の荷物まとめておいてくれる？ それから明日、日曜だけど、直接【本校】に来てほしいの。吟也に、【曲法】の才能があるかどうか検査するって言ってたから。……まあ、【異世】にずっといても平気、真希さんの拳を受けても平気なら、きつと何らかの力があるんだろっけ。もし前線に出られるタイプの【曲法】だったら、私の委員に入るのよ」

伝えられることは今のうちにすべて伝えてしまえと言わんばかりに、そうまくしたてる潤ちゃん。

「え？ う、うん。でも、生徒会長がなんとかって塩生さん言っってたっけ？」

対する僕は、相変わらずのつてくるとたちまち雄弁になる潤ちゃん
の言葉に目をしろくろさせながら……そんな言葉を返す。

さらに、そう言えば美音先輩もそんな事言っただよつな気が……なんて考えていると。

再び響く、潤ちゃんの携帯のアラーム音。

「あーもうっ、分かってるわよ！ ……と、とにかく、【生徒】になつたら入るのは私の委員よ、分かったわね？ それじゃ、また明日っ、待ってるから！」

「う、うん、また明日」

そして、どさくさにまぎれて有無を言わせぬ懐かしきジャイアニズムを發揮して。

潤ちゃんは、挨拶もそこそこ家を飛び出していつてしまったのだつた……。

22、ディアとカチュの、さもない戦い

あれよあれよと言う間に、慌しく潤ちゃんが帰っていった。

「じゅじん、全く押しが弱いな」

「うっ」

テレビを見ててこっちの話なんか聞いてなかったはずのクリアが、しみじみとそんな事を言う。

「そこがとの弱みであり、美徳でありますか」

すると、言われてへこんでる僕をフォローするようにリオンがそれに続いた。

その膝上には、潤ちゃんのお手製らしい巾着を布団代わりにして未だ寝こけている、もともとホツチキスらしき小さな女の子の姿がある。

けっこうがやがやと喋ってたのに、まるで起きる気配のないのは驚きで。

「まだ寝てるんだね。そう言えばその子の名前聞いてなかったけど」
改めて見てみると、やはり特徴的なのはそのふわふわのクリーム色の髪の毛の長さだろうか。

頭のとっぺんから足元までぐるぐるのむしみたいになってるのを見てると、思わず引っぱ張ってみたいくなるような、そんな長さだった。

「そっぴや、ねとるからあいさつしてへんやつたけか。この子はカチュはん、言うんやで」

「確かにとのの御前で居眠りとは、いささか礼に反するかもしれませぬな。……起こしますか？」

「いや、いいよ。あ、でも待って、チビ座布団まだ使っていないのあ
るし、持ってくるね」

いい加減膝枕がしんどいのかも、なんてことに気付いて。

僕は立ち上がり、何気に人数分つくってたチビ座布団を持ってくる
と。

「ただいま帰りました」

「帰還したであります！」

「今帰ったよ」

玄関の扉の開く音がして、かがみ姉さんが両肩にモトカとディアの
二人を乗せ、買い物荷物を両手に抱えてリビングへやってくる。

「おかえりー」

「おかえり、でござるよ」

「おかえりやな。……あ、モトカちゃんそろそろ10時や。『ねこ
ねこエンジェルふたきちゃん』はじまるで」

「ふふ、そのために急いで帰ってきたでありますよっ！」

僕がそれに答えて台所まで荷物を運ぶのを手伝っていると、あいさ
つもそこそこにモトカはそう言っ、自分の座布団を引っ張ってく
る。

ちなみに、クリアが言ったのは土曜日の10時から大人気放送中
の、女の子向けのアニメだ。

そんな二人を先頭に我が家でも大人気で、夕方の再放送もかさず
拝見させていただいたりする。

こういうのも、生活が大きく変容したって言えるのかなあ、なんて
しみじみ思う。

もつとも、昔はこの時間帯なにを見てたかも思い出せないのが玉に瑕だが。

「そう言えばおやかたさま。潤様いらしてたんですか？」

と。一緒に台所にきていたかがみ姉さんが、洗い場にあつたカップに目をやりそんな事を聞いてくる。

「うん、さつきまでいたんだ。よくわかんないけど【本校】の【生徒】に僕が推薦されたらしくて」

「そうなのですか？ 何だか潤様ずいぶんと慌てているようでしたから、声をかけそびれてしまったんですけど……」

「ああ、何か【生徒】の仕事で呼ばれたみたいだけど、何か用あった？」

「……いえ、何しろめでたいこと、ですわね。今夜は腕によりをかけ、お祝いといたしましょう」

何かを考え訴えてくるかのような、かがみ姉さんの言葉。

気になって思わず聞き返したけど、気を取り直すようにかがみ姉さんは話題を変える。

そして、何を作ろうかと思案しながら買い物袋のものを冷蔵庫に仕舞っていた。

その何だか主婦めいたかがみ姉さんの今までの言動にどこか違和感を覚えて……そんな後姿を見つめていると。

「むっ！？ たいちよー！ いつの間に新しいたいいんがっ、しかもモトカの特等席を占領中でありますっ！」

そんなモトカの声が聞こえてきた。

「あ、そうだった。潤ちゃんが来たもう一つの理由っていうか、カ

チユのこと連れてきてくれたんだ」

「まあ、そうだったんですか？ 早速ごあいさつしなくてはいけませんね。それに、一人分増やしませんと」

かがみ姉さんはそう呟いて手を打ち、呼ばれた僕とともにリビングに戻る。

「あら……まあ」

見ると、やっぱりカチユはまだ寝ていた。

モトカが撤退を要求する！なんて頬を引っ張っているが、起きる気配はない。

というか、よくよく見てみると何だかその顔はひくついているいし、油汗まで流している。

どうやら、モトカは本気で引っ張っているらしい。

それでも起きないというか、我慢して寝たふりをしているカチユも凄いいけど。

きつと、スパナでほっぺたつつねられたら痛いだろうなあ……なんて考えていると。

僕と同じく、カチユの寝たふりに気付いた（というより、モトカ以外はみんな気付いているのかもしれないけれど）ディアがそんなカチユを見て、そして何故か僕のほうを見て、何かを企むような笑みをこぼし口を開く。

「モトカ、そんな正攻法なやり方じゃカチユは起きないよ。千切れないうちに手を離れたほうが賢明だと思うけどね」

「あ……う、うん」

ディアの言い方が怖かったのか、素直に従うモトカ。

正攻法じゃないやり方ってなんだろう？

っていうより、何で寝たふりなんかしてるのかなって近付いていくと。

下から見上げられているはずなのに、何故か上から見られてるかのような、高邁な口調でディアが口を開く。

「そうだね、先生。これはカチュとのつくもんバトルだと思って聞いてくれればいい。」

こうして彼女は眠り姫を続けているわけだが、このバトルに先生が勝つには、彼女を起こさなくてはならないんだ。そこで、先生には彼女が目覚まさない理由を考えてもらいたい。

- 一、今の今まで先生にほって置かれて寂しかったから。
- 二、仙道のごとく、元々ヒマさえあれば寝てる性格だから。
- 三、お約束である目覚めのキスを待ってるから。

「……さあ、先生なら、どう応える？」

そんなディアの問いかけに。

おお、と賞賛の声すら上げて、どよめく他の子たち。

心なしか寝てるはずのカチュまで動揺しているように見えたけど。僕はちよつと考えて。

「……ええと、正解っていうか、理由はたぶん全部、かな？」
「エクセレント。ふふふ、さすが先生だ。三つのうちどれ、と聞かなかったところを見事についたね。では、さっそく実践してみようか」

ディアは僕の言葉にひとしきり笑った後、嬉しそうに頷くと。

「では、いただきます」

そんな言葉を残し、カチュに顔を近づけようとして……。

「さっせ〜る〜か〜っ」

がばつと起き上がって止めるのかと思いきや、何とも力の抜けた……というか、眠気が抜けてない声をあげ、カチユはごろごろとテーブルの上を転がりディアを回避する。

「ほう、無気力寝坊すけのキミが、随分と俊敏な動きをするじゃないか」

「あーたり、まえっす。カチユの熱いキスはボスだけのものゝホツチキスなだけに……ふあ、眠いゝ」

「おもしろい。だがっ、キミの負けだ。いいかいモトカ？ 正攻法ばかりでは勝利は得られないのだよ」

「今でありますっ、フタキちゃん！」

「ねこつめばーんちゃっ！」

「……ほう？」

勝利を確信したらしく、高笑いすら上げかねない様子のディアだったけど。

すでにテレビに釘付けになってたモトカとクリアを見て、ディアの声のトーンが一段階あがった。

「わ、分かったござるっ、リオンはディアどののからめ手、しかとこの目に焼きつけたでござるよっ！ あっばれなお手前でござるっ……」

え？ な、何でリオンにっ……いゝやーっ！」

「ふふふふっ」

……この中だと、意外とリオンが苦労性らしい。

それにしても賑やかになったもんだと、しみじみ思う僕である。

後一人でクリアの言う7人が揃うわけだけど。

何かこのままノンストップで賑やかになっていくような、そんな気がする。

「ふふ。おやかたさま、楽しそうですね」

「うん？ ……そりゃ楽しいよ、騒がしくて楽しいってのももちろんあるけど」

「けど？」

思わずこぼれた笑いには、もう一つの僕の中では大きな意味があった。

僕と同じように、わいわいがやがやしてるテーブルを眺めながら聞き返してくるかがみ姉さんに僕は一つ頷いて。

「実はさ、まだちよつと半信半疑だったんだよ」

何が、とは言わない。

きつとそれがかがみ姉さんにも伝わるはずだから。

「でもさ、今、僕ってみんなの言うような存在なんだなって、そんな気がしたんだ」

「……その心は、とても興味深いですわね？」

身を乗り出して聞いてくるかがみ姉さん。

僕はそんなかがみ姉さんに、そんなたいしたことじゃないけどって前置きして。

「熱いキッスでホッチキス……なんてこと、そういや考えたことあったなーって。」

ああ、何だやっぱり僕がそうなんだって。さもないことなのに、変に説得力があるっていうか。

何だか似たものきょうだいみたいだなあって……そう思ったんだ」

それはたぶん、僕のほしかったものなんだと思う。

決して切れない、何かの縁で繋がっている……家族のような絆。もう二度と失ってはいけないもの。

「わたくしはおやかたさまを信じています。……その言葉、ずっと
忘れないでいてくださいね。
わたくしも、忘れませんから……」

発したその言葉について言ったのが、内に秘めた思いのことについて
言ったのか。

それは分からない。

だけど……。

すぐに僕はその意味を、思い知ることとなる。

それは、次の日のことだった。

学校は日曜で休みだったけど。

基本的に休みのない【本校】に呼ばれていたので、いつものように
かがみ姉さんに留守を任せ、

頭の上にはクリア、左肩にモトカ、胸ポケットにリオンとディア、
ブレザーの左下のポケットには

巾着の中で眠るカチュウ（連れていくつもりはなかったんだけどブレ
ザー着たらそこにいて、起こすのもなんだなーって思ってそのまま
にしておいた）といった、たとえるなら自分が巨大口ポケットにでも
なってるかのような？ そんなノリで、いざ紅葉台高校へ！ とば
かりに歩を進めていたその道中。

桜並木の曲がり道にさしかかったところで、いきなり警報音が轟いたんだ。

紅葉台じゅうに響くかという、そんな大音量で。

『【魔物】警報発令！ 紅葉台町一帯に住むみなさんは、ただちに避難してください！ 繰り返しますっ………！』

「警報だつて？ まさかつ」

僕はそれを聞き、思わず立ち止まった。

もしかしたら避難勧告が、いわゆる本拠地とも言えるこの紅葉台でなされるなんて初めてのことなんじゃないだろうか、そう思ったからだ。

しかし、昨日確かに潤ちゃんに紅葉台山に【魔物】が出たと、そう言っていたのを思い出す。

僕は、慌ててブレザーの右下のポケットから携帯を取り出した。

そして、テレビのニュース画面を呼び出す。

すると案の定、今の警報についてのニュースがやっていた。

『紅葉台山、登山口入り口からの中継です！ご覧ください！

境界線から100メートルほど先に、ずらりと【魔物】たちが並んでいます！

ここから見る限り百はくだらない数ですっ。しかも、この【魔物】の数、時間を追うごとに増えています！ 内界へ侵入する気配は今のところありませんが、数が多いとのことで【生徒】による警戒が続いていますっ！』

レポーターの人らしき男の人が、おののきつつ様子を伝えてくる通りに。

そこにはずらりと並ぶ【魔物】の姿があつて。

「……………どういうこと？」

僕は思わず、誰にともなくそう呟いていた。

その声は、混乱の極みにあつて少し震えていたかもしれない。

それは、あつてはならないはずの光景。

何度も言うが、ここは対【魔物】のための本拠地なのだ。

こんな事態になる前に、もっと早く気付いてもいいはずなのに。

……………と。

そんな考えに思い至ったとき、急に映像が切り替わった。

『続いて、紅葉台山上空からヘリでお送りしています！』

【本校】本部によると、【魔物】の大量発生の原因は、紅葉台の頂上付近に発生した、

【旅扉^{トラベルゲート}】であることが判明いたしました。

しかし【魔物】の数が多く、【生徒】の一隊も容易に近付くことができない模様です！』

とたん、上空からのカメラがズームアップしてそれを映し出す。

それは荘厳な台座つきの、虹色の波渦巻く大きな黒いわっか、だった。

わっかには自らが発光しており、息づいているように見える。

『あつ！ また【魔物】がゲートから出てきましたっ！』

そしてその言葉通り。

わっかから生まれ出たのは数体の【魔物】たち。

トラベルゲート
【旅扉】。

それは、この世界に【魔物】が跋扈する理由の一つと言われている
時空のひずみだった。

それを壊すことにより、新たな魔物の出現を防ぐことができるらし
いのだが。

壊してもまたいずこかにそれは現れ【魔物】を生み出すのだという。

そのメカニズムは未だに解明されていない。

だが、【魔物】たちが地球が人間の破滅のために送り出した存在だ
と言われているのは、ここに理由があった。

これで潤ちゃんが昨日言っていた、【魔物】が大量発生した理由が
分かったわけだけど……。

「…………ベルはん？」

その時、同じように画面を見ていたクリアが、そう呟いたから。

さも、知ってる子を呼ぶみたいに、そう言ったから。

「え？」

僕は、背中を這い上がるような嫌な予感が迫ってくるのを自覚しな
がら。

ただただ、呆けたような言葉を返すことしかできなくて……。

23、ベルと、魚の骨が喉に刺さったような感覚

「……ベルはん？」

その時、同じように画面を見ていたクリアが、そう呟いたから。さも、知ってる子を呼ぶみたいに、そう言ったから。

「え？」

僕は呆けたような言葉を返すことしかできなかった。

一体何を言い出すんだ？

僕のそんな呟きは、そう取られてもおかしくなかったんだろう。

同じ画面を見ていたディアがはつと顔をあげ、

「先生、あの姿を見て分からないのかい？ とっくにディアの返すべき記憶は返しただろう？」

どこか怒りのようなものすらたえて、そんな事を言う。

返すべき、記憶？

一瞬だけ、ディアたちと会ったときに僕の頭の中に流れ込んできた、記憶のことを思い出したけど。

それはどこか曖昧で、おぼろげで。

「ベルどのは、我らの中でただ唯一、とによって創られた存在。いつも、それを誇らしげにしていたのを覚えております」
僕がそのことを考えようとする暇さえなく。

静かに語るように、リオンは呟いた。

「……ええと」

その言葉があまりに真剣だったから、僕は戸惑う。

何とか思い出さなくちゃって必死に考えて……。

ようやく一つ、思い出したことがあった。

瞬時に遠い所へ行けちゃうような。

扉を開けばそこは別世界、みたいな、ありがちだけどステキな発明品。

家柄なのかもしれないけれど、物を作ったりするのが好きだった僕は、ヒーローになりたいってことと同じくらいに【旅扉】のような……そんな発明品を作ってみたいって憧れていた。

実際、作ってみようって考えて行動を起こしたことさえある。

それで……さすがにイメージしてる通りのものはできなかった気はするけど。

結果は、どうなったんだろう？

やっぱり、記憶が曖昧だった。

というか今更なんだけど、こうやって過去のことを思い出してみても、神戸に引越してから記憶を、思い出せない事実。

その、ありえないことに……思わず笑みがこぼれて。

ただこの状況で、それは大いにまずかったらしい。

ふと見回すと、そんな僕をなんとも言えない悲しい目というか、責めてる目で見ているつくもんのみなさん。

「そ、そんな目で見るなよおっ！ マジへこむからっ。ごめんって」

「たいちよー、その言葉、ここで言っても仕方ないでありますよ」とどめ、とばかりにもっともな事を言うモトカに、僕は頷くことしかできない。

というか、僕にはいまいちピンとこないんだけど。

みんながああ【旅扉】が僕の作ったもので名前がベルなんだってそう言うのなら、きつとそうなんだろう。

でも、そうなってくると、最初の疑問がぶり返してくる。

「だけどさ、そしたらああ【魔物】たちは？」

まさか彼らですら僕がつくったものってことになったりしないだろうか？

実は世界を破滅に導く諸悪の根源は自分でした、なんてイヤすぎるぞ。

「確かに、ベルどのにあのような力はなかったはずでござりまする」

「でも、それはベルたいいん本人の話でありましょう？ ベルたい

いんは『もの』としても特殊な存在でありますし……」

僕自身に【旅扉】なんてアーティファクトめいたもの、作れるとは思えない。

しかし、仮に作れたとしたなら、その時のひずみから【魔物】が出てきたっておかしくはないんだろうけど。

「……でもあれ、ほんまにベルはんなんやるか？」

と、そこで言い出しっぺのクリアが、そんな事を呟く。

「って、クリアが最初にそう言ったんじゃ？」

「せやけど、やっぱりテレビの画面じゃようわからへん。ほんまにベルはんから【魔物】でできたん？」

「うーん、そう言われると上空からの撮影だしなあ。絶対とは……」
クリアの言葉に僕が唸っていると。
クリアはそれに、と付け加えて。
「ほんまにベルはんやつたらこんなことせえへんとちゃうかなあ？
だって、こんな【魔物】ぎょーさんおったらごしゅじん困るやろ？」
そんな事を言う。

「それはそうかもしれませぬ。ベルどのは、リオンたちとの家臣の中でも特に忠義に厚いお方。理由なくしてこのようなこと、するはずがありません」

「じゃあ、ベルたいいんになにかあったってことでありますか？
ううむ、何やら陰謀に匂いがするでありますっ」
そして、モト力のそんな一言に一同考え込んでしまう。

けど、ここで悩んでたっしょうがないだろう。
だってそれよりも、急がなきゃならない理由に気づいてしまったから。

「ふむ。どちらにしろ、行ってみなければ答えは出ない。そういうことだね」

「ベルどのが心配でござる。との！とにかくベルどのの元へ向かうでござるよー！」

それは……あの大量の【魔物】の出現に原因がベルになっている、
といついじや。

僕らはともかく、他の【生徒】たちが先にベルのもとに辿り着いて
しまったら……
ベルはどうなる？

考えるだけでも、イヤだった。
色々疑問はあるけれど、一刻も早くベルの元へ向かう必要があった。

「でも、どうしよう？ 今から向かって間に合うかな？ 【魔物】
もいっぱいいるし」

「難問、だが。しかしこうなると、ディアたちの取るべき手段は
思わず出た僕の言葉に、考え込んでいたディアは懊悩する仕草を見
せた後、クリアのほうを見る。」

「あ、そうか。クリアの翼の力で、最短距離で行けばいいかな？
つられてクリアのほうを見上げると、クリアは頷いて。」

「よっしゃ！ 任しとき！」
サムズアップなんぞして、微笑んでみせる。

「クリアたいいん……でもっ」
だが、そこでモトカが、そんなクリアを心配する様子を見せた。

「どしたモトカ？ 何か心配事？」
それがすごく気になって、僕はそう聞いていた。

聞かれたモトカは、あまり意識しての眩きではなかったのか、ちょ
つとあたふたした様子を見せて。

「あ、その、モトカたちの力はモトカたちの生命力と同じでありま
すから……あんまり使いすぎると命に関わるのであります」
「そうなの？」

言われるままに力を使ってきたけど、初めて知ったそんな事実
に、僕が呆然としていると。

しかしクリアはちょっとムツとして。

「何言ってるん。そんなんみんな一緒やる。ここで躊躇ってベルはんにもしものことがあってみい、本末転倒や。それに、あれがベルはんやなくても今起こつとることがなくなるわけやない。迷ってるヒマなんてないで？　もしかしたらベルは一人で心細うしてるかもしらへん、早く助けな。……そうやる、ごしゅじん」

「あ、ああ、うん。」

有無を言わせない口調でそう言われてしまえば。

僕としては、頷くしかなくて……。

結局……僕たちは、クリアの翼で空を舞っていた。

最初にこの力を使ってもらったときは建物の中だったせいか、あまり実感がわかなかつたけれど。

空舞うことに奇妙な懐かしさを覚えるとともに、それに喜びを感じている僕がいて。

それだけが目的だったのなら、どんなに楽しいだろうかって思うけれど。

そんな気分も、長くは続かない。

それどころか、こんな日の高い時分に、こんな堂々と飛んでいたらすぐに見つかって大騒ぎになるかもしれない、なんて危惧すら霞むほどの光景が眼下に広がっていた。

クリアに会ったばかりの頃、紅葉台と呼ばれる所以がよく分かった僕自身が言ったその山。

その遙か上空をを飛んでいるはずなのに、ここからでも分かる、お

びただしい【魔物】の数。

「ふむ、内界に向かおうとしないこともそうだが……ただ無目的にたむろしている、というわけでもなさそうだね」

聞こえるのは、そんなディアの呟き。

そう、それはこの高さまで上がって初めて分かること。

【魔物】たちは、大きな大きな円を描いていたのだ。

【旅扉】を中心に、自らの陣地を広げるように。

唯一つぽっかりと空いている【旅扉】の周りをのぞけば。

「何だか、敵本陣のど真ん中に突っ込むようでありますね」

「これしか手はないとはいえ、やはりモトカどのの言う通り……何者かの罫？」

モトカとリオンの会話もさることながら、正直このまま飛び込んでいいのかなって気はする。

引き返して、様子を見たほうがいいだろうか？

一瞬だけ、そんな事を考えたけど。

ふいに、ぐらつと身体がかしがつた。

「うわわっ？」

「危ないっ！」

その勢いで、中空に放り出されそうになったモトカをなんとか手でキャッチし、リオンとディアのいる胸ポケットへ降ろす。

「あつ、ありがとうございました、たいちよーっ！ さ、作戦開始を前にして命を落とすところでありました……」

そんな、九死に一生を得たかのような感じのモトカに胸をなでおろ

しつっ。

頭上を見上げると、そこにはずいぶんと苦しそうなクリアの姿があった。

しかも、ディアを助けたときみたいに、髪が白みがかっているのが分かる。

「く、クリアっ、大丈夫か!？」

「へ、平気やっちゅーのに……うん、もうちょっと、もうちょっとやから」

心配する僕をよそに、クリアは自分に言い聞かせるみたいに、そう呟く。

そんなクリアの姿に、一抹の不安を覚えていた僕だったけど。

それより先に僕の目は、その言葉通り眼下に目的地である山のとっぺん……森の木々にわずかに見え隠れする【旅扉】の姿をとらえた。

僕はグライダーの要領で走りながら着陸し、そのままそれに近付く。

すぐ近くには【魔物】の気配はなかった。

その時の僕は、そのことに安心していているばかりでその理由を深く考えようとはしなかった。

それよりも、闇と虹を混ぜたような、そのブラックホールみたいな【旅扉】に魅入られていて。

「すごいな。これ、本当に僕が作ったのか……?」

「何を今更。それよりも、電源を切るんだ先生。そうすればおそらく、これ以上の【魔物】の流出は防げるはずだよ」

「電源? ……そっか、分かった」

僕は言われるまま、その電源とやらを探すことにする。

しかし……まるで生き物のように渦巻き振動してるそいつが、僕に

は人工物にはとても思えなかった。

というか、さっきから何かがひっかかっている。
なんていうか、いつものお約束が抜けているというか、足りないものがあるというか……

「との、いかがされた？」

「あ、うん。なんかさー、ひっかかるんだけど」

リオンに促され、それでも魚の骨が喉に刺さって取れないような、そんな違和感が気になって。

さらによく考えてみて。

僕はようやく、その答えに行き着く。

「あ、そうだ。いつもの『でしっ』がないんだ。他の子がいると分かるって……って、クリア!？」

大丈夫かっ？」

そう呟いて頭上を見ると、息も絶え絶えで、ぐったりしているクリアの姿が目に入った。

「い、いしゅじん……に、にげ」

そして、クリアが弱々しくそう呟いた瞬間。
いきなりぐんと、僕の身体は引っ張られた。
目前にある、黒い渦に向かって。

「たいちよーっ！」

「う、うわっ!？」

モトカが鋭い声を上げたけど、時すでに遅く。

僕は……僕たちは、その渦巻く闇の中に、飲み込まれてしまっていた……。

24、ベルと不完全な王子

「でしつ、でしつ!」

いきなりの状況についていけず、混乱の極みにあつた僕。

そんな僕を我に返したのは、クリアのそんなしゃくりあげる声だった。

しかし、目は開いているはずなのに、辺りは真っ暗で何も見えない。

「つくもん反応っ? ……って、みんな無事か!?!」

「モトカ、無事であります!」

「はっ、リオンめはここに」

すると、すぐに返ってくる、モトカとリオンの声。

「ああ、ディアは問題ない。しかし不覚。畏だったとは」

その後が続いて、自分を責めるようなディアの声が続いたけど……。クリアの返事がなかった。

そつと頭に手をやると、そこにクリアのいるあつたかい感触がある。思い立ち、携帯の明かりを自らの目の前で照らし逆の手でそつと抱き上げて見てみると、意識を失っているらしいのがすぐに分かった。それでもなお、しゃくりあげる声が別のところから出ているかのよう響いている。

照らし出されて見える髪はかつての熟れた赤色の面影はなく、真雪のような白銀色で……。

無理をさせてしまったのかもしれない。

モトカは、力を使うためには自らの生命力を行使すると言っていた。それはもしかしたら、他の子を見つけ出すというこの力も含まれているのかもしれない。

「たいちよー、左前方にベルたいいん発見であります！」
と。そんな事を考えていると、この暗闇の中でも目が見えるのか、モトカが身を乗り出してそう叫んだ。
そつだよ、なら早くベルを見つけて、とつと帰ろう。

「分かった。悪いけどモトカ、僕にはほとんど見えないから、案内頼むよ」

「了解でありますっ！」

僕は肩口に戻ったモトカの言葉に頷き、クリアをリオンに任せて、言われた通りに闇の中を進んでいく。

すると、携帯の僅かな光に照らされて、かた地面に倒れ伏す、つひ小さな…
…黒髪おかつぱの女の子の姿を発見した。

「大丈夫っ、しつかり！」

そつと両手で抱き上げて、ぴくりとも動かなかつたから焦つたけど。

何度もそう呼びかけると、その女の子は目を覚ました。

そして、滑らかな身のこなしでぱつと起き上がると、暗闇の中でも分かる青い瞳が僕をとらえたのが分かつて。

「……王子？ 何故このような所におられるのです!？」

微かな一瞬だけ、その瞳が潤んだような気がしたけど、すぐに引込んでかわりに発せられたのは悲鳴に近い、怒つたような声だった。
「ふむ、随分な言い草じゃないか。せつかく、こうして助けに来たというのに」

「だ、誰もそんな事を頼んではいません！ ディア、貴女分かつて

るのですか!?

あなたは! ベルたちが守るべき王子を、みすみす危険へ晒しにきたようなものなのですよ!」

「仮に気付いてたとしても、止められないさ」

激昂するベルに、ディアはひどく冷静に……しかし深い懊悩の含んだ咳きを発する。

その場に、一瞬だけ静寂が包んだけど……。

「ベルはん。そんな、おこらんといて。テレビにな……ベルはんピョンチなんつつつとるのみて、ここまできたん……クリアのせいやねん。……ごめんな、ごしゅじん」

ベルの声に目が覚めたのか、途切れ途切れにそう言っつて、謝る仕草を見せるクリア。

「クリア……そうですか。貴女自身がそう決断しベルの元へ来たのなら、何も言いません。」

ディア、すみませんでした。少々取り乱しました」

「いや、それくらい言ってくれたほうがせいせいするよ。こんな初歩のトラップに気付かなかったのだからね」

まっすぐに非礼を詫びるベルに、苦笑して言葉を返すディア。

「罨……でござりまするか。して、この【異世】はやはり件の手のものだと?」

「いえ、違います。民間人をも巻き込もうとし、ベルの姿を借り王子を誘い込むこの手口、そこに正義などありません」

「となると、相手はモトカからの敵、でありますか」

辺りを油断なく警戒し、問いかけるリオン。

それを一言のもとに否定するベルに、モトカがそう結論付ける。

それにベルは、相手の顔を見てしっかりと頷いて。

「そう見て、間違いないと思います。……しかし、敵も随分と慎重というか、不可解なのです。」

ベルを捕らえ、こうして王子を誘い込んだのに、いまだに姿を見せない。

ですが、これは好都合かもしれません。王子！　ひとまずベルの力を使い、一旦この【異世】を離れましょう！」

「え、ええっ？　そこで僕にふるの！？」

今まで別に仲間外れにしてたわけじゃないんだろうけど。

みんな僕を置き去りにして、ちんぷんかんぷんな話をしてるし、まっくらで何も見えないしで……

たとえるなら、目を閉じて床に就きつつラジオでも聞いているような感覚に陥ってた僕は、急に話を振られて現実に引き戻されたような気がして、慌ててしまった。

「王子、どうしました？　さあ、早く脱出を」

「いや、うん……ごめん。どうやって？」

「……」

全く違う意味で、再び辺りを包む沈黙。

だって、モトカのスパナの力にしるクリアの翼の力にしる、僕が何かしたって感じじゃなかったし、

そんな事言われてもどうすりゃいいんだって感じた。

「一つ、お伺いいたしますが……ベルが最後ですよね？」

「ああ。そうだよ。だが、この通りさ。先生自身が記憶を拒否しているのか信じていないのか、まだかつての先生と比べて不完全な部

分が多いようだね」

「だから……ちゃんとつくもんバトルせなあかんで……いうたやん」

そして、そんなベルの問いに答えたのは、二人して呆れた様子でのデアとクリアだった。

また、僕に分からない話してるって、言いたいところだけど。

自分なりにまとめてみると、僕は何らかの原因で記憶を失っていてその記憶を、彼女たちが持っていたってことなんだろうか。

まあ、それは今までの体験も含めて、かろうじて理解できるけれど。何でわざわざそんな事をしたんだろう？って思う。というかそもそも何故、僕は記憶を失っている？

最初にクリアに会って色々説明を受けたとき、そんな事は一言も聞かされてなかったはずだ。

ただ、つくもんを7人集めれば願いが叶う、としか……。

「あ、そうだよ！ そんな事聞いてないぞ？ クリア、みんな集まったら願いが叶うとか言ってたじゃん」

「うん、言ったな。……クリア、みんな集めたらごしゅじんの願い

……叶うって」

一体どういうこと？って聞いたつもりだったんだけど、当のクリアは全くそれを否定せず、頷いている。

ええと、つまり？

「記憶の補完が、先生の『願い』。つまりはそういうことだよ」
僕が首をかしげていると、ちよつと意地悪そうにデアが答えてくれる。

「……サギじゃないのか、それ？」

「うう、クリアはひとこともうそなんかついてへんもん……」

思わず漏れ出た言葉に、不満そうなクリア。

ま、元々願いが叶う、なんてそんなに期待してなかったっていうか、もう願いはとづくに叶っちゃってるといっつか、現在進行形で実行中だから別に構いやしないんだけど。

「分かりました。今からベルの預かった記憶をお返しします。……
そうすれば、王子の願いが何であるのか、お分かりになると思いま
す」

どうやって？ってまたしても僕が尋ねる前に、手のひらの上に立っ
ていたベルが跪く気配があって。

何かが触れたその瞬間。

僕の頭の中に、今までも何度か体験したのと同じように、映像、記
憶が流れ込んできた……。

それは……一言でいい表すなら地獄だった。

吐き気を催すほどに純粹な、恐怖を掻き立てる、黒い太陽。

それが、無慈悲にも大地へと落とされて。

尋常じゃない数の、生けとし生けるものがその世界から消えていく。

それは、僕自身も例外じゃなくて。

僕は塗り潰されていく。

闇よりもなお暗いその黒に……。

「……………っ!？」

そして、はっと我に返ったとき。

目の前に広がるのは、その地獄と同じ色をした闇だった。

「……………ごしゅじん？」

クリアの心配気な声がどこからか聞こえる。

「王子？ さあ、早くこの場から脱出いたしましょう」
続いて聞こえる、ベルのそんな声。

そうだ、早く、ここから逃げなきゃいけない。

早くしないと！

僕は言われるままに、ここから逃げ出そうとした。

しかし、広がるのは闇ばかり。

どこにも、逃げ場などなかった。

どこにも……………。

「逃げられるとでも、思った？」

「……………っ!？」

そしてその刹那、闇の中に響き渡る声。

当然それは、僕の発した言葉じゃなく。

しかし、僕が口にしようとしていたことを、確かに代弁していて、顔をあげる。

ただの黒一色の、何も見えないはずのその場所に。
全身闇色の、肌すらも黒い、おさげの女の子の姿があった。

「何奴っ!?!」

鋭い、リオンの声。

ダメだ、刺激しちゃいけない!

叫びたかったけど、言葉にはならない。

「分かっているでしょう? たしが誰か、なんて」

いや、あった、と言う表現は正しくないのかもしれない。

彼女は闇そのものだった。

この世界そのものだった。

だけど確かに、そこに息づいている。

「……ベルを捕らえ、王子を誘いこんだ輩は、貴様か?」

「ええ、そうよ。……もっとも、こんなあっさり釣れるとは思わなかったけど」

「何が目的だ?」

そして、ディアがそう聞いた瞬間!

「たいちよーっ、来ます!」

ぐん、と大気を圧迫するように針さすような、いつか感じた気配が広がる。

モトカが僕を大声で呼んでいるのに……身体が動かない。

「決まってるでしょう、紅恩寺吟也さん？　ここであなたを殺すの。あなたは危険だから。わたしと同じように……人にはない高潔な魂を持ちながら、人間を愛してしまっあやかた妖。
このままじゃあなたは世界の脅威になる。完なる罪すら、惑わせる稀有な存在に」

何を言ってるんだ？

……分からない。

その言葉が、理解できない。

ただ、怖かった。

なんでもいいから、早くこの闇から解放して欲しかった。

「でも大丈夫。そんな事、全部忘れさせてあげる。……怖い記憶、全部なかったことに、してあげる」

僅かに落胆の色が混じっていたような気もしたけれど。

唐突な、優しげな声。

気付けば僕は、ふらふらとその声のほうへと惹かれていた。

ここから……この闇から、あんな地獄から逃げられるのならって。

「ごしゅじん！　そいつの言葉に耳を貸したらあかん！　すべてを忘れるのいややって、

そう言ったのごしゅじんやんか！　自分だけ逃げるのいややって、
そう言ったのごしゅじんやんか！　ごしゅじんがすべてを忘れたら、

たくさんの女の子が不幸になるんやで！

……この子だって！ きつとたくさん悪さして、不幸になる！」

「……………」

と、その瞬間。

クリアの魂を揺さぶる叫びとともに。

僕の中に、伝わり流れこんできたのは。

クリアに預けたらしい、その記憶、だった……。

25、クリアと、つくもんと言う名の戯れに集った同志

目に映る全ての女の子に、幸せを。

それは、僕が生まれ落ち、幼心に負った傷と後悔に対する、生涯を通じての願いだった。

それを、人は愚かだと叶うべくもない願いだと、身勝手に幼稚な願望だと、言うかもしれない。

だけど、僕は好きだったから。

女の子の幸せな笑顔が好きだったから。

どんなに無謀でも、その想いを貫きたかった。

多分、それは男として誰もが持つてるはずのもの、とか思ってた。

その思いが昇華したのが……何もないと思い込んでいた中学時代だった。

しかしそれは、本当に何もなかったわけじゃなく。

強くなるために、ヒーローになるために入った学園。

それは、時の間にある幻想の世界にあった。

いつか来る世界の破滅を防ぐための救世主を育てる、そんな夢のような学園に、僕は通っていたんだ。

今初めて、あの引越しのときに、引越すことが強くなるための修行だと思い込んでた意味がよく分かる。

そして……僕はその場所で、ひとりの少女と出会った。

自らの命を犠牲にして、世界を救うことを宿命づけられた、そんな少女と。

たぶん、僕は彼女が当たり前に自らの宿命にそっていることが、どうしても許せなかったんだと思う。

たった一人のヒーローを決める戦いで彼女に負けても。

たった一人選ばれた彼女が未練を残さないために。

彼女がこの世界にいたこと、誰も知らなくてもいいように。

あるいは世界を破滅に導く存在が、彼女だけを狙うように。

過ぎた思い出全てを忘れることになっても、僕は納得がいかなかった。

我慢ならなかった。

僕はその僕の想いを、願いを、諦めたくなくて。

だから……託したのだ。

クリアたちに、その全てを。

僕と言う存在意義、その全てを。

「……………」

クリアからの記憶を受け取った僕は、気付けば立ち止まっていた。

そして、闇をじっとみつめる。

今ももう、恐怖心もどこかに消えていた。

「うん、全部思い出した。……そうだよ。僕は全ての女の子たちを幸せにしたい、世界を破滅に導くような悪い子だって、僕が改心させてやるって。幸せな笑顔がみたいって……決めたんだ」

「……っ」

目の前の闇色の女の子は……滲む歓喜とともに、明らかに動揺しているのが分かった。

そのことが、辺りの闇の気配を通して、伝わってくる。

なのに……。

「……もう、遅いわ」

それは、泣きそうな声だった。助けを求めている、そんな声だった。

僕はそんな彼女から視線を外さなかった。ただ、遅くはない！って、訴えていた。

そんな彼女が息のかかるくらい近くまでやってきて。

「さよなら……」

……僕の胸を、貫いても。

僕は、夢を見ているのだろうか、そう思った。

新たな高校生活を迎えるためにはるばる神戸から、かつての故郷である紅葉台へと向かう電車の中でまどろむうちに。

けれど、その夢は妙にリアルで、それでいてファンタジーだった。

ちょっと自分をほめてやりたいくらい、ちっちゃくて可愛くて。

でもってそれぞれが個性的な魅力を持った……妖精？ だろうか。

こんな事を考えてる僕が不謹慎なくらいに。

何やら真剣に、悲壮感すらたたえて、話し合っている。

「たいちよーの様子は？」

「兇刃を受けたのが、【異世】であったのが不幸中の幸いだったようです。取り敢えず……命に別状はないようですが、ここは危険です。いずれは戦場になります。早急な移動が必要でしょう」

桜色のお嬢様っぽい髪型の、軍隊調の口ぶりの女の子が誰にとともに問いかけると。

黒髪ボブの、騎士みみたいな佇まいを見せる女の子が、苦々しげにそう返して。

「異世においてあのような目にあつたとすると……との記憶は？」
「おそらく、元の木阿弥だろう。いや、返すべき記憶を返してしまつた今、もはややり直しはきかない、か」

サムライ口調の銀と翠のツートンカラーな髪の子と、クールだけど派手な虹色ポニーの女の子が、何だか深刻そうに言葉を交わしていて。

その内容はよく分からないことのはずなのに、聞いているだけでやりきれない想いが伝わってくる。

「そんなっ……それではクリアたいいんはっ！」

「あはは。まいったなあ。こんなんでクリア、消えることになるなんて思つてなかつたわ」

そして……雪のような銀色をした三つ編みの女の子が、笑つてる。どうしてかは分からないけど、ひどく胸が痛んだ。

こんな時、夢なら颯爽と駆けつけて、そんな悲しい笑顔を見せる彼女の力になつてやればいいのに、何故かそれができない。

「……あのものは？」

「もはや影すら見当たaraぬでござりまする。あやつめ、【魔物】を野放しにしてゲートごと消えよつた」

ぎりつと、唇噛む音すら聞こえるような悔恨がそこにある。

しばらく、辺りに静寂が満ちて。

「やるべきことは決まったね。こんな時、先生なら言うはずだ。人間たちを、女の子たちを助けると。どうせ散る命なら、男らしく格好よく。そう思わないか、クリアくん？」

「あはは、クリア、女の子やけど」

「もちろん知っているとも、こういうのはノリだよ」

何気ないやり取り。お互いに笑顔だったけど、やっぱりなんだか悲しくて。

「決まり、ですね。『つくもん』なんてくくりは王子の遊び心でしたが……せつかくですから、ここは一連托生、ということだ」

「え？そ、それって……」

「リオンたちは、との願いに応えるべきもの。しかし、今のままではそれもままならぬ」

「で、でもっ、そんなんしたらっ……」

「もともと、記憶を預かるために集まったんだ。結果がどうあれ、こうなることは定められていたこと。ならば美しく舞台上が上がってやるっじゃないか、なあ？」

クールで派手な女の子が、そう言ってぐるりと一向を見渡す。

ただ一人、戸惑っている真雪の髪の女の子を、頼もしい笑顔が包んでいて……。

「ようっし！ つくもん部隊、最初で最後の出撃であります！クリアたいいん！ たいちよーの護衛は頼むでありますよーっ！」

僕が見た夢とは思えない夢の最後は。

そんな魂の奥底まで届く、声が聞こえた時で……。

「……………」

何とも煮え切らない、どこにぶついたらいいのか分からない怒りの感情の中、僕は目を覚ました。

いや、怒りの矛先は分かっている。

自分自身、だ。

ただの夢のはずなのに、彼女たちの悲しい笑顔が、そう思わせる。

…………と。

そんな事を考えていた僕の頬をなでるように風が吹いた。

「……………」

目の前に広がるのは、遙か上空から見ているような、広大な紅葉台の森。

ここからでも分かるほどに蠢く、【魔物】の大群。

その中に混じって見えるのは、真紅の制服を着た少女たち。

彼女たちは、戦っていた。

いつ終わるとも分らない、傷つき傷つけあう、戦いを。

なんで僕は、こんなものを見ているのだろう。

ただ、見ているのだろう。

それが、悔しくて。

なんとかしなくちゃって気持ち^が僕を支配する。

すると。

その戦いの真っ只中に、僕のその気持ちを代弁するかのように切り込んでゆく、4色の光があった。

それは……【魔物】でもなく、人でもなく。

煙る美しさを沸き立たせる、高潔な魂を持つ妖^{あやかし}。

翠緑の光。

大木をも凌駕する、すべらかな光沢を放つ鋼の戦場刀を掲げる武士^{もののふ}。ただただ圧倒的な力で、【魔物】に鉄槌を下す。

玉虫色の光。

大地からいでし、八首八頭の竜。

巨大な顎によつて、大地ごと【魔物】どもを食い尽くす。

黒真珠の光。

森の陰に潜みし、意志のある闇。

時をも切り裂く風が去れば、その跡に立つものはなく。

桜色の光。

絢爛なる舞踊りし白仮面。

変幻なる鉄鉾が、艶やかに【魔物】を霞と化す。

4つの光は、やがて人間の前に姿を現すだろう。

人は彼らを見て、どう思うだろう？

味方だと思っただろうか？

敵だと思っただろうか？

お互いは近しく、それでいて遠すぎて。

……嫌な予感がした。

今のこの状況よりも、もっと。

それが何であるのかまるで分からないのに。

何かをしなくちゃいけない、そんな強迫観念に囚われる僕がいて……。

26、カチユと一緒に、今まで忘れられてた記憶

僕が、言い知れぬ焦燥感に苛まれる中。

不意に訪れたのは、強い風と、目前に影さす気配。

はっとなって顔をあげると、そこには数体の翼持つ怪鳥がいる。

「空飛ぶ【魔物】っ？」

「……えっ!？」

その時頭上から聞こえたのは、焦りを滲ませた女の子の声。

僕は驚き息をのみ、今更になってようやく今の自分の状況を理解する。

いつの間にか僕は空を飛んでいて……頭の上に誰がいる!

視線を必死に上へと向けるけど、見えるのはプリズムを蒔く、とんぼのような透き通った羽だけで。

「……あっ、ごしゅじん! 目え覚ましたん? ああ、いや。よーわからんと思うけど、暴れんというてな。落つたらたいへんなことになる。あと少しの辛抱やから」

親しげな感情の混じった声。

ただどすぐに躊躇ってみせて、淋しげに悲しげに、それでも心に染みるようなあつたかい声でそう言った。

パニックになり暴れかけた身体が、ぴたりと大人しくなる。

言葉の通り、落ちたらただではすまないということもあつたけど。その声の主に害がないことを、どこかで分かっていたからなのかもしれない。

「……………これは、いったい？」
とりあえず何が何だか分からなかったから、気付けばそう呟いていた。

「ごめんな。すぐすむから。悪い夢や思て、ちょいと我慢してな」
返ってくるその言葉はたぶん、僕の問いに対しての答えじゃなかったんだと思う。

さらに何かを言おうとしたけれど。
それは、けたたましい【魔物】の鳴き声に遮られた。

「くっ、ちよつと飛ばすで！」
ぐん、と急降下する気配。
さっきとは比べ物にならない風の圧力に目をしばたかせていると、あつという間に近くなる地面。

かと思つたら、重力に逆らうように再び上昇。
ちっ、と足が木々の歯に触れるその急激な動きに、僕を目を回して
いたけれど。
追っていた【魔物】たち数体も、止まりきれずそのまま森に突っ込んでいく。

このスピードなら逃げ切れるかもしれない。
僕は、その胃の持ち上がる感覚に高揚し、安直にそう思っていたけ

れど。

がくんと、いきなり急ブレーキがかかり前のめりになって、一気に高度が下がった。

そして、そのままきりもみしながら墜落してしまつて……。

「いててっ」

それでも翼による浮力が残っていたのか、たいした怪我はないようだった。

腰をさすりながらよろよろと起き上がる。

「……あっ」

と、そこで目に入ったのは。

プリズムの粉を撒きながら……その小さな身体の何倍も大きい翼に埋もれるように倒れ伏す、銀色の髪の子の姿だった。

「お、おいっ。だ、大丈夫か？」

僕は慌てて、駆け寄り両手で抱き上げる。

すると、どういふカラクリなのか、すうつと翼が風に紛れて消えた。

「……うっ。あ、ごしゅじん」

女の子は弱々しい口調で呟いて、僕を見上げる。

……ごしゅじん。

今までそう呼ばれたことなどないはずなのに。

その時何故か僕は、自分のことをそう呼んでいるのだという確信があった。

「……平気？」

「うん、うん。もうちょっとやったのにな。やっぱりクリア、よわよわやなあ」

僕の問いかけに、女の子はバツが悪そうに呟いて、よろよると立ち上がる。

「クリア？ 君はクリアっていうの？」

心の底に引つかかる、その名前。

何だか僕は、忘れてはいけないことを忘れていく気がして。

思い出さなくちゃいけないことがあるような気がして、必死に記憶の紐を辿る。

だけど、そこには何も無い。

真っ暗な闇だけが、視界を塞いでいる。

「うん、そうや。ごしゅじんがつけてくれた……名前やで」

そう言って笑う女の子。

その声は、明らかに傷ついていた。

悲しそうだった。

クリアという女の子は、泣いているようにも見えた。

「……っ」

ぐっと、心臓を掴まれるような思いがした。

僕の心の奥底にあって溶けないイメージ。

どことも知れない遠い遠い場所で、ひとりぼっちで泣いている女の子。

大切な妹……僕の家族。

なのに、助けてやることも、涙を拭いてやることも、あたたかい声をかけてあげることが、僕にはできなかった。

その、名前しか知らない女の子。

何故だか分からないけど、目の前の小さな小さな少女とダブった。もうこれ以上、こんな顔をさせちゃいけないって……そう思った。

だけど……。

僕が何か行動を起こす前に。

脳天を揺るがすような、【魔物】の鳴き声が頭上から響いた。続いて、獰猛な喉を鳴らす、猛獣の声。

「くっ、しつこいやつらやなっ」

クリアという名の女の子は、焦りの滲んだ顔で僕を心配げにかえりみた後、再び背中に七色の翼を宿す。

そして……追ってきた数体の怪鳥と、その声を聞きつけてやってきた刃みたいな大きな牙を持った青色のトラの前に立ちはだかった。僕の姿を、覆い隠すようにして。

「さあ、早く逃げるんやっ。思っし反対側やで！ 境界線のことまでっ！」

そう叫ぶ女の子は、もう僕のことを見ていなかった。

見えるのは、僅かに震える七色の翼。

細かく細かく丁寧に編みこんである、白銀色の三つ編み。

それは、男のくせについて馬鹿にされても、気に入ってた僕の編み方と同じで。

「うわあああつ！」
気付けば僕は絶叫し、駆け出していた。
そんな女の子の前に立つように。

「アホウっ、な、なにしてんっ！」
その突然の行動は、彼女の言う通りアホなことだったんだろう。
怪鳥の鋭い爪が、トラの魔物の獰猛な牙が、為す術なく僕に襲い掛
かって……。

「フレイ・バインド
《綴気》っ」

しかし。その爪も牙も、僕には届かなかった。
かわりに聞こえたのは、耳に入るだけで眠気を誘うような声と、マ
シガンマシンガンの連射にも似た激しく打ち鳴らす金属音。

おそろおそろ顔をあげると、目に入ったのは重なり合ってバツテン
をつくる、巨大な鉄の棒。
いや、それは巨大なホツチキスの針だった……が、魔物たちを貫き
吹き飛ばして地面に縫い付けているのが見える。

「もう、危なっかしいっいたらありやしないっす。思わず目が覚めち
やっただつすよー……なんつって。

あふ、眠い」

「……あ」

「か、カチュはん!？」

そう言っつてブレザーの左下のポケットから、眠気まなこのまま顔を
出す、長い長いクリーム色の髪の毛の小さな女の子。

それは、突然のことなのに、思ったほど僕の中に驚きはなく。

「しっかし、やんなつちやうつすよねー。みんなつたらすつかり
カチユのこといないいで通夜みたいな会話してるんすから。」

カチユがこんなに眠くて……あふう、大変な思いしてるつてのに。」

そのまま緩慢にそんなことをぶつぶつ言いながら僕の服の上を這い
上がつて、左肩まできても当たり前のように受け入れている僕がい
て。

「ま、敵を欺くならまず味方からつて言いますしね。あの敵さ
んもうまく騙されてくれたみたいすし……はふ、これで晴れて眠
気から解放されるつてものつすよー。」

流石にカチユのデリケートな身体で、ボスの記憶を全て預かるのは
「……つらかつたつす」

「え？ そ、それつて」

そして。小さな彼女は、自分の偉業を自慢するように、そんな事を
呟いて。

倒れこむように、もっと小さな唇が、僕の頬に触れた……その瞬間。

「……いつ!？」

まるで、洪水のように流れ込んでくる記憶。

それは……僕の記憶だった。

僕の家、紅恩寺家は千年続く名家で。

ただ……ちよつと普通の名家とは毛色が違っていた。

何故ならば、名家は名家でも人間の言うそれではなく。

【魔物】が跋扈するようになるより遙か昔からこの地に暮らし、根付いていた人間ならざる超常の存在、【妖の人】^{ストラウス}の名家だった。

僕たち【妖の人】の一族は、世界の陰日向に、ひっそり隠れて住む闇の住人……なんてことはなく。

かなり昔から、人間との共存を図る努力をしてきた。

時には人と同じ形をとり、人の社会に混じり。

時には自然や、そこにある『もの』として。

その中でも紅恩寺家は、率先して人との共存を望んだ一族で。

これでもか、と言うくらいに人間に溶け込もうとした。

人と【妖の人】の違いってなんだ？って思うくらいに。

特に、人間の作り出した人工物……機械とか車とかコンピューターとかが大好きだった。

たぶん、それらを扱う仕事につくことで自分たちは人間なんだって、人間が大好きだって、自信を持ちたかつたんだと思う。

だけど。そんな自信も、ある時突然現れた【魔物】によって、大きく揺らぐことになる。

共存ではなく、ただ滅すべき対象として人間を見ていた【魔物】たち。

多くの人が死んだ。

【妖の人】たちは、大切な仲間を、友人を、家族を守るために必死に戦った。

だが、人外の姿と化し戦う【妖の人】たちを、人間たちは仲間だと認めてはくれなかった。

【魔物】も【妖の人】も同じ、人間の敵だと、そう認識するようになつた。

誰も彼もがそうだったわけではないけれど。

その認識による悪影響の拡大を避けるため、紅恩寺家……吟也の祖父に当たる人物は、紅葉台から去ることを決めた。

対【魔物】の本部が作られたこの紅葉台から。

【妖の人】の多く隠れ棲まう、神戸へと。

それは、吟也たちが引越しを決めた何十年も前の話であることは、余談であるが。

去つた理由は単純だった。

【妖の人】に、紅恩寺家に、人間たちと敵対する気はなかったからだ。

ただ人間と、面白おかしく過ごしたかっただけだから。

だから、紅恩寺家は。

人間たちに対【魔物】のための力を与えて。

ひっそりと見守ることに……決めたのだ。

27、クリアと吟也のあっけないオチ

ガチンっ。

聞こえる、ホツチキスが何かを留める、そんな音。続いてせりあがってくる、激痛。

「つてええええええっ!!！」
我に返ったその瞬間、すごい頬の痛みに、思わず飛び上がって悲鳴を上げる僕。

「な、な、なんてことをするんや！ カチユっ！」
「え〜と、ホツトなキス？ ホツチキスなだけに……」
「うまいっ！ や、の、う、て！ うまいことあるかっ、ああっ！
？ 血いどばどば出とるっ！」
必死に頬をこすり、半泣きで声をあげる僕。

……っつて、あれ？
なんか自分に、いろいろ違和感が……。

「ぐしゅじん！ 記憶がっ、記憶、戻ったん!? ど、どうして？」
目の前で、驚きの表情とともに、クリアが涙をぼろぼろとこぼしている。

白銀色の今にも溶けて消えてしまいそうな、髪を揺らして。

「だ〜か〜ら〜。そんなこともあるつかとー……いや、いつか。戻った理由なんて〜。」

ああ、でもやっぱりねむい〜。うん、なんかいろいろ、どうでもよ

くなってきたっす……」
カチュがぶつぶつと呟いていたけど、ほんとに眠くなったのか、ひとあくびして、ポケットの中で丸まってしまふ。

「あ、うん。クリアがそんな泣いottaから、忘れとる場合ちゃうやん、思てな」

「ウソばっかやな、ごしゅじんは。しかもごしゅじんの関西弁おかしいで」

「クリアに言われたないな」

僕がそつとクリアの涙を拭い、そう言つて苦笑すると。

泣き笑いの表情で言うに事欠いてそんな言葉を返してくるクリア。

そう、違和感の正体は、そのことだった。

クリアと同じな、ニセっぽい関西弁。

そして、入れ替わるように……熟した紅に染まる、紅恩寺の一族を表わす、赤色の髪。

本当の、本来の僕が戻ってきた、確かな証拠。

それは同時に、クリアが生れ落ちて与えられた使命……。

僕がクリアにしたお願いが叶った、ということの意味について。

「さて……この状況、とつとと片付けんで」

僕は話題を変えるように、そう呟く。

「え？ なんと、どうやって？」

「そつやな。まずは、みんなのよく見えるところ、行こか。クリア、まだ行けるか？」

「何言つてん！ 行けるに決まってるやん！」
強がりが、痛かった。

でも、この戦いを終わらせる義務が僕にはある。
だから……僕はそれ以上は何も言わず頷いて。

クリアの翼を借り、再び空を舞ったんだ……。

眼下に、激しさを増した戦場が、はっきりと見える。

潤ちゃんが勇ましい声をあげ、僕の作った槍を掲げ【魔物】に向かっている。

真っ赤な【本校】制服を着た若穂が、美音先輩に背を預け、ともに戦っている。

塩生さんが、なつめちゃんと手を取り合って……強力な【曲法】を用いて敵をなぎ払っている。

モトカが、リオンが、ディアが、ベルが。

それぞれが『つくもん』の枠を外れ、真の姿をなし、

そんな彼女たちをひっそりと援護するように戦っている。

その姿は……美しかった。

だけど、できるのなら見たくない光景。
終わらせたい光景でもある。

「クリア、特等席やで。特等席で僕のものごっついヒーローっぷり、
見たるからな」

「……うん」

僕の言葉に、かすかな声でクリアが呟く。

もう、あまり時間がないらしい。

ぬくもりが……弱くなってきている。

僕は意を決して。

「アルミクティ・グロウフィリア
《全言統制》っ!!」

自らの、【妖の人】としての力を解放した。

この地に棲まう、【妖の人】。

その長となるべき紅恩寺の一族たった一人の、後継者たる力を。

それは……言うなれば巨大な【異世】、だった。
この紅葉台を覆いつくすほどの。

それは…紅恩寺吟也の世界。
紅恩寺吟也の言霊が支配する、絶対領域。

僕は叫んだ。

【魔物】に向かつて。

『……この地、我ら妖魔守りし地なり！
去を命じる！
【魔物】たちよ、即刻退

望むものは主らの故郷へと還す扉、開こう！
望まぬのなら！ この地にその存在、すでになきものと思え！』

その声は、余りなく……この世界に息づくものに届いただろう。

そして、その言葉が終わるとともに。

世界が鳴動し、その中心に位置する山のでっぺんに光の筋が走った。
それは、【魔物】をあるべき場所へ還す、巨大な【旅扉】。

やがて【魔物】たちは。

天の啓示に従うがごとく。

吸い込まれるように、光のその向こうへと、還ってゆく……。

「なんや、きれいな光やなあ……すごいなあ、ししゅじんは。さす
が……クリアの……」

聞こえてくるのは。

クリアのそんな、嬉しそうな声。

だけどその瞬間。

消えるぬくもり。

僕を包む重力。

そして……。

こと、っと。

頭から滑り落ちて、耳にかかる、サングラス。

……もう、動かない、サングラス。

「……っ」

僕は……落ちてゆく。
自分を抱くように。
涙の顔を隠すように。

その、抜け殻を抱きながら……。

27、クリアと吟也のあっけないオチ（後書き）

次で最後です。

短いと言うか……足りてないですね。

一応、言い訳というか理由はないこともないんですけど。
各自脳内補完じゃ……ダメかなあ。

28、かがみ姉さんとヒロローグと言つ名のふりだし

クリアはもともと、たくさんわるいことをしてきた、わるい子でした。

その罪を償うために、ずっと、ずっと、暗くてさむくて怖いところにいきました。

今はその罪がどんなものだったのか、忘れるほど長い時間、クリアはそこにいて。

そんな日々が、何も考えられなくなって消えてしまつまで……続くものだと思っていました。

それなのに。

気がついたらクリアは、サングラスになっていたのです。

あいぽつどつきの、最新式です。

なんでそんなことになったのかは、よく分かりません。

なんとなく、クリアはサングラスに生まれ変わったのだと、そう思うことにしていました。

それからまたしばらく時がすぎて。

クリアは、一人の女の子に買われました。

可愛い羽の生えた、天使さんです。

どうやら天使さんは、クリアを一人の男の子にあげるためのプレゼントとして、買ったみたいで。

その男の子こそが、クリアのごしゅじん、でした。

そんなごしゅじんは……不思議な力を持っていました。
なんと昔のクリアと同じ、【妖の人】だったのです。

しゃべることも動くことも何にもできないただの『もの』であるク
リアに気がついて。

前世で悪いことしたからそんな姿にされたんやろ、って、笑います。

それは、なんだかあったかい笑顔で。

ただの『もの』であるクリアには何も答えられなかったけど。

それだけで……ごしゅじんがごしゅじんでよかったなって思ったの
は事実で。

それから……クリアとごしゅじんの生活がはじまりました。

人間が……特に女の子が大好きなごしゅじんはのまわりには。

いつもたくさんの人と、生まれたてのクリアからすれば先輩になる、
たくさん『もの』について【妖の人】たちがいました。

不思議で、ときどきして、おもしろい。

そんな世界での生活です。

なのに……。

その楽しい日々は、ずっとは続きませんでした。

ごしゅじんやごしゅじんのともだちみんなが。

その世界から帰らなくちゃいけなくなっただからです。

楽しかった記憶を、忘れて。

ただ一人、クリアを買ってくれた天使さんを除いては。

クリアは、そんなこと嫌でした。

でも、それは言葉にはなりません。

だけど、ごしゅじんはもつと嫌だったんじゃないかと思えます。

天使さんは、ごしゅじんの一番の大好きな、おともだちだったから。

だから……楽しかった記憶を絶対に忘れたくないって。

ごしゅじんはクリアたちをお願いをしたのです。

『僕が僕に戻るまで……僕をよろしく頼む』って。

そのためにごしゅじんは、クリアにクリアと言う名前をくれました。名前には、魂があるからだそうです。

すると、クリアはしゃべることも、動くこともできるようになったのです。

それがクリアがクリアになった、瞬間です。

ごしゅじんの望む……ごしゅじんに記憶を返すまでの、かりそめの存在として。

クリアは他のみんなと違って、生まれたばかりのまだ新しい『もの』だったから。

ごしゅじんに記憶を返して役目を終えればただの『もの』に戻るの
は分かっていたけれど。

それでも構いませんでした。

ずっと夢見ていたことが、かりそめでも叶うのだから……。

気がついたら、僕は地面に足をつけ、立っていた。

もうすっかり、世界を僕が作り出した【異世】ではない、ただの世界に戻っている。

「……今の、記憶は？」

もちろん、僕の記憶じゃない。

それは、クリアの記憶だった。

「ああ……そうっす。クリアちゃんの記憶も、一応預かっただけよー」

それは、独り言のつもりだったけど。

いつの間にか目を覚ましていたカチュが、そんな事を呟く。

「まさかー、このまま終わるわけじゃ、ないっすよね……？ ボスともあるっお方が」

そして、窺うようにそう言われて。

僕は、きつと顔をあげた。

そこにはもう涙はなく、どっちかと言うと怒りが占めている。

「当たり前！ やろうがっ！」

僕は叫び、駆け出す。

このまま終わらせないために、ある場所へと。

僕という人物を、クリアによく分からせるために。

辿り着いたのは、自宅だった。

僕は躊躇なく扉を開け、リビングへ向かう。

するとそこには。

まるで全てを分かって待っていたような、かがみ姉さんがそこにいた。

僕のお茶まで用意して。

「僕の願いを叶えに来たで、かがみ姉さん」

「願いですか？ つくもんを7人集めたら……って言う？」

この期に及んでとぼけるかがみ姉さん。

いや、もしかしたら本気なのかもしれないけど……。

「そう、とも言えるけど、違う、とも言えるな。だって、つくもんってという言葉自体僕が勝手につけたパチモンやし、7人なんてくく

りだって、もともとあつてないものやる？　かがみ姉さんは、そもそもつくもんやないしな」

「……いつ気付いたんですか？」

「今さつきって言いたいところやけど。確信したんは、ウチに潤ちやんが来たとき、やな。」

そもそもひとりだけ人の姿とつとるし、他のみんなと違って一人で買い物とか行つとるし、僕と一緒に行動しなかつたんも他の人に見えるつてバレルの、防ぐためやる？」

「あらまあ……全てお見通しですか」
感心したようにかがみ姉さん。

しかし、本題はここからだつた。

「で……だ、そんなかがみ姉さんは、クリアが消えよつた理由、知つとるか？」

「知ってる……ですか？　おやかたさまが、クリアさんに『記憶が戻るまで』って言ったからじゃありませんか？」

まで、を強調してかがみ姉さんは言う。

「戻つたから、消えたつてことか？　名前の通り純粹といふかなんというか……」

「そんな言い方ないじゃありませんか？　『もの』から解き放たれ、生まれた彼女たちにとって、

おやかたさまの言葉は絶対なんです。そう信じたら……それが全てなんですよ？」

クリアのために、怒りを露わにするかがみ姉さん。

つまりクリアは、自分の中で『記憶が戻るまで』と思ひ込み、決めてしまつたんだろう。

だつたら、尚更。

「僕がそんな事、はい、そうですね。さうですかって納得すると思っつか？」
「……………」

返す言葉は、かがみ姉さん以上の怒りに溢れていただろう。
でもそれは、自分自身への怒りだ。

その怒りを、かがみ姉さんにぶつけてしまってるのが嫌で。
気を取り直すように、僕は言葉を続ける。

「そんなわけでもやな、かがみ姉さんをお願いがあるんやけど」
「願い……………なんでしょう？」

「分かってるやろ？ 時を操る、時鏡の【妖の人】の、姉さんなら……………時を戻して欲しい。クリアの時間を」

「それがどういふことか、分かってるんですか？ また……………全てを忘れてしまうことになるんですよ？ いえ。結局、同じことの繰り返しになるかもしれせん」

僕の言葉に、さらに真剣な眼差しを向けてくるかがみ姉さん。
僕はそれに苦笑して。

「分かつとる。まあ、みんなの前で正体晒しちゃったしな、それも
ありかと思っけど。せつかく戻ったんやしそんなことはせんよ？」
「え？でも、今……………」

僕の言っていることがよく分からなかったんだろう。
打って変わってきよとんとするかがみ姉さんに、種明かしをするみ
たいに、言葉を返す。

「言っただやろ？ クリアの時間をつて……………ほら、たとえばやな。」

こうしてサングラスに戻ってしもたクリアを机の上に置いたとして、この部分だけ、とかできんと？ 何かそんな秘密的な道具あったやろ？」

「……あつ」

「さくすが、ボスつすねー。よくもまあ、そんな事思いつくもんだなあ……」

しばらく呆けていたかがみ姉さんは、そんな手があったかとはばかりに頷いてみせて。

ちよつと呆れたように、カチュが呟く。

と……。

「たいちよーっ！ おいてくなんてひどいでありますーっ！」

いきなり僕のすぐ目の前、空気が歪んだかと思うと、ぽかっと闇色の空洞ができて。

モトカが、リオンか、ディアか、ベルが、次々と転がり出てきた。

「うう、あやうくつかまるところでござった」

「全く、先生は自分勝手極まりないね。いつの間にか復活したかと思ったら、ディアたちの奮闘など全くの無視であっけなくカタをつけてしまうのだからね」

そして、僕の姿を発見するや否や、口々に非難のセリフを吐く。

「いや、まあ……ベルがいるからな。ベルの力があれば、心配ないって信じてたし」

「はっ、もったいなきお言葉」
「くっ……こう考えると、記憶なかったほうが可愛げがあったかもしれないね」

ベルのつくもんとしての力の一つに、瞬間移動みたいな力があるのだ。

まあ、そうは言っても万能じゃなくて、僕のいるとこに限られるわけなんだけど。

それを聞いたベルは、堅苦しくも得意げで。

そんな様子を見てたディアが、不満そうにそうひとりごちる。

何だかあっという間に賑やかになった、お茶の間だったけど。

ぽつんと置かれたサングラスが寂しくて。

一刻も早く文句言ってやらなくちゃって、そう思ってた。

「よし！ さっそく全員揃ったところで！ クリア奪回作戦、開始するで！」

「ボス、また何かたくらんでるっすね。悪い顔だあ……」

そして……。

突然宣言した僕の言葉と、カチユの眠そうな呟きを引き金にして。

その作戦は、始まったんだ……。

それから、幾日経って。

ついに、僕自身の足りない言葉のせいで役目を終えたと思い、消えゆくとするクリアに。

今までののは夢でした！　なんていうドッキリ作戦（僕命名）の成功が目前に迫ってくるころまでやってきた。

僕は今再び、駅前にあるショッピングセンター……『道志摩屋』の中にある、ジャンクショップの前にいる。

そこには、てんてこ舞いで僕らが奔走していたことなど知る由もないクリアと、作戦の肝となるかがみ姉さんがいるのだ。

「終わりましたわ、おやかたさま」

と、そんな事を考えてる僕の前に、かがみ姉さんが今回の作戦において最も重要な……クリアだけの時間を戻す、といった一仕事を終えて戻ってくる。

「首尾はどじや？」

「ばっちり、ですわ。ちょっと、お店の人が怪訝な顔をしてましたけど……」

僕がそう訪ねると、はにかんでOKのサインをくれるかがみ姉さん。

「そんなら、最後の仕上げを始めよか」

「ええ。早く言ってあげてください」

「そやな。ちょっと遅れて困らせてみるのもありかもしらへんけど」
「全く……おやかたさまってば。人が悪いんですから」

この作戦が際終局面に至るまでの苦勞を思いだしたからなのか。
なんだか複雑な苦笑を浮かべるかがみ姉さん。

その言葉には、僕が提示した作戦についてのことも含まれているの
だろう。

作戦……それはもう、長つたらしい正式名称にすべてが集約されて
いるといつてもいい。

僕の記憶が戻るまで、という契約を純粹なまでに信じて『もの』の
姿に戻ってしまったクリア。

クリアはきつと、サングラスに戻ってすぐに気づいただろう。

クリアがこうして消えてしまったことが、僕の望んでいた……願
いに反する事だつてことを。

自惚れでなく、クリアがその事をずっと後悔し続けるだろうことを、
僕は分かつていて。

クリアをそんな目に合わせた自分が許せなくて。

だから……僕はやり直すことにしたのだ。
振り出しに戻るクリアにあわせるように。

その際、かがみ姉さんが言ったように僕もすべてを忘れてしまつた
ら、結果は同じ事になってしまつかもしれない。

そんなわけで僕が代わりにしたことは、クリアと出会ってからの紅

葉台で過ごし、出会った人たちの記憶から、僕という存在を消すことだった。

そこには【妖の人】としての正体を明かしてしまったことによって、僕自身がここにいらなくなる事態を回避しようと言う打算も働いていて。

思い出すのは、記憶を消す瞬間の、潤ちゃんを初めとする紅葉台で出会った人たちの、驚き、呆気に取られた表情。

正しくかがみ姉さんの言う通り、僕は自分勝手に人の悪いヤツなんだとつくづく思う。

ただそれは、言葉で言うほど簡単じゃなかったのも確かだ。

【妖の人】の長である紅恩寺家の跡取りとしての力、《全言統制》。まるで神のごとく、僕の思うままになる【異世】を創り出すその力で、地道に一人一人、紅葉台に来てからの僕を忘れてもらったんだけど。

そのせいで力を使いすぎすっかり燃え尽きて。

赤かった髪は、馴染みの白銀色になってしまっていた。

さらに、全身が筋肉痛のように身体が言うことを聞かず、さながら老人のようで。

まあ、髪に関してはそれはそれで都合がいいわけだけだ。

後は、僕たちも振り出しに戻る……そのフリをするだけだった。

他のつくもんのみなさんには、これからなぞるだろうクリアの為に日々備えて待機してもらっていて。

「そんなん、今更やる?」

僕が笑顔でそう返すと、かがみ姉さんは困った顔をしてちよつと笑って。

「……では、わたくしは先に戻っていますね」

そっくり残し、去っていく。

僕はかがみ姉さんを見送り……緩む顔をちよつと引き締めて。

「お、ジャンク屋まである。さすが紅葉台のお膝元。こんな昔なかつたよなあ……」

303

ちよつとわざとらしい声をあげながら。

僕は、これから始まる、クリアとの新しい日々に向けて。
歩き出していったのだった……。

それは、春を終え、夏を迎えようとする、ある日の出来事。

28、かがみ姉さんとエピソードと言つ名のふりだし（後書き）

あとがき

ここまで銀色クリアデイズをご覧いただき、ありがとうございます！
毎日100人以上もの方に見ていただいて、テンション高く最後まで進められました。

27話のあとがきでも少し述べましたが。

後半になると急に駆け足になる癖もあり、消化不良な点と言つかが都合主義なところがあつたような気がします。

わかつていながら推敲、肉付けをしなかつたのはめんどくさ……ゲ
フンげフン、

このお話の別視点の作品を現在構想中である、と言つ理由がありません。

公開は忘れるくらい先になると思いますが……好きなジャンルなので、いつかは披露の機会もあるかと思えます。

さて、改めてこんな事を言つのは差し出がましいというかおこがましいのですが、

我が稚作には足りない点がこれでもかというくらいにあると思えます。

そしてそんな本人で分かつていて転がしているものとは別に、読み手さまがお気づきのダメな点残念な点が多々あると思われれます。

もしよろしければ……どうしようもなく暇で暇でどうしようもないときとか、

一言アドバースがいただければ、嬉しいです。

やっぱり、感想ほしいならそう言つた方がいいのかなと、少し思っ

たもので。

以上、伊吹ノアでした。
また次作で、お目汚しをば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7604i/>

銀色クリアデイズ

2011年1月11日11時44分発行